

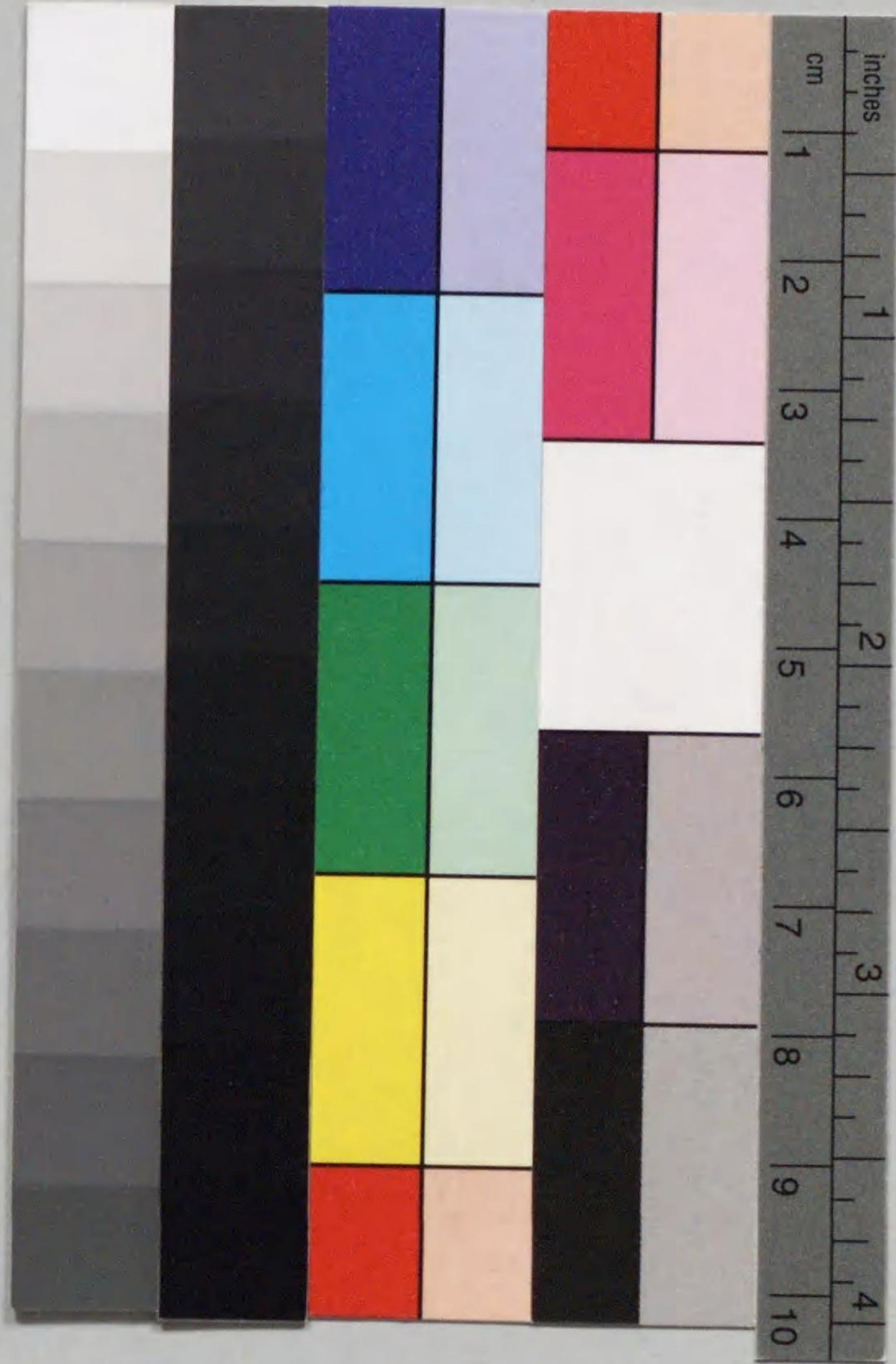
081

Y978

T



00974915





166

上田焯成集

全

081
Y97A
TII
(36)



数量更正
39.5

974915

緒言

上田秋成は大坂の人、通稱を東作と言ひ、餘齋、無腸、剪枝、畸人、和譯太郎等の號あり。加藤美樹の門に古學を修め、博聞強識、一家の見を具へ、殊に歌文に長じ、興到れば百篇立どころに成る。狷介剛愎にして世と相容れず。商となりては産を破り、醫となりては中道にして廢し、流寓、轆軻、泊然たる寒生涯の裏、諷詠述作以て自ら遣れり。文化六年、七十八歳にして歿す。

秋成の作、其種類一ならずと雖も、本集には専ら其文學上の作物のみを收めたり。諸道聽耳世間猿、世間妾形氣の二書は、作者壯時の戯作にして、八文字屋本の系統を追ひたるもの也。雨月物語は一部の小話集、其豊麗にして、幽玄なる筆致は、後の讀み本作者の典範とする所、蓋し秋成の代表作也。春

雨物語も亦一部の短篇集、或は想像を加へて史實を敘し、或は敘事に寓するに自家の感懐を以てす。癩癡談は、作者愛讀の「伊勢物語」に擬したる秋成一流の批評録、白眼一世を藐視せる作者の面目を觀るべし。藤篋冊子は歌文集にして門人の編纂にかよる。

本集に收むる所は、何れも原本によりて校訂し、送假名を統一し、假名遣は主として歴史的假名遣に據れり。然れども、用字語格等に關しては、妄りに改竄を加へず。

尙ほ「春雨物語」は、京都帝國大學講師富岡謙三氏の厚意により本書に收むる事を得たり。茲に記して謝意を表す。

大正元年八月

校訂者 永井一孝

諸道聽耳世間猿序

彼賢人の仲間法度に、偽めきし眞は語るとも、眞くさき虚言は吐かぬものや。釋迦の藏經、莊子の南華經、うそのまことの眞のうそで、おもはくは我が心より出で、人の口にかはりゆき、黏となり、舐となる。其尾に喰ひつく世の噂を、天に口なく、婆嬖のそしりはしりにも、いは猿の戒を守れば、白痴狙の指ざしにあふ。さらば尻笑の戲草を、朝三暮四の筆まめに書き聚めて、題號を聽耳世間猿と呼ぶ事は、見猿の人の伽ともならんかし。

明和三年いぬのとし

浪華 和譯 太郎

上田秋成集目錄

諸道聽耳世間猿

序……………一

〇一之卷

第一回 要害は間に合はぬ町人の城廓……………一

先祖の武勇は商の懸引浪人の
算盤は指南に二一天作の五百石

第二回 貧乏は神とどまり在す裏貸家……………八

ひとり娘を犠牲にすゑそなへた
百燈より祓ひ出す女房の邪神

第三回 文盲は昔づくりの家藏……………二四

我が目利して買ふ道具は心もとない
凌雲の榜隙居の異見に夜は曙の茶器

〇二之卷

第一回 孝行は力ありたけの相撲取……………三五

稼ぐ肩脊も弟が骨うづき跡から扇ぐ
かち荷物は小山に近き古市の濫團扇

第二回 宗旨は一向目の見えぬ信心者……………三

看經に義太夫節はこつはいな二十
四輩に先だつ子供は白骨の御文

第三回 呑こみは鬼一口の色茶屋……………四〇

撃てどもならぬ内證は冬も裸
の男舞笑ふも道理附髪の間違

〇三之卷

第一回 器量は見るに煩腦の雨舎り……………四七

濡るる袂に玉襪は小比丘尼がつか
ふ薙刀逆けるが勝は町人の奥の手

第二回 身過はあぶない輕業の口上……………三五

鳴いて悔しき麝香の見世物乗合に見
立てられた人相は天津八町の打身藥

第三回 雀は百まで舞子の年寄……………三三

どこぞがめいる坊主客にいひがかりの
卒都婆小町も尻はつまらぬ若衆の惣嫁

○四之卷

第一回 兄弟は氣の合はぬ他人の始……………七一

傳授に抛うつ身代は輕きが上の
麻衣に染め替へし身は三吉野の奥

第二回 評判は黒吉の役者付あひ……………七七

顔見世はづれた江戸下は時知らぬ富
士の峰より越すに越されぬ五十三次

世間妾形氣

序……………二七

○卷之一

第一 人ごころ……………二九

汲みてしられぬ臙夜の酒宴轉び
あふたお手枕は山科の紙蚊帳

第二 やあらめでたや……………二六

元日の拾子が福力三人の
聲がねに一人は得心の男妾

第三 織姫の……………一五

ほつとり者は取つて置の玉手箱喰明
けたあれ鼠をばらひ給へ蠶の守神

○卷之二

第三回 公界は既に三年の喪服……………六四

唐と倭の汐あひは暖饅頭屋がめ
うと中そなた百迄名月の丹藥

○五之卷

第一回 昔は抹香烟たからぬ夜咄……………三三

しまつに困る古狐もうま臭い趣向
の捨良にかゝる遊は下野の殺生石

第二回 祈禱はなでこむ天狗の羽帚……………九

あがる御圖にてんぼの皮一杯はまる
西代の深田は夫よ昔の猪股の小平六

第三回 浮氣は一花嵯峨野の片折戸……………一〇八

大盗人の今同心は殊勝げのなき
古筆の寶物都の錦は故郷の歸咲

第一 雛の酒……………一四二

所は山路の肝いり嬭が附親音を
入れし忍の勤は夫のための假著

第二 敷金の……………一五〇

二百兩は明いた口へ焼餅屋うま過
きた媒も跡は火のふる兩國の花火

第三 若後家の……………一五六

寺參はてつきり仕立物屋が宿
替うはさの高い東山の六本杉

○卷之三

第一 武士の……………一六五

矢たけ心もつまる所は金討つに
うたれぬ敵に尋ね逢うた部屋廻

第二 米市は……………一七三

日本一の大湊に買積の思入空だ
のめなる身の末は八丈の海賊

第三 二度の勤は……………一八〇

定めなき世は蜷川の淵瀬書置
のまことを反古にせぬ女髪結

○卷之四

第一 息子の……………一九九

心はてりふりしれぬ狐の嫁入つ
まゝれた尾の玉つくりは親里

第二 一人娘の……………一九六

奢は末のかれた黄金竹赫夜姫
にはあらぬ今の世の小町形氣

第三 貧苦に……………二〇三

身をしぼる油扇の繪水の流と人
の身はしれがたき深草の歌比丘

○卷之五

青頭巾……………三二一
貧福論……………三二二

春雨物語

- 序……………三三三
- 一 血かたがら……………三三五
- 二 天津處女……………三四五
- 三 海賊……………三五〇
- 四 目一つの神……………三五八
- 五 樊噲……………三六三

癩癖談

自序……………三八一
竹窓書簡……………三八二

雨月物語

序……………二二一

○卷之一

白峯……………二二三
菊花の約……………二三五

○卷之二

淺茅が宿……………二五九
夢應の鯉魚……………二五二

○卷之三

佛法僧……………二六一
吉備津の釜……………二七一

○卷之四

蛇性の淫……………二八五

藤篋冊子

上……………三八三
下……………三九九
跋……………四一五

自序……………四一七
序……………四一九
附言……………四二一

○卷之一

藻屑(屏風歌七十首)……………四二五

○卷之二上

春歌……………四三三
夏歌……………四五二
秋歌……………四五九

○卷之二下

冬歌……………四七三
 雑歌……………四八四

○卷之三

秋山記……………五三三

○卷之四

序……………五五三
 落葉……………五五五
 十雨言(其一)……………五五六
 十雨言(其二)……………五六〇
 花園……………五六二
 年木……………五六六
 御嶽さうじ……………五六八
 初秋……………五八一

○卷之五

中秋……………五八三
 月の前……………五八五
 劔の舞……………五九一
 水無瀬川……………五九七
 郝廉留錢……………五九七
 古戰場……………六〇一
 聽雪(其一)……………六〇五
 聽雪(其二)……………六〇八
 擬李太白春夜宴桃園序……………六一〇
 故郷……………六一二
 硯の銘……………六一八
 風鈴……………六一九
 枕の硯……………六二一
 覆舟硯……………六三〇
 雨かはづ……………六三〇

旌孝記……………六三六

○卷之六

鶉居(其一)……………六四一
 鶉居(其二)……………六四六
 こを梅……………六五三
 嵐山夕曉……………六五六
 秋芽……………六六〇
 枕の流……………六六四
 三餘……………六六八
 よもつ文……………六六九

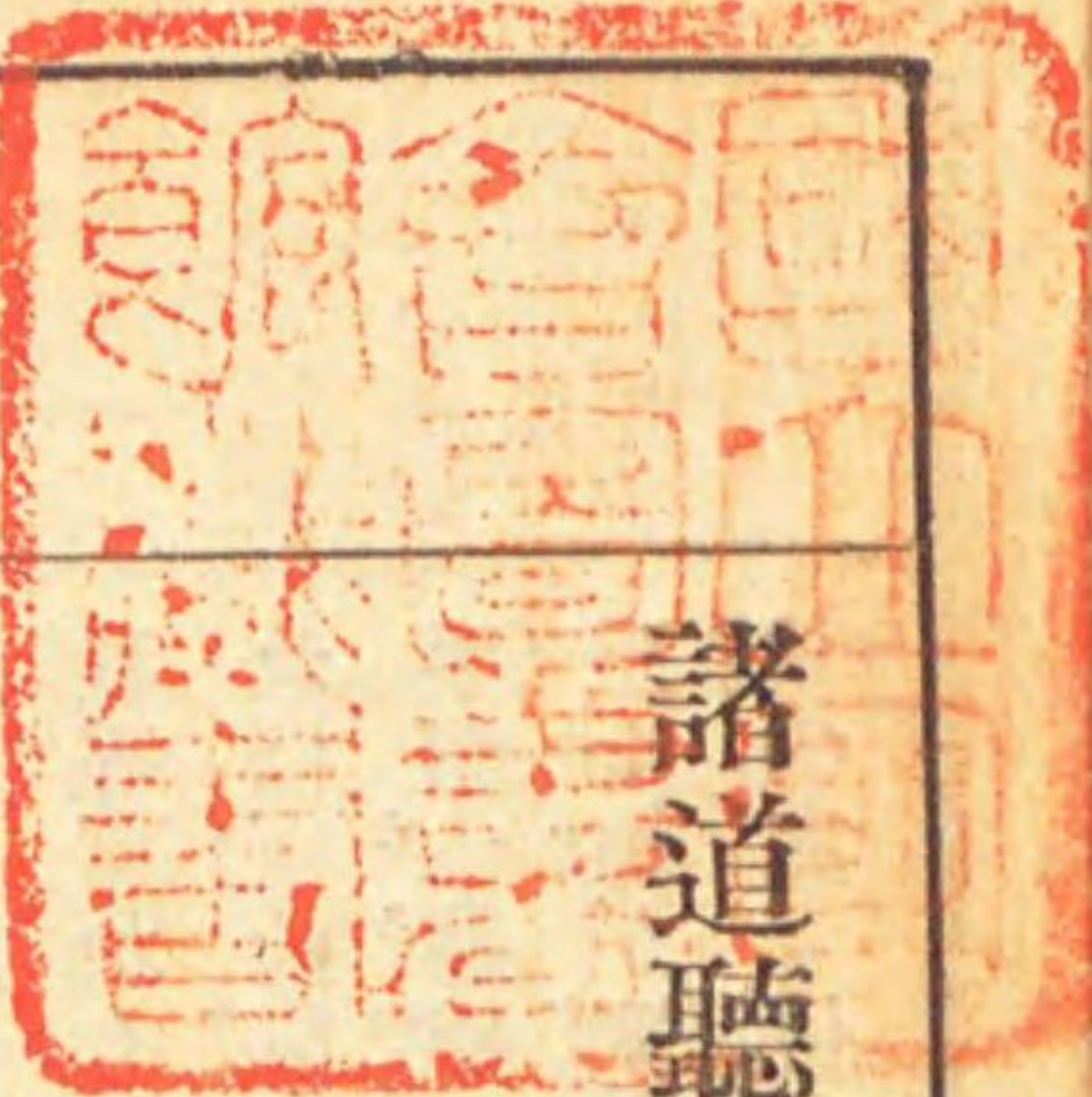
○附録

露分衣……………六七五
 夏野の露……………六八一
 後序……………六八六

諸道聽耳世間猿 一之卷

上田秋成 著

081.6
Y



第一回 要害は間に合はぬ町人の城廓

それ治まれる代の弓は弦をはづし、槍は鞘に錆びついて、古道具屋に幾世経ぬらん。我見ても久しくなりぬるが、金百疋に負けてくれまいかと、一僕つれたお侍が、その槍でまさかのときは、殿の御役にたつ事か。今の世は城より算盤を枕にして、御馬の先で、銀借る工面。今年の二百十日は暴れよかし、御藏米を直段よく賣拂うて、天晴の感狀に預からんと、七星壇に風を祈り、先納銀の催促に、町人が詰め懸けても、樓門に琴を拽らしての請答、これを忠武侯諸譯發明の臣とはいふなり。昔は町人百姓とても武藝を勵みしと見え、小西攝津守は堺の町人より一國一城の主になりたるとかや。其末の分れの家に小

金一百疋
疋は二十五
文
七星壇―北
斗七星を祭
壇
り風を祈る

諸道聽耳世間猿

小西攝津守
一行長

西三十郎とて、今に堺の大小路に角屋敷を構へし藥種問屋、主人の三十郎は未だ若年ながら、先祖の武勇を慕ひ、軍學を好みて不斷一刀を佩しはさみ、居間には城取の砂物をつくりて、兵書あまた机に充滿ち、明暮孫吳が奇計を感じ、かねては大祿も戴く望。萬事の物好猛々しく、一里出るにも鷹匠足袋に武者草鞋、肌の守袋には一寸八歩の念じ佛、刀刃段々壞の御誓忘れさせ給ふなど、すはといふ時身がはりに立つて貰ふ心當、立つにも居るにも身を放さず。店の勘定藥種の高下も知らねば近所の交際も絶えて、毎夜の咄し伽には、町内の端に店がりして居る甲州浪人山本勘六が方へ仕かけて、さまざま兵法を論じ、手前先祖の小西攝津守は賣人の家より起りて、武威を朝鮮國まで輝かせし英雄。其許の先祖山本勘介殿は、木曾の山林より出で軍功を北國の雪に積みし勇者。其末の其許、我等、かく御懇意に御出合申すも、兵の交頼母しう存じますと、威儀を正して言ひ並ぶれば、此勘六は武士の腹に生まれながら、生得劍術を嫌ひ、不鍛錬ゆゑ、浪人のよすがに手習十露盤の指南して、何ぞ壹貫目くひためたらば、商人とも出かけるつもりなれば、三十郎が軍學咄をとんと面白からねど、浪人といふ名に恥ぢて、いか様互に先祖は武勇の家。併し攝津守殿は、手前先祖勘介よりは御大身ほど有つて、器量ははるかに勝つた

八陣の法—
諸葛孔明の
作りし陣形
才覺—工面

繩張—地取
大手—城の
表門
搦手—城の
裏門

大將かと存じまするは、今日の其許の身分藥種問屋で、安樂に暮さるよといふは、是全く先祖の餘光、孔明が八陣の法を殘せしに似て、天晴の大將。先祖の勘介などは、我は發明にもござつたれど、子孫の爲に才覺のわるい男。只今私浪人の身過に、先祖の家業ぢやとて、柴刈も出来ませぬ。まだしも眼も足も満足に産れたが仕合。左様では御座らぬかといはるよを、三十郎怪しからぬ顔にて、それは何した仰せられ分、家業の藥種などは、町人の所作、羨むに足らず。又先祖の小西行重は、もつとも一旦大國は領したれど、いはど猛將と申すもの。勘介殿は陪臣にて終られしかど、名は一天下に隠れなき軍師。既に手前が居宅を去年建直しましたが、あの地取を御覽なされて下され。あれが勘介殿の流義の繩張でござる。大小路通を大手といひ、軒高く兩店に開きて、中をとり放し、寄り来る商人物買を引つとまんず手段、横町は搦手、溝をふかめ、駒よせ袴とうち、溝板は夜々繰引にいたし置きました。其外座敷内藏などにも、寸志ばかり計略をはかり置きましたれど、むさと人に洩さん事を存じまして、大工日雇どもにも他言いたさせぬため、神文を取りましたと、理屈がましく罵るに、勘六こらへ難ねて、それはわるい御合點。此太平の御代に、さまで要害をなされいでも氣遣はござらぬ。今日の

一腰一太刀
一本
五郎政宗一
鎌倉五郎正
宗作の名刀
熨斗目一徳
川時代の禮
服

軍法は店の勘定の懸引、薬種の高下をはかりて賣買めさるゝが、孔明より楠より、智勇兼ね備へた大將と申すもの、手前などが如く、算學では富士の山を崩して海を埋めれば、何十里が間は田地になりて、作物が如何程あがると迄は割出しますれど、元手のない悲しさは、此活計を仕る。世には腹心の淋しい程、無念な事はござらぬ。向後は軍學を止めて、ちと算學をなされたが、肝要との異見得心せず。はてさて御浪人とも覺えぬ。商賣の懸引は手代共が居ますれば、拙者が仕るに及ばず、帳面も證文も此一腰で相濟む事。もし約束を變ずる者には、心覺の五郎政宗一尺八寸、胸元へさし付けて、貸した借らぬの是非を明白に白状いたさせます。腰の抜けた素町人めらの事なれば、命にかへては陳じ申さぬと、兼々謀りをりますれば、ちつとも心を用ひるに及ばず。はて其許の御先祖勘介殿は、左様な卑劣な武士では無かつたに、是を思へば、楠は三代の忠臣、嗚呼と嘆じて其後は咄にも來ざりけり。扱勘六は算學に達して萬事發明なる男と、取つぎせし者ありて、去る西國の御大家へ五十人扶持にて、勘定方を兼ねて金役人のあり付き、出立の日、熨斗目、大小立派に供廻美々敷く、小西三十郎が方へ案内乞うて對面し、拙者儀兼々武邊もうとときとて、嘲弄いたされしかど、かたのごとく出世仕りたり。貴殿にも

あんだら一
馬鹿
かたげ賣一
擔ひ商賣
すげない揆
拶一なきけ
なき揆拶

先達て御異見申した如く、向後は町人相應の算術を勤めて、武道をお止めなさるゝが肝要でござる。お氣にはまるるまいながら、又々寸志を申進せると、暇乞して出で行くを、三十郎鼻であしらひ、何と手代共見たか、世には物好きな大名があるものぢや、あんな侍に高祿をくれるから、我等も追付け天晴の知行で、召出さるゝは確かな事と、夫より愈兵書に眼を留めて、晝夜怠る事なく、倦む日はいつも戎島の波濤へ出で、眞直な針で釣をたれ、此針に魚の懸る時こそ、目の明いた大名が抱には來るなれと、あんだらつくして居る中に、手代共が寄つてかよつて唐物の買ひこみ損に、さしもに山本勘介が繩張も、士卒の爲に落城して、今さら夢が覺むれば、一騎討に打ちなされてつゞく勢もなく、一家一門へも面目なく堺を立退きて、大坂の乳母が方へ便り、やう／＼残りし軍用金十兩ばかりの細元手にて、小間物のかたげ賣、是も口が重たうてはいかず、淨瑠璃、物真似の一つもして、面白をかしう云はねば、何時行つても用は無いと、すげない揆拶ゆるゑ、俄に道頓堀へ入りこみ、役者の聲色の稽古、まだおれが仕さうなは中村吉左衛門ぢやと、立つにも居るにも、花は三吉野人は武士、末世に残る名こそ恥かし。舅殿後に逢はうと、武道の意氣込を忘れかね、是一つを藝にして得意方をかけ廻れば、女中

お初徳兵衛
近松門左
衛門作曾根
崎心中の主
人公
せがまれて
—せまり望
まれて
女楠—吉野
都女楠近松
氏の作
様子—事情
身上—財産
家中—大名
の家來

方が集りかよつて、此方はいつても堅苦しい吉左衛門の物真似ばかりさつしやる、ちと富十郎がお初徳兵衛をして見せさしやれと、せがまれて天窓をかき、富十郎が女楠でもいたしたら、寫して御目にかけてませう。心中事は何も得いたしませぬと断いへば、いづもいづも同じ咄、同じ聲色ではよい商も出来ぬから、いづそ田舎へ一稼と思付いて、彼山本勘六を思出し、其時の異見の深切、あの方へ下つて、先非を悔いて頼んだら、引きそもないものと、小間物仕込みて舟便に西國へ下り、城下へ入りて尋ねれば、勘六今は段々に出世して、五百石の御用人。案内乞うて、私は泉州堺の町人小西三十郎と申す者、勘六様にはお馴染、ちと様子ありて下りました。御逢なされて下さらば、忝しと、云入るにぞ取次して、勘六聞き届け、立關へ出でて對面すれば、變り果てたる三十郎が姿、何も云出さぬ先に、一より十まで涙を流し、御意見を用ひませず、かくの仕合と誤つて改めたる口上に、勘六哀を催し、扱々お心のつきやうが遅さに、あつたら身上を失くし召されたは残念の至。しかし悔みて返らぬこと、馴染と云ひ、身共を頼にはるくとの下向。随分と家中傍輩へ取次して進ずべしと、懇なる詞にぶらさがり、毎日々々一家中をかけ廻り、大分の商をして、かさねくの御世話、忝しと、一禮述べて代金請

しらざ半分
直—價の不明なるは半
價にて買ふ
こと
すあひ—周
旋料

黄石公—秦
の隱者下邳
の圯上にて
張良に兵法
を授けし人

取る段に、口次して遣はしたれば、此方へ三割の口錢を引申すと、算用して渡さるゝに肝を潰し、是は左様になされて下されては、いつかう足のまるる事。有やうは此度御世話下されし商、總高で二割そこらの利分。それを三割お引きなされては、一割の損が参りますると、段々歎いても聞入れず。いや、しらざ半分直といふ事がある、云はど武士の存せぬ小間物、三割の口錢はわづかな事。よい利が無くて濟むものかと、一向取あはぬのみか、其後は御用々々として逢もせねば、三十郎は一生の口惜涙、無念や表裏侍めに欺かれた。過分の御知行を頂きながら、商人のすあひを取るとは、武士の風上にも置けぬ奴。損してすぐ歸らんより、一太刀恨みて立退かんと、義心を鐵石に固めて付規へば、時こそ到れ、山本勘六が登城のかへり、薄暮の木陰より躍出で、手ごろの棒にて乗物を打碎けば、主は見えずあき乗物。こは狼藉者と取りまく家來を、さんぐに打散らせば、残りしは乗物と著替ばかり、智伯にあらぬ琥珀の羽織、せめては是をずんずんに引裂きしは、晋の豫讓が思入。われ此賊を討たずんばと、天に誓ひ毎日々々夜をこめて、城下はづれの土橋の上に、北斗を拜し待ちあかせど、馬の沓の流るゝばかりにて、遂に黄石公は來らず。



第二回 貧乏は神とどまり在す裏貸家

兩部一本地
垂跡の説を
いふ
高野大師一
弘法大師
四刀一刃
は一兩の六
十分の一
湯津の爪櫛
一古代の齒
多き櫛
買がかり一

神は正直の頭にやどり給へば、佛は決定往生とて、尻の穴に心を通はせ給ふ。神佛一體兩部とは高野大師の口車。所詮極樂と高天が原は、京と大坂の違にて、何方へ行つても歡樂の都なるべし。たかき屋にのほりて見れば、瓦焼くなる大坂の上町邊、高原といへるに神とどまりて、石の上古太夫といふ神道者あり。固より唯一の貧乏にて、天の岩戸めきし路地の奥に、一雨の宮風の宮に崩れし窓に、科戸の風を防ぎかねて、月に四刀の家賃さへ、遠かみ惠美ためはらひかねたり。女房はおゆふとて、四十に三四毫けたれど、爪はづれ賤しからず、夫の神心を受繼ぎて、湯津の爪櫛におくれ毛を清め、いつも八重垣を出でずに、しほたらと二人が中の稻田姫。今年十五の桂の眉、名はおしでとつけて、世のうきふしの忘草。手足は花車に育てよも、身には汚れし古裕、せめて質種あるならば、雪花菜の神使、惜しいものぢやとこれ沙汰なり。親古太夫は朝に出でて暮るまで、人の軒に祓ひ給へ、清き身過もかほどまで、佩した鐺のつまりしは、まだいつまでぞ八百日ゆく、濱の眞砂の買がかり、なせど八百つきせねば、頼む力も夏過ぎて、秋の頃よりぶら

買ふことを
約して代金
を拂はずに
あること
根の國に歸
りければ一
死にければ
苦界させよ
一遊女にさ
せよ
涙ごかし一
涙を流して
同情あるや
うに見する
こと
あての槌一
持しするに
槌をかけた
り
肝入一周旋
業者

ぶら病。神なし月の末つかた、遠く根の國へ歸りければ、跡や枕にとり付いて、残る親子が悲しみ、哀といふもあまりあり。野邊の送もやうくと何賣つてやら仕舞ひしが、けふよあすよと月日は立つ。中陰過ぎてそれからは、脊中に腹のさびしさを、替へて一入涙なり。此鄰に蠅聲なす邪神、奉公人の口入に生馬の十兵衛とて、是も此春女房に分れ、鄰つからの寡鴉、かねて古太夫に娘のおしでを苦界させよと勸むれど、何に喰はひでも一人娘を傾城などには思もよらず。御深切は忝しと、塵灰もなくかてつけねば、掘りそこなひし金の蔓と、咽かわかして暮しけるが、時こそ來れと胸工み、打とけてのつまらぬ咄。鬼と思へど問はるれば、かよらう島のなき身をば、涙ごかしに濡れられて、子ゆるゑの闇に踏みかぶり、つひそれなりの轉寐は、これも神の縁結と、隔の壁も打ちぬいて表向の女房、娘とも親子の盃。十兵衛は思ふ壺へ引入れて、高原を宿替して、堀江の場中で二間間口、娘一人をあての槌、銀壹貫目を借出して、普請もざつと取繕ひ、おしでは俄に三味線の稽古、箱風呂の洗ひみがき、鉢かつぎ姫が鉢のぬけたごとく、金の橘、銀の梨子、皮薄で色白で、顔だちなら物腰なら、いはう所もない上作物。仲間うち

諸道聽耳世間猿

ふづくつて
―たぶらか
して
崇徳院様ほ
ど―こは崇
徳院の覺王
になられし
との傳説に
よる
紋日―祝日
西照庵―大
坂天王寺の
近傍にあり
し酒樓
汁のたらぬ
―金錢の充
分ならぬ
杉原―紙の
名

野小町を養子にした。あいつは平の清盛ぢやと、様々の噂して、羨まぬ者もなかりし。女房おゆふも麻につるよ蓬ではなうて、松にまつはる捻藤根性に入れかはり、銀になる娘ぢやと、可愛外に慾心魔王、崇徳院様ほど瓜がのびて、おしでをしで野と改め、親の内から自賄の藝子。時々は膝もとへ引きつけて、泉五のお客は高麗橋邊の兩替屋の番頭衆。年ばいも五十近いとあれば、末頼母しい。なんほそなたが嫌うても、つまる紋日は出し次第で、節季はいつも金參兩づつ、文箱に入れて持しておこしてなり、折節は内へまで仲間の汁で、西照庵の戻ぢやと、炙物を送つてくれたの深切。あんなお方でなければ、根がとけぬもの。抜けつ隠れついたがりやる福半の足下さんとやはは、島のうち風俗のあばずれ。此間こちの門通らしやる時、おりんがあれぢやというたゆる、格子から見だが、髪は今はやる竹折鬘とやらに、歎茶縹子の胸高帯で、黒紬の羽織に大名衆の書判見るやうな替紋、重草履の尻の切れて有つた様子では、たんと汁のたらぬ風俗。商賣は何にする人かしらねど、あの身持では鐵漿付けでも袖結めでも、杉原一束のあてはかなはぬ。とてもする勤ちや程に、男ふりを擇まずと、今時はとれる客と見たら、眼痴でも鼻缺でも、取外さぬやうに仕やらねば、味噌鹽のたしにはならぬぞや。内の者共も心得

生頬くはさ
る―頬を
打たる
長髓彦を云
云―長き髓
を踏みのば
す義、傲然
たる貌
生馬の目も
抜く―狡猾
敏捷なるこ
と

自賄―自賄
藝者

て、福半から人が来うと、五度に三度は揚ぢやといへど、現在の娘さへさりとはずかさぬ人遣ひ。一人の子女郎が三味線の稽古するを、われは晝中に高枕して、長煙管べらりとくはへて、そりやそこが違うたと、生頬くはさるよすさまじさ。中々兀頂の茶屋風呂屋の内儀でも、あの様にはないものと町中の取沙汰。昔の神ごころは何處やらゆきて、長髓彦を踏みのばして人挨拶。天津こづらの憎くい女房と、誹らぬ者もなかりけり。亭主十兵衛はいつの頃よりやら、めつたに神信心を仕出し、生馬の目も抜くと異名とつた男が、心も弱々となりて、門口に八岐の大蛇を筒切にしたやうな注連繩を引きはへて、家内には切りかけの幣だらけ。月に六齋の百燈、節季の朝でも、中臣の祓を三座づつあけねば、茶粥にもすわらず。それにつれて慈悲深く、鼻が家内を追遣へば、跡へまはつて詫言半分の猫なでござる。我判入れた奉公人の親が来て、私も段々不仕合で、又妹も出させねばなりません。姉が居ります親方殿へなりとも、談合なされて下さりませと頼めば、十兵衛はにがり切つて、扱々こなたは胴慾な心入ぢやのう。姉ばかりか妹まで賣つて喰ふとは、子の可愛といふ事はござらぬか。わしも娘が自賄はたらいて居ますが、どうぞはやう引かしたいと思へど、人様の世話になり、まだ借金も少々あるゆる、それ

神様ごかし
何事も神
にかこつけ
ること

高なしの下

までと申うて居ます。こなたの娘も賣りさへすれば、口錢の納まる事なれど、そこをとめ
る十兵衛ぢや。酒もちと止めさしやれ、娘の身の油を呑むやうな物ぢや。錢壹貫合力し
ましょ。青物なりと賣らしやれ。此後にも姉が方へ無心などいうていくまいぞ。苦界す
る身の肩がすほる事ぢや。鼻、鹽物でも焼いて、茶漬進せてたもと。涙脆き事杉本佐兵
衛このかた。鼻は大森に出つくわした。楠の亡魂のごとく、脊中からわめき付き、是あ
んだら殿、よい加減に盡さしやれ。口入商賣するものが、口のはたの飯粒を拂ひ落すの
みか、方もないわろに大枚の錢を合力は何事ぞと、疊叩いて熱えかへるを、はてさうい
やんな。あの衆もこちらも皆天照大神のお流ぢや。まんざら他人ではないわいのと、何
事も神様ごかし。お伊勢様へは年に二度づつ缺さず、住吉講、天神講かけ錢倒れと制し
ても、聞き耳潰しての信心に、女房もほつともてあまし、よう申うて見れば、わし一人
あたふたとして、禰宜神主に奉公するやうなものと思案しかへて横道遊。春さきの標蒲
なぶりに日が暮ると、其まゝ袖なし羽織引つけて、近所隣の男交くら酒うちくらう
て大口咄。奉公人の遣ひやうから、男を尻に敷く自慢。痔に灸するてやる氣強い顔まで、
高なしの下作女房。夫十兵衛堪へかねて、女のあらう身持か、そなたの今の不行義を前

作女房―身
上もなき賤
しき女房

神たつき―
神信心

神なぶり―
神いじり

の近付の衆が見られたら、皆十兵衛が心いきが移つたのと、そなたの科はいはいで、お
れが浮名の立つ事ぢや。さういふ心になるといふも、全く神々の罰と思はると。ちと神
棚でもをがんで、お詫申しやと度々の異見に、おゆふ大きに腹を立ち、何といはしやる
ぞ。是が神の罰といふ物なら、死なれた古太夫殿はどうでござる。こなたぐらると違
て、神道のちんぶんかんを覺えぬいてられたけれど、一生乞食同前で死なれたではな
いか。常々こなたの役にもたよぬ神たつきが氣にいらぬ。伊勢講も百燈も内證の械が廻
らいでなるものか。其信心に遣ひすてる錢は何處から出るぞ。わしが娘のかけで、是程
にまで仕出した身上、こなたの物は一つもない。わしに向うて一言もいはしやる事はなろ
まい。兎ても申うたとして、神なぶりはやめる心あるまい。神道者相應に高天が原に似た
所の高原へ出でていにやと、箒おつとり拂出せば、理の當然に力なく、すごくと家出
して、もとの高原へ宮うつし、岩戸籠の路地住居。木綿襪に鈴打振りて、遠かみる多
目、鼻めが爲に追出されましくと、家々の軒に立ちしは、目前古太夫が恨のなすわ
ざと、人皆噂は仕たりしが、男を追出す厄神女房は、いつの世に酬うかしらぬ。

第三回 文盲は昔づくりの家藏

張良一字子房、漢の人、韓信漢淮陰の人、土人形一世聞見ずの人、律氣者、尻のつまりし一吝嗇の意

天子の劍、宰相の劍はすでに汚りぬ。今一口の元帥の劍有り。是を汚ふ人、先生ならでと、張良の文作にのせられて、韓信は迷惑となめらはれしが、西蜀への通札を貰ひて、終に漢家四百年の基を興せしは、子房の目利のはづれぬ所。なんぞ方寸の器物を見きはめたりとて、目利者とはいふべからず。年々の相場に身上は乗つて、北濱の米問屋に大豆屋七兵衛とて、家作も昔ものゝ高等親父。家内二十人暮にて、降つても照つても、年分に千兩づつは、延びてゆく鼻毛のあまり、ひとり息子七三郎は甘茶育にて、釋迦でもくはぬいき過者。一度聞いた事はちんぶんかんでも通さねば、耳塚と異名を付けて、息子中での憎者也。親七兵衛は根から土人形にて、世間に何がはやらうとも、江戸合羽の煙草入に、茶紬の置頭巾にて、店から臺所のきまりを心がけ、芝居遊山は身がなまけると嫌ひ、茶の湯の茶は澁うて吞まれぬと、一俵十二匁の丹波茶に、吉野榧の菓子にて尻のつまりし身持。朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし。斯程の老武者根城もよく持固めたれば、最早七十に近きとて隠居の望、法體して名を大愚と改められ、七三郎

洞濟二派一禪宗の曹洞宗臨濟宗、乍麼生、什麼一兩者とも如何の義、凌雲臺一魏明帝が洛陽孟津に築かれし樓、章誕一字章仲將魏の書家

は七郎右衛門と呼ばれて、我代知りたる顔にもつばら禪學に誇り、洞濟二派の悟録に眼を止めるより、自然と心高慢り、米市場に拂子をふり立てよ、乍麼生か千俵賣らう、什麼三千買うなどと、えしらぬ言葉をつかひ、僕兒少婦が茶碗一つ破りしをも、喝と叫んで、三十棒を打ちけるにぞ、半季究めの奉公人は、中戸の客板を打つて、放參々々と障をとりにける。付合が廣がるにつけて、近頃より夢想國師の流にふみかぶり、雪の朝茶、春の夜咄と、頻に古い物好になりて、生きた萬寶全書とそやされて、目利がる事さまざま。上町邊の書物屋菊亭といふ發明者、門口の這入らぬ程な掛物箱を持つて來て、旦那此間はお見舞申しませぬ。此横物は唐筆でござりますが、けしからぬ見事に見えますれど、名印がないゆゑ、誰ぢややら知れませぬと、出して見すれば、七郎右衛門一目見るよりせよら笑ひ、そちも此様な古筆を商はうと思はど、ちと心懸たがよい。是は魏の明帝の築かれし凌雲臺の額ぢや。此樓を築く時、あやまりて額を釘にて打付けたゆゑ、文字を書くに、章誕といふ能書を轆轤にて釣上げて書かせられたが、地より高き事廿五丈ありしよし、章誕恐れて白髪となつたとあるが、其額のまくりと見える。魏と唐とは、唐は餘程後ぢやのに、唐筆とは書林にいふまじき文盲としかられて、是はしたり、根から存じ

庵に木瓜
紋形
まげられた
一質入せら
れたる

ませぬ。あなたにお目にかけてればこそ、きつとわかりました。是は魏といふ國の人の書いたのでござりますか、私は魏筆といふは贋物の事と存じてをりました。左様なら古い物でござります。お目利の上なれば、よいやうに買うて下さりませといふにぞ、いか様此文字の震うた所が面白い。おれがきはめて安うも買はれまい。金子廿兩に買つてやらうといはるよに、菊亭それでは口錢がござりませぬと、旦那に見てもらひまして、高うも申されまいと置いていねば、跡へ壹丁目筋の刀屋が、旦那、あなたでなければ、知れぬ物が出ましたと、朱鞘の相口を出して、是に庵に木瓜の目貫がかけてござりますが、此紋はまへかどに海老藏が來た時見ました、曾我兄弟の紋所かと存じます。めつたに古う見えませれば、もし昔の曾我殿がつまりらぬ大晦日にまけられた質屋の流ではあるまいか、御覽じて下さりませと指出すを、七郎右衛門とつて情々見て、是を曾我兄弟が所持とまでは氣が付いても、どういふわけと云ふ事は、壹丁目の拵屋の目は及ぶまい。是こそ曾我の時宗が箱王丸の昔、箱根の別當の許にて、敵工藤左衛門に始めて對面せし時、祐經より箱王に遣はせし、赤木の柄の差添ぢや。身も格別にはないが、出所が面白い。銀廿枚なら置いていにやといはるよに、さてもく、學文知らぬ者は、曾我とまでは氣がつい

腹脹ども
慾深き人
永徳一狩野
永徳
徳乗一後藤
徳乗
瀧本一八幡
瀧本坊
楊貴妃一名
太真唐玄宗
の妃

ても、根拔がいたしませぬゆゑ、旦那に廿枚で掘出されたと、銀受取つて歸りぬ。とかく道具屋で知れぬ物は、此先生に持つて來て、目利して買うてもらはうとは、商人の軍法、大豆屋の城を賣りおとさんとぞ謀りける。ある時、伏見町加賀屋何某が方にて、道具會ありて、諸方の腹脹ども打寄つて、倦いた道具は持つて出で、珍しき物をとかよりける。永徳の三幅對、徳乗が縁がしら、砧の水指、瀧本の自畫贊、淺黄印金が一尺四方、高麗茶碗、楊貴妃の天冠、定家卿の鼻鐺、法然上人の尿瓶まで、それぐに糶分けて、市大にはづみけり。かよる中に六十有餘の老人、山繭紬の服太に鼠小紋羽織も綿のおちつきし人柄。私もちと拂ひたい物がござると、二重切の花活に朱棗器一つ出されければ、何れも見て廻し、まづ花活は銀五兩にをさまり、茶器は銀二兩より糶りけるに、いや、それはあまりなりと引きこめらるれば、段々糶上げて金百疋につけよれば、なんと御隠居、もうよい直段でござりますが、お放しなされませぬかと問へば、いや、お目に入らねば是非なし。手前了簡とは餘程相違いたすと取りあへねば、はてなあ、見た所がさして名物とも見えぬ、少々なれも見ゆれば、よい拂直段であらうにといへど、ただ黙然と返事せられず。大豆屋七郎右衛門床脇より遙かに、御隠居、御道具今一度御見



連城の壁一和氏の壁其價は連城よりも貴しといへるに依る
鹽瀨絹布の名、袂紗の義
なれ長き年月の使用より生ずる

せなされと、道具屋に取りつがせ、暫く眺入つて、是はちと存じよりもあれば、私が申請けませう。御不足ながら金子八十兩に負けて下されまいかといへば、其時老人手を打つて、さてもく、こなた様はお若い、道具をお好なさると見えて、天晴のお目利、八十兩では賣損がまるれど、斯列んでござる道具屋衆も、金百疋相應と仰られた物を、飛んで大金にお付けなさるよは、此道具の素性御覽なされての事なれば、負けて進ませうといはるよに、一座大に興を醒し、是はどうした名物と、明いた口ふさがねば、七郎右衛門したり顔にて、いかさま千兩道具を小金にまけて下さるよは、甚だ身にとつて大慶にこそござれば、連城の壁も見るものござらいでは、瓦礫も同前。これは室町殿の御重寶、曙といふ茶器でござりますかと存ずる。ちと見所あつて申す事ぢやが、左様でござりますかといへば、いかにも、曙の名器でござると、臺所から取寄せるは七重の服紗十重の箱に、満座の道具屋も素人衆も、是はと驚きもみでにて、七郎右衛門様、御目利の名物、今一度拜見いたし申したしと、懐から、嗜の鹽瀨取出すやら、手水遣に立つやら、手に取つて見れば見る程、めつたにしばらく見え、少しのなれといひしまで、爰がどうもいはれぬ所と、寄りこぞりて譽めそやすに、老人重ねてお素人方はともあれ、歴

品物のつかれ、手すれなどの義
しらけて興さめて

歴の道具屋衆がござるが、いづれもの目利で求めさつしやる衆が、大坂中にはあまたござらうが、今夕の體では、いつかう目の明いた衆は一人も見えませぬ。向後は七郎右衛門殿をお頼み申して、道具の素性も見習はつしやるが、貴様方の家業といふ物ぢやと、あくまで悪口せられても、一言の返答するものなく、一座しらけて其夜の會は果て、皆面目を失ひ歸りけり。是よりも此沙汰が廣くなりて、京堺にも聞えければ、去る御大家より聞及ばれ、其曙の茶器は、故ありて先祖より此方の家に所持する所、又々此度賣物に出でたりとは、其意を得ず。しかし何れか眞偽とも定めがたければとて、大豆屋へ使者を立てられ、目利所をもつて改めさせられしに、並べては若干の違にて、御傳來もたしかに極め、數札の證據もあれば、大豆屋の茶器は、丸薬入にも劣りて見ゆるにぞ、又此噂が廣くなりて、目利が違ひしとて、七郎右衛門が異名を目達先生といひはやしぬ。隱居大愚此様子を聞及ばれ、大きに腹立し、七郎右衛門を呼付け、いらざる目利自慢より大分の金銀を費すのみか、人に笑はれて大恥の名をとりし事、もと商人の道を忘れたるよりの事なり。町人は算筆とて外の事はきつと嗜みて家業をつとめ、無用の目利いたすべからずと、席をうつて叱りつけ、隱居へ歸られぬ。七郎右衛門跡を見送り手鼓の中音

にて、うたひ卑しき海士の胎内にやどりてと、諷はれしはいかい白痴の。

諸道聽耳世間猿 二之卷

第一回 孝行は力ありたけの相撲取

参や魯なり
— 論語五卷
にあり魯は
遲鈍の義
茶火ねば—
死なれば
俊成—藤原
俊成—
持—優劣な
きこと
白い齒見せ
ず—笑す
嚴格に
伯人—遊女

孔子の参や魯なりと仰せられたは、曾子はちとうまひとの悪口。其曾子は孝經の作者なれば、孝行もちとまへめでなければならぬ事と、唐繪の竹ゑがく生過者が呑みこみ違ひ、茶火ねばなほらぬものぞかし。枝折る葉は誰がためぞと、捨てらるゝ親の方から、捨ていぬる礫柱、めにあんまりな慈悲心。此手の親が世間に多く、河豚の蝶のやうに、切つても突いても煩はぬ息子を、あれは病者なゆる氣晴になら、何なりと稽古させいと、涎三尺流らかして、糟谷宇左衛門がかけ聲に、こちの息子に似ましたとは、よつほどな甘口。息子の穀つぶしに親父のあんたらを、俊成卿に點してもらうたらば、持とや仰せられん。今時は白い齒見せず追遣うても、謠屋の夜食腹から、伯人の一切買ふ葬禮の戻に、竹田の新機關見る程のことは、きやつとうまるゝと知りぬいて居る世の中なり。播州高砂の相生浦之助とて手取の相撲あり。元より活業の丸裸にて一錢の貯なく、尾上

石白鼻―無
藝にして頑
固なる妻

濕病―黴毒
症
愛染様―三
目六臂の忿
怒尊即ち愛
染明王

の鐘もひだるい腹には、響の灘と力士立に喰ひしばつて、寒き夜をあかし瀉に、いく夜寝覚めて暮しぬ。此浦之助二親に孝行なる事近郷に隠なく、朝は星をいたゞきて、曾根の鹽濱へ雇はれ、麥一升の働き、冬は寒取に生疵の絶ゆるまもなく、どうぞ親達を安樂に養ひたいと、四十八手の外に身を粉にはたいて身過の工夫。稼ぐを追ひぬく貧乏神ありて、此親父は小博奕打つて大酒喰ひ、なんほ有つても掘りぬき世帯、底はかたなく負けくれば、鬼の女房に鬼神とやら、噂衆も同じくなる口にて、針手もきかぬ石白鼻。三度の朝夕の外に、間鍋の菜好み、陰口が悪いとて近所の茶飲にさへはねのけられても、鎌婆がかより子をいぢりたて、小遣錢が足ぬの、博奕の元手が少ないのと、ねすり事のある状。親に似ぬ鬼の様な關取も、土俵ほどな涙を零しぬ。それさへあるに、一人の弟がぶらくと煩出して、此處や彼處の身節が痛み、咽の下に口が明いて、いつをかぎりの濕病。堅な事横へもせず、顔も手足もむさし坊の居喰とはこれなんめり。浦之助が身ひとつで、愛染様ほど手足が有つても、逆もつまらぬ末六十日と、力足を踏みしめて、氣を春さきに大坂の勸進相撲、何んでも爲てこい。とちや遅しと早々登りて、番附に載せてもらへば、何處へいても附廻る貧乏柱といふ所に、播州相生浦之助とかいたるは、ひ

大兵―大なる
身體

松川菱―菱
を重れたる
紋形
外山の霞云
云―相撲に
打ち負けた
る形容
花出す鹽―
纏頭いだす
時
悪錢びらな
か―小錢も

だるさうには見えざりけり。其頃の關取は仙臺の眼力、九州の山揚、山轉、紀州の驅拔、伊丹に鬼面、難波に唐綱などといふ古今の大兵、とりての功者、東西に分れてはなばなし。さあ今年はいよいよ相撲ぢやと近年の大はづみ、高木屋橋がしはる程の人群集。高砂の町人衆も大坂見物に登りあはせ、此方の在所の相生もとるけな。どうぞよい相撲に勝てがし、國許の外聞もあれ、一廉花はとらずごと、空色縮緬の羽織に郡内の大綱給。金子五兩を包ませて、けふは勝つかと、毎日々々割子の松川菱になる程力んで居らるれど、浦之助は親兄弟のづつなはが足に纏ひついて、行く日も来る日もあくめるめなく、晴天十日物の見事に打ち付けられて、高砂の外山の霞足たよす、國許の客衆も花出す鹽もあらざれば、姫路のおさかべといふ前髪相撲にやつてしまはれぬ。浦之助は我ながら身を抓つての男泣。せめて給銀に手はかけじと、一兩たらずの身の油、禪にしかと括付け、西國へいぬる傍輩の相撲の著替どもをひとつにして、十二三貫目の歩荷もち、顔は寝れて神崎の川中で剥ぐ尼が崎、悪い時にはとほくと、足元見えぬ武庫川や、祈れどきかぬ神心、道理で戎も腰拔の、蘆屋の里も打過ぎて、かよる住み憂き世の中を、誰か住吉と菟原の里、小揚買うも悪錢びらなか、摩耶嵐にはおろされじ。錢がなほしや求塚

なきかの義
 大坂の腹は
 れども大
 坂の富豪達
 入米―収入
 行基の嘗め
 て云々―行
 基菩薩の病
 者をなめて
 救ひし事よ
 り重患者を
 いふ

戀もしやくくりもなき身をば、いつまで是で生田河、運の築島ながしめに、鴨越の辛き世を、逆落しとはあやにくの、所の名さへこり須磨や、明石がた／＼ふるひつよ、やうやう内へ戻れば、爺親かにじり出でて、内には火の雨が降らうとかまはず、大坂三界廻廻つて長々の留守に、親には不自由なめをさせたが、定めてよい銀が取れたであると、聲かけられておづくくと、禪の下から海士が玉出すやうに、温もつてある給銀を出して見すれば、不興顔に、上方へ相撲々々というて大さうたてと登つたは是か。おきをらう腕なしめ、此擲取の世界に大坂の腹はれどもに這ひつくばうて、目くさり金の壹兩やそこら、一夜さのはり代もない。不甲斐ない悴を持つたゆる年寄つて入米がわるい。病んでをる弟めが達者なら、此様には有るまいと、支離所か行基の嘗めて遣らせらるよやうな病ほうけを、可愛がつてわめきつけば、二枚屏風のあちらから鼻聲にて、兄貴戻つてか、大坂は結構な所で、上手な醫者衆かたんとあるけな、わしが此病には、五寶丹とやらいふ薬を飲んだら愈るといふた人がある。代物は金一兩ほどちやと聞いたが、買うて来て下さつたかといふを、母親が釜の前で、横煙管脚へながら、何のいの、わが身のことを兄がかまふ氣はない。二親の飲代さへ咽しめしてあてがはぬもの、大方給銀も金の三兩やな

けんたんや
 ―飲食店

制魚―鯛に
 同じ
 土龍―むぐ
 らもちの古
 名、土百姓
 の義
 醬油袋の頭

どは取れたであろけれど、大坂のけんたんやで、仇酒喰うて遣ひ捨てたのでござらう。親は稼ぐ子は樂するといふたとへに、一も違つた事はない。日本一の不孝者とはおのれが事ぢやと、遠道かけて戻つた息子に、熱い茶一ぶく飲まさずに、責めせたける泥棒親。こんな胴慾な家人、ありがたい日のめのさすも不思議ぞかし。浦之助は戻るやいな挫ぎ付けられて、さりととはさうした事ではないと、いひ譯するほどつきあがるにぞ、如何にも私に不器量から、おまへ方に不自由させます。堪忍して機嫌なほして下されと、親々の辛いほど、魂の琢ける底光。思へば今度の相撲は始末ばかりして、蛸の足一本ほつかりとは喰はなんだゆゑ、脾腑づかなんだと此なかでの相撲形氣。浦々の引綱を手傳ひて、紫蘇制魚の生ぐちに、肉走りて踏みかためたる足曳の、大和の御所に花相撲あれば、前にも懲りず旅立ちて、今度は勝ちも勝つたり、七日の相撲拾をとりは取つたれども、高が在所の土龍ども、殊に土地に見知られねば、山伏の布施ほどな花もくれず、力瘤さすりおろして、此勢に京の相撲ではおのれやれと、心の氣丈張詰めし竹の内峠を越えて、古市川にさしかよれば、跡からおとい／＼關取殿と呼びかくるに、誰ぢやぞいと振り返れば、年頃五十ばかりの瘦男、つゞれの肩結び上げて、醬油袋の頭巾、時分柄の澁團扇腰



巾一醬油袋
にて作れる
頭巾

思ひばかど
ゆかなんだ
一思ふやう
に物が運ば
なかつた
龜の首すつ
こめて一貧
しく暮すを
いふ

にさして、うそよごれた顔つき。漸々追ひつき、是々親方、まあそろく行かしゃれ。こなたが大黒の大黒様へ参つてゐるやしやる間、わしはちとあの寺がさすゆゑ、脇道を廻つて来た内にはぐれましたと、水涕すよりあけて、馴々しく挨拶。こなたはついど見た事もない和郎ぢやが、念頃さうにはしやる。そして見れば、小淋しい顔つき、貧乏神の様なりでといふを、彼男、これ關取、乞食つかまへて乞食といや腹立てる。直にはどうしたわる口と、皆まで言はさず。扱はおのれが是迄付廻はるゆゑ、思ひばかどゆかなんだのぢや。にくさも憎くしと引きかついで、大地へどうとのめらすれば、投げられながら其裾にすがりつき、おまへと一體かうなつたは、なみ大低の事かいなあと慕ひよるに、ぞつとしてそれからの病みつき、天道人を殺すのか、高砂や此うら船に病船がつきて、いがみにいがむ尉と姥、千歳の鶴首物ほしけに、萬代の龜の首すつこめて、暮すのも天なるかな、命なる哉。

第二回 宗旨は一向目の見えぬ信心者

去る淨土寺の説法を聴聞せしに、因果經にお初徳兵衛が道行をませて、それ娑婆の果敢

あだしが原
云々一曾根
崎心中「お
初天神記」
道行の明文
句

人と牛とが
ふりわけに
なつて一人
牛相半して
維摩一釋迦
の弟子
犬の手も人
の手もとい
ふ時一多忙

なき事は、たとへばあだしが原の道の霜、一足づつに消えてゆく人の命。死ぬる時は帷子一枚と、慾しい惜しいの悪念を離れさせ、婆鼻の臍線をふるひ出させ、此施物をわるう請ける出家は、七生が間は牛に産まるとござると、舌も乾かぬ所へ、梵妻が安産したとの報に驚き、衣もそこへかけ出さるゝを、残つて居た講中が、和尚様、たつた今の説法に、施物を請けて、悪業すると牛にうまるゝとおつしやつて、是はどうしたお身持と、捕らまへて詰めかくれば、氣はせきながらしら聲をつくり、はて扱こなた衆は凡夫心ぢやのう。是しきで牛に産まりやうなら、此世界は人と牛とがふりわけになつて、米市の外に牛の食物の相場が立ちますわいのと、一言にしめして出でてゆかれぬ。維摩は悪田に苗を植うるごとしと、非人乞食にものやるを叱り給ふけな。まして此様な僧に物やる事は、雲隠へ銭落したやうなとも譬へ給ふべし。たゞ慎みがたきは姪酒の二つと、親鸞上人の見識。佛體を得し出家に、肴喰はせ女房持たせて奉公をもせよ獵漁をもせよ、一向一心に念佛すればと、くよめるやうな勸かた。末世の衆生の心では、經文より座禪より、家業の妨にならぬのみか、犬の手も人の手といふ時分に、注連飾り松立てる世話を助かり、上戸の額面にたとへし暑い最中、屏風引廻して、牡丹餅、索麵の客衆もな

の時
六條參一京
都六條なる
本願寺參

御眞向様一
佛壇の正面
にかゝれる
佛畫
ひげらかさ
るに一街ふ
に、
やくたいも
なき一無益

く、常盆、常彼岸のならばせ有がたいとは、是許りでも思はねばならぬ宗旨ぞかし。さ
るによりて在家は信心のあまりに金銀を投げうつ事、他の宗旨に百倍して、三百里あち
らの仙臺の奥から、霜月かけての六條參。脊負うた菰包の中から、小判の御冥加錢、取
次なしに賽錢箱へ打ちこんで、涙を零しての御恩報は、假令の信心でゆくものか。御相
伴については一膳三文の白箸を、我喰うた跡を國もとへの土産にして、一在所のものに戴
すれば、ありがたいと思ふ心から、軽い瘡の落ちる事、全く祖師の功德の廣大なると申す
べし。河内の柏原に高持の百姓太郎右衛門とて、代々の堅門徒。神棚は雑行とて、御祓
様も内へ入れず。佛壇は心齋橋で木地から三貫目の誂へ、御眞向様、御脇掛皆々祖師の
御正筆。朝夕の看經に二人の息子太郎七、清太郎とて、廿と十七になるものまでに、肩
衣かけさせ正信偈のつれぶし、忤共もありがたうござると、同行中へひげらかさるに、惣
領太郎七は佛嫌の芝居好、佛壇へなほると、親父の歸命無量をこんたんでのゑちやへ
と鼻歌で間に合はせ、願以此功德は山アにぞ著きにけりまで、やくたいもなき仇口。弟
の清太郎は坊主まさりの有がたや、七首和讃、八首和讃のつとめ方、五帖一部の御文様
には、どこからの何枚目にどうしたおすよめがあると宙覺。兄の淨瑠璃を氣の毒に思ひ、

なる
あなた一如
來をさして
いふ

親の日一親
の命日

祖師上人一
親鸞上人

あなたの前で鼻歌いふとは、信心が決定せぬゆゑの事と、折ふしに異見すれど、太郎七
は上の空。親父様はお年よられたれば、有がたい筈の事、我々が年で佛付合するはあん
まり早い。廿八日の精進も、祖師様が近付でもなし、母者人の日さへ精進すればよい事
ぢや。そちもちと淨瑠璃を習うて見や。お勤の節のやうな物ではない、面白い事ぢやと
いふを、清太郎かぶりをふり、そんな勿體ない事はぬ物ぢや。今日斯して居るは、み
な御宗旨の御影なれば、親の日は少々落ちても、御宗旨の日は精進を御速夜からする物
と兄弟がいさかひ。親太郎右衛門襖を隔てと聞いてゐられ、扱々太郎七めは憎くいやつ
ぢや、しかし、あれが則ち無宿善とて、如來様に御縁のないのでがなあらうと、諦めて
捨て置かれぬ。弟清太郎ある時、親父の前へ出でて、私はちと御願がござります。祖師
上人は越後へ御配流なされてより、三十餘年の御經廻、北國の雪に笈を負はせ給ひての
御苦勞は、みな御自身の爲ではない、濁世の凡夫を助けんとの御修行と承れば、お
まへや私共が安樂に暮しまするも、皆あなたの御善根と思へば、あまり冥加ない事と存
じますゆゑ、せめて御舊跡の二十四輩を廻つて來たうござりますと、思ひこんで願ふを、
太郎右衛門大きに悦び、廿四輩は年來の大願で有つたれど、御縁が薄いやら、是まで出

大傷寒一熱病

るといふ時節もなかつたに、若い者のよう思ひ立ちめされたと、怪しからぬありがたがり様にてにはかの用意、長旅の事なれば、路金をしまつせずとも、著替、雨具、蟲おさへの丸薬、足痘の黒焼、水の變のふり出しよと、残る所なく取揃へて、下作の百姓に達者ものをえらみて、若い者の事萬事を頼むと、くだいほどいひ付けて、吉日の首途を見立ててより、留主中の看經にも、清太郎めが無事にて歸りますやうにと、頼む木陰に雨もりて、清太郎は常陸の板敷山で、山伏の盗人に出遇ひ、路金も著替もさつぱりと剥ぎとられ、主従非人同前にて、命からがら東海道を逃のほりて、在所へは歸りしかど、剥がれた上に叩かれた逆さま竹の痛がつよく、焼栗の芽も出でずに、極樂參をなしけるにぞ、親太郎右衛門が力落し、兩の手もがれた悲しみ。日の立つに付けて、一家同行への諦咄、御舊跡廻から病みついて歸りしも、不慮な事のやうに思ひましたが、是が即ち信心の到りましたのでござらう。淨土へお救に預りましたは、不定世界を早う遁れた仕合者でござる。教へて歸る子は知識といふは清太郎がことごと、悦涙に深くむせび入られける。此歎に引續きて、兄太郎七に嫁合すとて、呼びとつて置きし紀州の根来の姪、風の心地とて二三日起きざりしが、大傷寒にとりつめての臨終。是もあなたの

早瘡にて取つてゆきし一早瘡にて死せし攝取不捨一助け導きて捨てざるこ地築の棒一地固めの棒矢の根曾我一歌舞伎十八番の一鬼鹿毛一猛ましき鹿毛の馬

お救と、念比に御禮申せば、大和の小泉へ嫁入りて居る中娘の初孫、早瘡にて取つてゆきししらせの使。内に十年の餘飼うた赤猫が、井戸へ陥つて死んだまで、皆如来様のお救とは八萬四千の光明の中へ、攝取不捨の御盟を報恩謝徳の信心他事なかりけり。ある時、鄰村の道場に本堂の棟上はいつ何日かと、大坂から舞子藝者を呼寄せければ、物見多藝の草中とて思の外の大參。柏原の太郎右衛門も講中の一筆なれば、天氣のよいを悦び、精進酒ひとつ過して、地築の棒をつきならして、椶櫚の葉箒賣つたる親仁、店の端にもしばしは休みと、皺枯た一節をやらるとに、息子太郎七見るより爰でこそ、我等が隠藝を親父に見せて驚かさんと、私も狂言一番致しませうといへば、御堂様へ御奉公ぢや、何なりとせいの赦を受け、心得まかせの飛上り、矢の根曾我の荒事、面真赤に塗こたくり、金欄の大廣袖、角鬘の大章、淨瑠璃に合はしての思入、見物は口々に、ようよう庄屋の一番息子めと、譽めるを聞いて、親はこゝにと悦ばれける。太郎七は大音に、ああらふしぎや、左の腕のしびれしは、兄十郎が大磯にて、敵工藤に遠りあひ、毒酒を盛ると覺えたり。たとへば此鬼鹿毛千里も飛べ、萬里も行けと、思入の力足に、足代の繩が切れて、高さ三丈程の所から、眞逆さまに踏みはづせば、やれ落ちたは。氣がつかぬは。



事きれたり
—死せり

薬よ水よの介抱に、親太郎左衛門はあわて騒ぎ、悴やあい、時宗やあいと、呼びいけれど氣はつかず。次第に冷えて事きれたり。朝には江戸塗の紅顔も、夕には白骨の身となれりと、御文様も思出されて、いかな親父も腰抜けて、御救もほどがある、これは又あんまりなかつげやう。此上は吾等ひとりのお救なれど、もそつと娑婆に用事があれば、まあ十年ばかり待つて給はれと、一向一心にぞたのまれぬ。

第三回 呑こみは鬼一口の色茶屋

競伊達衆—
いさみ連中
肩間尺の首
—支那有名
の鑄工干將
の子にて身
丈一丈五尺
顔三尺眉間
一尺ありし
といふ首

吳越の人は、文身とて惣身を彩り衣服の代とするは、漁を常の活業として、水に沈みて世を渡るゆると聞きしが、江戸の競伊達衆は入癪を腕ばかりか、身うち龍の纏ひついた所、背中に眉間尺の首、尻こぶたに近江八景、弘法大師がござらば、般若經六百卷でも彫つてもらひかねぬ血氣壯。それが何の爲なら、上方野郎はなまぬるいと力味から、満足に産まれた體を我と支離にならなくても、男は男で通ればこそ、江戸中がさうでもない。額面に鑑めてぬとて、裸百貫の相場は彌勒の代まで變るべからず。昔より今にいたるまで、百敷の都より天離る鄙の末までも、替らぬ色は戀衣。送りかへせば比叡の山風

二挺だて—
二挺艦を立
つること

と謠ひしも、漕分かれゆく室や御手洗の浪枕、此處は名だたる二挺立、葭原にのみ濡衣を、染むればかはる品川や、とんとはまりて深川に、鬼の喜介といふ寡茶屋。蒲團二疊にはした枕の漆も元けし土産盃、いつでも肴は一種にて、座敷といふが釜の前、七階子の戀の坂、晝ともいはぬとこ闇に、たてこめたればうつの山、夢見る事ならばこそ、寐かへるさへ油断すれば、をちこちのたつ木部屋二階。鄰あたりの思はくにも、此茶屋町

土産盃—其
地に産出す
る盃
晝さがりし
—古びたる
鼓打のなら
す客—鼓打
の無頼漢
疊上げて—
殺して
四座—能狂
言の四座を
いふ

のたど中に、あそこで遊ぶ物好は、どうした衆ぞとおもへばさる事にて、入りこむ客の風俗は、晝さがりし黒羽に落し佩の、蝶鮫も掃除のわるい鏢のほこり、天窓は色々の龍宮界。醫者、俳諧師、鼓打のならず客、三十匆とつかうては、質種もなき神々を請ひこむ亭主が男ぶりは、競組の目にも豎縞のかます袖。十服つぎの煙管の烟、遠慮もなう客の面へ吹きかけ、町所の知れた野郎なら、賊でも連れて來なさい客にすべし。疊上げても、とらにやおかないといふ筈、名さへ鬼の喜助なれば、渡邊の綱でも仕過のならぬ茶屋。そこさへ寄せてくれるを嬉しがりて、家島與左衛門とて四座の末のすかんぴん。うつ鼓のぶつとも、ほうともならずもの。其中での水遊、毎夜喜介が方へ降つても照つてもかよさねど、遊は十日に一度のあてがい扶持。其間は吸物の加減に、雷盆のかた相手、酒

水遊一遊女
あそびの義

さく蟹の家
一蜘蛛の巢

の爛に氣轉をきかして、おつとよしな板元廻り、いはく有馬の湯の談合と、口合の言續に、親父今宵は拙判官ちやと、月囃子の謝禮を包のまよに露の間の二階籠。それさへ下から天井裏を椽欄箒でせり立てられ、一寸壹把の仕過が積れば金の一兩あまり、突くやうに催促しられても、濟すあだてのないが定、遊も今宵かぎりぞと、念比に損かけて門口までもよりつかねば、喜介大きに腹を立ち、見付け次第に剥ぐ覺悟、與左衛門が所へ仕かけしに、戸は閉しよせて留主の體。内を覗けば疊まで、いつ賣拂うて仕廻うたやら、竹責子に鼠の巢、紙屑ひとつ、下駄片足、残るものとはさく蟹の家ばかりにて、與左衛門が影も見えず。鄰の鍛冶屋で尋ねれば、宿替でどもござらぬが、内はさつぱりと賣りたてよ、二三日も戻られませぬ。取替のござるのなら、ちと御出が遅かつたといはるるに、憎さも憎し、居所も大方合點の、そんぢよ其處と、柳原の古手屋の裏、正面むいては這入られぬ路地の奥、幸田嘉兵衛といふ狂言師の表札も雨じみし引たて戸。こよには人の居る體にて、きしれどあかぬ古敷居を、むりやりに身の這入るだけ、誰ぞといふは與左衛門が聲。いや深川の喜介ちや、あひに來たと云ひつゝ見れど眞闇がり、たゞぞそつく物音ばかり、よくくすかして見れば、主の嘉兵衛は寒中に古拾、木兎なつた背中

事を柿の本
一事を缺く
意をかけた
り

來山伏の豊
心丹一尋ね
來るを來山
伏にかけた
り豊心丹は
南都西大寺
にてうる藥
肉米一搗米
に同じ
釣だけんど
一釣錢なれ
ど
めつた踊一
みだりなる
踊

には、著る物に事を柿の本、短冊ばりの二枚屏風を被りて、蓬萊山のすくみ龜。今一人は與左衛門。是はいつその丸裸。せめて禪引きしめて、挾箱覆の青漆皮、鼠の喰穴首の入るだけ切りあけて、それをすこしの肩ふせぎ。蟹國の圖にもない二人が姿。寒を凌ぐ火鉢さへ、付木一枚もやして、鼻だけ温い稻妻の、光のうちに憂やわするよと、こごなりよつても仇口はやまず。是は喜介ようこそ尋ねて來山伏の豊心丹。さて拙等にはいかなる寸善尺魔が付きまはるやら、えら茄子の太木でかくの仕合。ちとありの實の判官があらば、御引合頼みます。此節肉米澤山の立荷預りたい。嘉兵衛御存ないか。あの先生えら粹ぢやと、粹ごかしのことわり。逆さまにしてふるうたとて鼻血の外はしたらぬ爲體。さすがの鬼も呆れはて、此寒いに馬鹿な頼桁盗人に、釣だけんど錢百文合力すべし。酒でも買つて喰らつたがよいと、二人が前へころりと投出して、跡をも見ずに歸りける。兩人は跳出で、かの百銅を捧けつゝ、嘉兵衛の音頭に與左衛門がめつた踊、しばし奏でて餅酒に替へ、一時の機嫌上戸、ほめきの中に寢入しは、樂其中になきにしも非らず。献上鯛一枚が百兩もする花のお江戸に、是ほどの落武者もあるに違はなかりし。心からこそ身は丸裸、そこらが藝者根性と面白がるも程あるべし。此與左衛門も其後はす

松風一能の曲

村雨と見えし云々一松風曲中の文句をここに引用せるなり

つきりと、世間ふさがりて、身に倦きはてた俄坊主。こよに一月、かしこに十日の假寝の夢、一歳あまり暮れゆきしが、身の内の財は朽る事なしと、持つて生まれた鼓の音。昔の弟子が便り来て、そうではすまぬと打寄りて、さる御大家へ御抱の世話も附髪に借著の御目見、さつそくの有付。始めての御能に、三番目の松風は、御扶持人の醫師石川松庵が小鼓、大鼓は與左衛門。太夫も囃子も其日の大出来。ここぞとつ鼓に、いつのまにやら與左衛門が附髪落ちて、坊主天窓ふりまはすを、御棧敷とても氣はつかず。松庵の後見に出し生駒新八といふ狼狽へた男、落ちた附髪の門たがへ、松庵の頭へむりやりに引付けしかど、もとより心は張弓の、いつの間に髪が出来たとも、村雨と見えしも今朝見れば、松風ばかりや残るらんと、撃ちあけて太夫ワキより樂屋へ入れば、引續いて笛小鼓、附髪の縹子鬢にさしぬき長絹の橋がかり、大鼓は法體して緋鬘斗目に長上下、棧敷棧敷の御目にかより、思はずどつと関の聲に、二人とも心付いて、頭を抱へ逃げこみしが、松庵はさすがに老醫とて、人がらをつくり、是々與左衛門殿、古語にも聖人は桃林に冠を糺さず、瓜田に杓を入れずとござれば、其元の附髪が愚老に附けてござつても、手前が手はかけませぬ。自身はづしてとられよといふに、與左衛門痛入つて後に廻

八島の謠一結崎元清作曲したる謠の名

りて、附髪をはづしつと、さるにても松庵老の首筋もとの黒さよと、八島の謠にて笑うて左右へ分かれけり。

諸道聽耳世間猿 三之卷

第一回 器量は見るに煩惱の雨舎

臨兵闘者皆陳烈在前といふ眞言を唱ふれば、打ちかけた刀の下も潜らるゝとて、歴々の大將が旗さし物に書いて出らるゝは、戦に望みて死を忘るゝとは嘘の皮。それなればこそ一番槍が戦場の高名頭。先へ行くのは酒屋の親方ではなうて、心善うはないものなり。叡山、三井寺、奈良法師、無理いうてもだよけても、命を捨てての腕白は、加茂川の水雙六の賽、思ふやうには任せぬぞと、いつの帝やらのくやみごと。坊主に天窓はりまける侍、昔はたとありしやら、一來法師が輕業、武藏坊が大工道具、皆天狗まがひの悪僧原。これを思へば町人百姓ほど、昔から今に至るまでも、寐覺の安きものはあらじ。いや侍、むづかしの尼法師と思へど、京の知積院には坊主のこけら餅が漬けてあり。江戸の淺草の觀音參は町人は百歩一なり。何事も廣いことを、武藏野の様などいひならはせしは昔にて、八百餘町に建てつまり、諸大名の御屋敷、神社、佛閣の華麗は

奈良法師一
大和興福寺
の僧
一來法師一
三井寺の勇
僧治承四年
宇治川の合
戦に奮闘し
て名あり

其角一榎本
其角俳人芭
蕉の高弟寶
永四年歿

日和が落ち
た一空模様
の悪しくな
りたる意

もとより、所によりて一疊一枚が、金子一兩しても借屋杵はらぬ大湊。大芝居、大叶、大
小間物、大蕎麥切と、何でもかでも大の字を冠りて、今は氣の大きな事、武藏野の如
しといへり。兩國橋は下總の國へかよりしゆるゑ、かくは名付けしごと、江戸初めての見
物と見えて、京家の武士の小者一人に風呂敷包持ちて草履かけ、菅笠、柄袋の外は旅め
かず。橋を渡りて河水に逆のほりゆく道の、河の流岸の下草までも、知らぬ道の珍し
く、三圍の明神にぬかづきて、かの其角が、白雨や田もみめぐりの神ならばと、雨乞せし
は此社ぞと、心面白く氣も隅田川の渡場にいたり、初めて遠くも來にけるかなと、そこ
ら見とると折ふし、船頭が呼びかけて、およい乗るのなら早うござれとわめくにぞ、あ
はれ都女郎ならばとたはむるゝに、船頭もぬからず、業平にとは申さぬと漕出しぬ。梅
若が塚じるしの柳にたよすむうちに、若し旦那、どうやら曇りましたが、降らぬ中にそ
ろそろお戻りなされませぬかと言ふにぞ、いかさま日和が落ちた、雨具の用意はなし濡
れてはなるまいと、一二丁引返すに、はやほろくと降りくれば、南無三寶と、主従二
人走りつまづきて、漸く禪宗臭き庵を見付け、まづ雨舎をと内へ入りて、御免なれ、手
前は旅の者でござるが、俄雨に合羽を持たず難儀仕る、暫が内雨をやめさして下されとい

いはう所一
言はん
て難すべき
點の義
入端―出端
の出を諱ん
でいふ語、
出たての茶
ござられま
い―行かれ
まし

ひ入るゝに、釜の前に十三四の小比丘尼の、目元凛しけなるが居て返事もせず。奥より旅
のお侍、こちへ這入つて雨をやめてござりませと、言ひつゝ出づるを見れば、年の比廿四
五の尼、其美しさあてやかさ、物腰けはひも賤しからず。いはう所のあるは、額面に何に
が出来たやら、べつたりと膏藥張つてあるのは正眞の玉に疵。もし善光寺の御印文を象
鼻の格で包んでおくのではあるまいかと、見惚れながら腰かくれば、小尼が汲んで出す
入端、はてしほらしいと云ひつゝ、煙草四五服くゆらすうちに、雨は次第に降りしきり、
いつあがりさうな氣色も見えねば、主従途方にくれて居るを、主の尼氣毒に思ひ、旅の
空に雨具もなしに、さぞ御當惑、しかしきつう降りますればござられまい。見苦しけれ
ど、庵に一宿なされて、あす天氣に成つてから、江戸へ御出なされませと、打ちとけた
詞に力を得、それは有難い仕合。お詞にあまえゆるりと雨をやめませう。其うちには小
止もござらう、御免なれと上へあがれば、そこは端ぢか、まづこちへと奥へともなひ、縁
の障子を開くれば、春雨の隅田河へ降りくる氣色、どうもいへず。うかくと咄す内に
遠寺の入相、これはならぬ。濡れてなりとも、そろりと身拵すれば、主の尼がどれへ
ござる事ぞ。最早日は暮れまする、雨もやみませねば、是非とも御宿申すつもりで、茶

つき上つた
事一増長せ
る事

宗哲一中村
宗哲とて天
祿頃の有名
なる蒔繪師
お箸なされ
ませ一召し
あがれ
一圓よめれ
ど一一向合
點が行かれ
ど

漬をこしらへさしましたと云はるゝに、それは近頃の御深切、つき上つた事ながら、一宿御無心申さうかと、いつそ心が落付いて、家來も勝手に横にならしやれと木枕、忝うござりますと、遠慮せぬが下郎のくせ。數寄屋行燈の灯心かき立てよ。さあお茶漬と持つて出でるは、宗哲の夜食膳。心を籠めしめてなしに、これは御馳走、尼御にもと、いひつゝ箸をとりて平皿の蓋とれば、小鯛の難波煮。こりやどうちやと見合はすうち、亭主の尼立出でて、里遠き庵の事なれば、何にをあげまするも、ふつゝかな事計、ほんの御茶漬、さあお箸なされませ。お見合はせなされてござるは、もしお精進と申すやうな事にや。旅なればくるしうもござるまいと、何けなき顔付に、一圓よめねどまよの皮喰はぬは損としたよかにとりこめば、御酒一つと爛鍋に添へて雲雀の焼鳥、温めてあけうと、火鉢引きよせてあぶらるゝに、いよく興冷め、これはどうでも江戸中のいたづら後家、いひわけまでに刺りこほち、この淋しい所に居るは、夜どほしの責念佛、鄰かまはずのお好様。しかし男の影も見えぬは、今夜は寺役でこぬとのしらせ。それで我等を泊めたと見える。顔の膏藥もてつきりおどもりの濕の瘡。これをしめる奴も後には鼻落瓜になりをらう。さりながらあの美しさは又とあるまい。なんでも今夜は一盃すごし

舌なめすり
して一口の
まはりを舐
めて
さいたおさ
へた一獻盃
の事をいふ

竹の内一竹
内久盛の始
めし劍術
關口一關口

て酔まぎれに、宿賃をこつちへせしめてくれんと、舌なめすりして、しからばお辭宜なしにたべませうと、盃取上て一つうけて、持合はせましたがあけませうか、誠に他生の縁とやら、ことない御馳走にあづかります。今宵は夜とともしつほりと咄ませうと、少し含ませたの挨拶に、さいたおさへたの數重りて、何んとも尼のあるまじき不身持と思しめさうが、お侍は都方とあれば、一入珍らしい好もしう存じまして、あらぬお頼の筋聞いて給はるか、打笑む顔の憎らしい程可愛らしく、壓は三井の堀ぬき井戸。夢ではないかと飛立つ嬉しさ、今宵の御禮には何事によらず承りたし。ことに武士と見てのお頼み、しんぞ命でも差し上げます所存。たのまるゝ拙者は仕合ものと膝すりよせて、そろゝと手をとりにかゝるを、飛びしさつて身がまへし、いや油断は仕らぬ、命でもと仰せらるゝは、眞劍の勝負こゝろみんとの事か。それとても引は申さねど、尼がお頼は竹刀の所望。御仁體の奥床しさに、御上達の程も思ひはかれて、未熟の藝愧しう存じます。夜長の徒然に一手お立合ひ下されよ。御流義は竹の内か關口か、尼が習ひ得しは柳生流を少しの嗜、女の儀とて遠慮なく踏んこんで御立合ひ下されよ。こりや子尼、其竹刀持つてこよと、詞の下より持つて出る皮卷の竹刀二本、十文字にさし置いて

彌太郎の流
義
柳生流一柳
生宗炬の始
めし劍術

石突一薙刀
槍等の柄の
端にある金

印可一允許

燈を遠ざけ、主の後に坐り同じ身がまへ、すはといはどの眼ざし。旅人大きに驚き、私
は全く武士ではござりませぬ、京都下立賣の町人柳屋權兵衛、雅名は里江と申すもの。此
度江戸見物に御出入の御所方より帶刀を許され旅ばかりの侍、遊藝ならば何んなりとも
お相手、和歌、詩作、茶、香、鞠、三絃、漢畫もよほど書きますれど、兵法は扱おき相
撲ひとつとつた事はござらず。お目利違ひ迷惑千萬。しかし、呑込ぬはこなたのお身持。
尼の姿で武藝とは、物好がいき過まして思ひがけがござらぬと、顛ひく尋ねれば、御
不審は尤。わたしは江戸永代堀難波屋何某が娘、幼少より武藝を好みまして、さる浪人
衆に稽古いたし、柳生流一道の印可は残らず傳へてをります。額面の疵は前々月木挽町
で、競と口論いたし、四五人は見せつけましたれど、相手は大勢ゆる此の如く疵を負ひま
した。あはれ侍ならば、此疵ばかりも二百石は確なもの。其喧嘩から一家共がよりまし
て、無理に尼にいたしましたして、此庵へ隠居させましたれど、好な道ゆる閑居の樂しみに、
これに居ます小比丘尼にも一手教置きました。お慰みに薙刀遣うてお目にかけてよといふ
より早く、玉襷ひらりとかけて飛上り、長押の薙刀石突とんと鞘をはづし、左右をはら
うて水車、目のまふ程の早業に、でかしたく、御覽の如く小腕には器用にござります。

御仁體一御
人柄

私も尼になりましたから、法師武者の心で、名は筒井の淨妙の淨の字に、辨慶の慶を合
せて、淨慶と申します。卑下なされても其方様の御仁體で、町人とは心憎し。中々無
手とは見えませぬぞ。偽りて叩き伏せんとや。お立ちなくば此方からと、竹刀おつとり
立ちあがれば、のう、かなしやと、主従もろとも横になつて逃げて出づれば、春の雨夜
としんの闇、こけつまるびつ命からなく、跡よりも武士たる者の女に後を見するかと、云
ふ聲河風にふき送り、耳突抜ける怖しさに、兩國橋もいつ渡つたやら、やうくと旅宿
に歸り、夜は明けぬ。きのふに懲りて、けふは芝居へ、中村勘三が二の替見に行きしが、
上棧敷にきのふの尼、役者まじくらの酒盛、扱はやつぱり人で有つたか、天狗でも無さ
うな。

第二回 身過はあぶない輕業の口上

國に宰相とならずば、儒醫となりて人を救はんとあれど、其救ふといふ事阿彌陀如來の
方へゆづりて、此度は愚老も大切には存じたれど、是は全く昨夜の雨風で、時氣を受け
られたと見えますと、いはるよへり口無理でなし。我力一杯是で癒らうと思つた所は、如

へり口一妄
言



小田原外郎
相州小田
原より出づ
る痰の薬
これやこの
一蟬丸の詠
をいふ
衆方規矩
書名

何にも薬違でない道理。十四經難經は讀むとも、脉はめつたに見えぬ物ぢやけな。人の手取まへて尺八籟の指づかひ、其間に心では、こよは三分薬にして來れば、陳皮、獨活、桔梗の類をたんと盛らねばと、胸の内の十露盤が二進も三進もゆかぬ段になりて、醫はそも藥料の官、なんぞ死命の官に預からんとは、さりとはよい逃口なれど、定業といふ得心があればこそ、親の敵ちや立上つて勝負せいというてくる人もなし。近年は賣薬が繁昌して、勸學寮の錦袋圓、富山反魂丹、後藤黒子丸、大黒屋の地黄丸に小田原外郎、俵屋ふり出し、其外數も限らぬ藥店、看板の外に桐木偶、あるひは熊の子に氣にもすよまぬ棒捻させ、ねむり落ちる梟を撞木につきする、豕を吼して人寄の口上に、往來の足を止めるまでの店ざらし。飼うたる鳥獸に親元がなうて仕合ぞかし。これや此とよみし逢坂の關路も、今は大津八丁に立ちつゞきて、商家建ちならびたる中に、根元本家みすや針を商ふ家多し。此店付は間口五間十間にとり放して、所がらの大津繪襖、あけたあちらは座敷でなうて、庭前のおふ坂山が行くも歸へるも胸づかへた家建。其中に間口も狭き藥店、打身藥勝劣散と、松板に養拙流のふすほりて文字も見えず。主は惣髮の老人竹田周益とて、衆方規矩だのみの庸醫、女夫さへ渴々の朝夕。子は一人ありたれど、取

札の辻の雲
助一官の制
の立てる
辻にをるか
ごかき

出女一お晒
落とも書く
賤しき遊女

所なき不孝ものゆるゑ、家出のなりに尋ねもせず。子のない昔とあきらめて、一代切の了簡なれば、幸に療治もはやらず。されど仕舖の打身藥一服廿四文づつ、札の辻の雲助が、日の岡峠をふみくぢつたが、あの藥でよかつたといひ觸せば、矢橋の船頭が舟がはで突腕した痛が、一服で愈かつたと悦ぶ取沙汰、誰いふとなくよう賣れど、老人夫婦が手すさびなれば、賣切す事のみにて、いつ鍋釜の賑ふ事なく、目の見える蟬丸夫婦、知るも知らぬも哀とや見ん暮成りけり。されば年寄と紙袋は入れにや立たぬといふ譬、腹淋しい事も有りしにや、女夫二三日隔てて死なれければ、家主の針屋耳介頼母しい男にて、跡懸に取りたいて、家出の息子が戻つて來る事もやと、破れ道具醫書四五冊我方へ取つて置かれぬ。去程に家出の息子三平といふは、年も三十にたらぬ浮氣もの、ふと八丁の出女に思はくがありて、ないもせぬ親の著そけまで打ちまけて、我も内證の借錢に尻つまらず、あてどなしの脱落、大坂の長町に知己を尋ねて落ちつきしが、いつ限なきかよりの人ゆるゑ、あたりの旅籠屋へ身をよせて、住吉堺への宿引、口先の發明にて、熊野參を蟻のつゞく程つれて戻るゆるゑ、親方の悦、よい者を抱へて、此春は道者衆が多い、利口者ぢやとほめそやせば、三平これを鼻にかけ、傍輩への我儘、海道の雲介相手に端錢の

しこり博奕
—熱心なる
博奕

ちやるめら
—支那の樂
器

阿彌陀池—
大坂和光寺
内にあり

しこり博奕に、親方の手前二三貫の仕過し、爰にも又居られぬ首尾、生れ付いた口松に宿引の間にあるがしみついで、張儀蘇秦のやりばなし。舌一枚あれば世界は樂ぢやと、一日暮の胴がすわりて、輕業の口上に雇はれ、天王寺の彼岸中、太夫は長崎仙人鶴之介といふ一本綱の名人、小家がけ高く初日からの大入、喇叭、ちやるめらに三味線を含はして、三平は二挺太鼓のうちまぜ、柿の袴の肩衣ばかりにて、東西々々、扱まかり出でられました。此度の太夫、長崎仙人鶴之介と申しまして、御當地はじめての御目見、最初仕つりませんが、懸わりました一本綱の上にて、式三番叟の一曲、次に花傘居合の一手、達摩大師座禪車、獅子の洞入、鶯の谷渡、猿の木ほり、大津馬の追がらし、跡は四本綱渡天の一曲、はり／＼と／＼と聲はり上げてしやべりちらせば、輕業もようするが、口上が上手ぢやと近年の評判。そこを仕舞うて阿彌陀池の開帳、天満天神の境内、京の四條河原の涼にて、太夫仙人鶴之介京女房の脛の白きに通を失ひ、山雀の逆おとしに落ちて眩暈して跡のどよみ、まづさしあたりて間に合はねば、涼の間の大設を取りはづしてはなるまいと、俄に見世物のもくろみ、思はしい支離もなく、どうせうと思案の最中、壁鄰の油屋の絞を働く男が、盜猫を引きとらへて借屋中わめき散すを聞くよ

貰はかして
—寄贈して

り、ふつと思付いて、其猫わしに貰はかして下されと、引きさけて戻るや否、燃えあがる柴火の中へ投げこめば、苦しきのあまりに飛びあがるを、打ちこみ投げこみて、髭も毛もさつぱりと焼きはらひ、口押割りてはり木をかへば、きやつとばかりのなく音も出でず。それを剃金の綱へ退ひこみて、さあく、此度紅毛から渡つた生き麝香はこれぢや。正のものを生でお目にかけて、わめき散して、一兩十四五文の五種香をめつたにくゆらすれば、是に珍しい生きた麝香は今見はじめぢや、併しとんと猫に毛のないやうな物ぢやと見て居る内に、口にかうたる木が抜けて、一聲ニヤンヲと鳴きしかば、見物は可笑がりて、此麝香の名は三毛とは云ひませぬかと大笑にて、それからは蛇もたからず。是ではいかぬ。大坂の長町へ下り、何なりと計畫んと、翌朝晝舟に飛乗りて、錢儲の工夫にこり、うかくと煙管咬へて居る乗合に、五人前借切りて家來一人挾箱一荷の旅人、卑しからぬ仁體なるが、三平が顔をつく／＼見て、貴様は何處でござると尋ねれば、わしは京都の者、急用にて大坂へ下りまするといへば、されば先程から其許の人相を見て居まするに、天晴秀才出世する人なれども、只今の産業何めさるとか知らぬが、妖怪に心神を破らるゝ相が見ゆるによりてお尋ね申す。天性人の下にたゝぬ身分なるに、殊

そと致した
る者―ちよ
つと身分あ
るもの

方劑―薬の
調合
剃下の奴―
髪を三日月
形に後方に
そり下げた
る奴

の外相を損じめされたと云はるゝに、三平肝をつぶし、是は不思議。何を隠しませうぞ。私も元はそと致したる者の忤、心から落魄れて、わるい身過を致してをります。今日は大坂の長町へ見世物のもくろみに下ります。かやうな事を致しますも不孝の罰と、今思ひ知りました。どうぞ人らしい身に成りたうござりますが、何を致したらようござりませうぞ。ついでに御覽じて下さりませと頼めば、怪異に悩む所の相がそれで知れました。貴様の相も學道がひらいてあれば、そろゝ、醫でもめさるゝか、薬店なども良うござらうと、いはるゝから心づきて、大津の親元の打身薬、よう賣れた老舗なりしを、今は過ぎゆかれしと聞けば、跡はどうなりし事やら、何でも大津へ是から行て、家主にたより、其方劑を吟味せんと、俄に思入がかはりて、船頭牧方へつけて下され、寄る所があるゆゑあがりますと、人相見に一禮いうて、伏見へ取つて歸し、大瓶谷を大津へ出でて、八丁の親里針屋耳助方へ行きて、段々の不埒を申しわけの嘘八百。世帯道具醫書ともに乞受け、打身薬を調合して、荷物立派に飾立て、剃下の奴にかつがせて、大津より京、伏見、淀、鳥羽の端々まで、足かぎり口に任せて白聲のひねり口上。手前家法勝劣散、功能の儀は、第一打身、脚氣、立ちぐらみ、中風、麻痺、麻木、一切不順の妙薬なり。別して産前産後

代物―代金

まや薬―ま
やかし薬

居なし―す
まひ

には神妙の薬能、其外萬病に用ひて功を見すと云ふ事なし。かやう申せば、いづれも様が、其やうに何病でも利く時は、世界に醫者は入らぬものかと仰せられませうが、如何にも當時町方の醫者衆が銀口入、嫁入の仲人、茶屋文の届處、初日棧敷の使なさるゝ方方の醫案の薬召上らるゝは、必竟追剥ぎ原へ螢狩にごさる同前。しかれば手前の勝劣散は諸病本服功驗の外心を用ひず、人を救ふに他念なければ、お立合の方々は、薬の功能御試みの方々は、代物お持合はせがござらんとお召しなされて、如何にも此薬はあの者が申した通、たちまち功を見たと思召さば、又々薬お召しなさるゝ節、其代物を遣されませ。家傳名法勝劣散、はりくゝとうゝと輕業の口上、拍子に間にあひは云ひ次第。元よりまや薬にもあらず、呑んで功を見るもの多く、日まし夜ましに賣りひろめて、次第に手前よろしく、古郷なれば、大津八丁札の辻に、五間口の屋敷を求めて、店つき花々敷く飾りたて、見世物士から引きかへした出世とて、屋根に金の麝香を目印とし、諸國の出店町々の取次所、岡目からも二三百貫目の居なしにて、純子縮緬の常服太に金拵の小脇指、小坊主の僕兒つれて、石山、三井の花に明くれ、此身になりても零落には、長町の宿なし住居。四も八もくはぬとて、名を大津屋四茂八と改めて、世をう

ちやすに暮すのも 親の光は七光。 大津八丁の勝劣散とて近年の仕出なるよし。

第三回 雀は百まで舞子の年寄

おそろしき物、老の化粧師走の月と、近松門左衛門が筆まめ、トラヤア〜といふ唐音も、今は昔と成りけらし。されば女は髪容といへど、よい年後家の逆馬に入つての氣嗜、きはめて其家には、加賀の繻紵著た出頭手代があるものなり。連合の末期に泣きくづをれて、髪尖切つて棺へ抛けこみ、付いてもいきたいやうに歎かるゝ内儀の、もの一年と持ちこたへのしたは珍しい物ぞ。子を思ひ家を思へば、髪切るとも尼になるとも、一家の差圖遺言の趣、其をかまはず早まるは、皆徒者の癖ぞかし。去る富家の後家御が六十にあまる十筋毛を、九萬里に羽をのす大鵬ほど髣出して、紅粉白粉を敷にすりこみ、つくりすましての墓參、和尚様の精進料理がくひたらず、寡住の達者づくりに吸付けて、花見芝居にかこつけ、臍の下の岩清水をかへせば、彼まめ男は三界のならず者にて、ある夜の出合から我内へ引込みて、今日より女房にするから去なす事はならぬと、銀にする氣の横倒、世取の惣領は生れたちの實體者、常々母の身持をば、世間の口へ手をあてよ

銀にする氣

の横倒一金を得んとする無法

市字賀の伽羅煉一京都三條市字賀繩手なる五

案じ暮の上なれば、猶更濟まぬと氣をもんで、手代を迎にやられるれど、二日三日の居つづけに、腰抜かされししみたれ後家。あのやうに云うてなら、まだ四五日も去なれまい。息子の手前もよいやうにいうてたも。お居間にそつと囁いて、櫛笥、鏡臺をおこしてたもと、どこまで白痴をつくも髪の恥白髪。漸く佗言たらぐで、一廉のあつかひ代、竊にすめと思へども、世間一ぱいこれ沙汰。こんな母親を持ちし身は、札よき鎧に五枚兜を著てあるいても、突くやうでさすやうで恙蟲の穴へも入りたかるべし。それとは事は好しい名なれど、京の智恩院の古門前に、辰巳屋宇治江といふ舞子あり。ちよつと聞いてばかりはうら若み、ねよけに見えねば是までに片付もなく、兎やかくするうちに、百歳の半婆となりしが、幼少より縫くよりに疎く、今更針の穴も通らぬ年で、裸人形の服も縫ひならはれず。いつまで草のうかくと、やはり宇治江で舞と三味線。毎日の鏡立に向ひて、頭の白くなるを悔みながら、其を市字賀の伽羅煉で、きんしやうきんしやうの大吉鬘のと、鯉節編んだやうに結立てよ、腰に梓の弓をのしきり、幅廣縹子の三重廻、吉彌結に金糸の房たつぷりと、塗下駄に青天井の日傘。夜目遠目にも、女の外科とよりは言

諸道聽耳世間猿

十嵐の製す
る伽羅油
外科一醫者
花車一青樓
の新造、鴛
母

關寺小町一
長唄の曲名

はんなり一
花やかなる

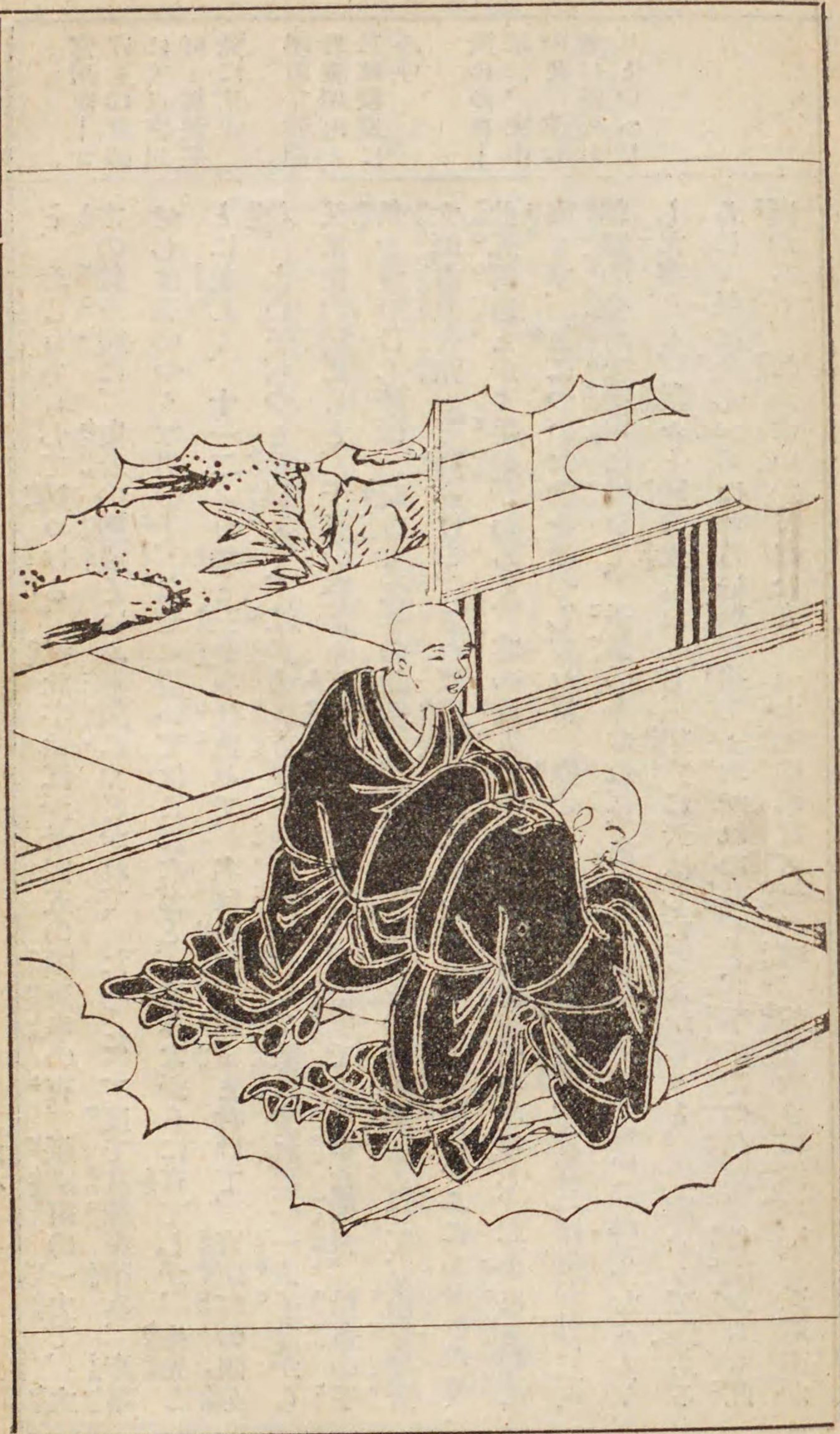
ひやうのなき風俗。東石垣の井筒屋に山もどりの年寄客、色氣は有つても肝心の所が間に合はず、わつさり一つ飲まう、どれぞ舞子をと物好けば、お客の年には相應と、花車が差圖で宇治江を呼びに走らすれば、いつでも内に入まいの悪い舞子、呼びに来たか、えい〜と疝氣さすつて衣裳に著替へ、足もとがあぶないと、中風の用心に弓張提燈、おくらるゝ後影のいふせさ。座敷へ出るといな、客は興さめて、こりやどうぞ、今日は珍しい三年ぶりの色遊に、皺延にこそ寄つたれ、皺くらべには來ぬ。是なら宿へ歸つて婆と麻酒で楽しみましょと、盃さし捨にいなれる。宮川町の丹波屋で、三味線繼いで本調子に合はせつと、歌はづかしや、人の恨のつもりきて、頼む物には竹の杖、泣いつ笑いつ物狂ひ」と、關寺小町を諷出せば、客は智積院の出家達、よう〜、うたうてうたうて、長橋の局へ繪旨受けに行たやうなとの悪口に、一人の和尚が是々老女、そもじが諷ふは、小町が年寄つて物もらひになつた文句、こなたが弾くと、正眞の小町が出現したやうで氣がめいる。何ぞはんなりとした物をと望めば、宇治江少々むつとした顔、不粹な事をおつしやるお方々、歌によそへて年寄をお嫌ひなされますれど、たとへ深山の朽木でも、花さく春もござんした。わたしも盛は過ぎましたれど、心の花がかはらねば

妓交一遊女
通ひの義

百歳に一と
せ云々一
年にひと
せ足らぬ
つとも髪
吾を戀
ふらし
おも
かげに
見ゆ

誠の名うて
のすつばの
皮一眞に
取るに足らぬ
奴

こそ、かうしたはでな勤を致してをります。墨に染めても、お心に色香がある故の妓交、なされますのでは無いかえなと打ちこまれて、二人の僧起きなほりて、それは地水火風空の五つは人の體。心は變らぬと云やれども、像も聲も變るからは、若い妓衆と一口に、現世利益はあるまいと、疊叩いて詰めかくれば、いえ〜、それは猶不粹、すでに業平さん百歳に一とせたらぬと詠みて、枕をかはさんしたを、世の戀知りとはいふではないかえ。顔の美しいも外面如菩薩の戒あれば、著けたとて若いとて、戀に染れば戀衣、一念發起菩提心、色も心、無常も心、いくつに成つても藝子はけい子でござんすと、いひまくられて、ぎつちりつまり、さあ其菩提心があるならば、其年で藝子はせぬ筈ぢや。はでな歌うたふより、念佛の一遍も申すが順縁といふ物ぢや。それも逆縁なりとうかむでござんせう。そんならこちらが斯した遊も、成佛得脱するやいかに。なる程あなた方の墨染も、今宵の座敷の戀衣、女郎の手管も佛の方便と、聲あらよかに罵れば、誠の名うてのすつばの皮、背中の兀し藝子やと、僧は天窓を搔き〜、あのけい子迎が來たら去なしてたもと云はるれば、宇治江は猶も腹たてよ、川竹の勤なりやこそあしからめ嬢なら何にがくるしかるべき



宮川町一か
げまは京師
にては宮川
町と嬉遊笑
覽に見ゆ
堺町一陰間
看板堺町と
三杯機嫌に
みゆ
庚申の夜一
諺に、庚申
の夜に孕む
者は盗心あ
りといへり

と、おこりちらして歸りける。搦此宇治江が卅四五の頃庚申の夜、祇園町の一方で、大寄の雑魚寝に、鬼若の辨藏といふ幫間にくどかれて、たつた一度で其種を孕み、産落せしは玉のやうな男の子。なぜに置いてはこんなだと、悔みながらに育てしが、生先こゝに美しく、十一二より舞と三絃を仕込みて、名は石河五郎市と付けて、宮川町の四匁花。よい子ぢやと評判よく、江戸の親方が百兩に飛び付いて談合すれば、一人子ながら又出世の種にもと、十五の春より江戸へ下しけるに、堺町でも見事な繁昌。傍輩の子供を賣りひしければ、親方も近年の銀箱と、朝寐してゐる尻の方へ燈明あけて、南無高野大師遍照金剛とぞ拜みける。されば庚申の夜に宿る子はと、下世話にいふにちがひなく、此五郎市とかく手癖がわるく、客の寐入るを考へて、涕紙袋の中を探し、一步小玉銀に限らず、目についた物をはづしければ、寐ごきが浦の客衆も、度かさなれば氣が付いて、朝歸の臺所で亭主に囁きて、子供の事なれば、あながち慾でもあるまいけれど、かうくした事ども、段々と肝の太らぬうち、親方に云はしたらよからうと、内證いうて歸らるるに、是は怪しからぬわるい病。捨てよおかれぬ品ぞと、手紙での付届。彼處からも此處からも、何がなにかとないと、一犬吼ゆれば百軒の噂。親方大きに驚きて、五郎市が

愛想も月の
手長猿一愛
想もつきた
る盗人の意

惣嫁一夜鷹

留主のうち、文庫をあけて穿鑿すれば、薬入、香包、小柄、印籠、煙草入、小玉銀四五十、壹歩二十切、蓋のならぬ程おしこんであれば、あきれ果てよの強異見に、當座は聞いたやうなれど、目のゆきやすい閨のうち、愛想も月の手長猿、尻からはけてくるなれば、逆もなほらぬ根性と、見かぎり果てよ長のいとま。京の親へも聞えたれば、内へもどるな、勘當ぞと涙を墨にすりませて、憎し〜のひとつ書。廣いお江戸に住所あらしの夜半も雪の日も、布子一單寒晒し、あはれいにしへは翠帳紅閨にいとしがられし尻の穴、心からとてすほまりし、肩身もせばき浮世やと、棒薬より辛きめにあふも此身の鏽刀。往來の人に袖引きて、兩國橋で若衆の惣嫁、牛若ならで馬若衆、今宵で丁度千人の情もうすき端錢。引きとめられて提燈の明にちらと見た顔ぢや、たしか堺町の五郎市と、立ちもどりが氣が付いて、腰の巾著あるかと思れば、南無三はや仕てやられた。

諸道聽耳世間猿 四之卷

第一回 兄弟は氣のあはぬ他人の始

神州五畿七道に分れてより、都鄙の文言に其土地をなはりて、因幡鴉に伯耆猫、伊勢人のひがごといふと詠める歌あれば、山城の人は八十字治つくとはいへり。國々郡々にてちがふ筈は、一つ籠の物喰うてさへ、いひごとの絶ぬならはせなれば、人の心同じからざるは、其面のごとしと、いへるもざる事なり。中にも足曳の大和の國は、文字にさへ大きに和ぐと書いて、土あまく山肥えて四神相應の地なれば、皇都もあまたよびこよに遷し給ふ。人の心すなほにて、假にも偽をかざらず、上を尊み下を憐み、行くものは道を譲り、耕すものは勞を助けあひて、花の吉野、紅葉の龍田、何に不足なき上國なり。むかしくの京寧樂の町に、鵜飼屋伊左衛門、伊兵衛とて、色も香もある墨商人、軒を並べて兄弟住みけり。兄伊左衛門は幼少より世渡の心がけよく、商賣がらとて握り墨の卑吝人。親の譲とは三挺かけの身體にして、手代十人、僕兒七人、家内三十人餘の大

因幡鴉に伯耆猫
人の言語は鴉の如く伯耆人は猫に似たりの義

握り墨の吝人
握り墨は吝人の縁

言として用ふ

賄、諸國の outlet へ卸荷の世話注文の懸引、目づらもあかぬ掴みどりの繁昌。若草山に櫻が咲かうが、木辻に夜芝居がはじまらうが、敷居一寸外へ出でず。春日様は慈悲萬行の御誓願なれば、商人の爲にならぬ神様と、御祭にも参つた事はなかりけり。弟の伊兵衛は兄の氣質とは若干の違にて、生得の廉直より迂作つかず追従嫌にて、身持萬事に高尙を好み、兄の吝嗇を憎みて、常々なかよからず。春は飛火野に若菜摘くらし、夏は佐保川の螢狩、洞の楓樹に小鹿の鳴音を添へて秋を感じ、寒き夜のあられ酒に、冬籠して世事にかよはらず。今春太夫につきて扇の一手より芝能に羅綾の袖をひるがへし、連歌は京の花の本に入門して、風流もつばらに修行せられぬ。此男の癖にて何事を稽古しても、最初から論がつき過ぎて、無要の事に念を入れて金銀を積んでも、傳授といふ程の事、さらへてしまはねば気が濟まず。古今の三鳥三木、源氏物語に三箇の傳、勢語に七箇の大事と残りなく傳へ得て、宗祇法師の鬚に香をとめられたは、連歌を案じる使になる事にや。もし左様ならば、私が髭も延して炷きしめまじやうかとの執心に、花の本も返答にさしつまり、いやく、あれは其やうな事ではござらぬ。宗祇は歌枕に飛廻られたゆゑ、旅籠屋の蒲團のむさいから、蚤虱わかすまいための用心であつたけな。以前は

花の本―連歌の宗匠の號、宗祇法師に始まる古今の三鳥三木―古今集の祕事勢語―伊勢物語

宗長―宗祇の弟子連歌に名あり天文元年歿

御寮人―令嬢

髭に油をもつけられしかど、わたり奉公の奴めきて風流ならずと、香をとめられたるよし、宗長が書ける傳書に、さだかに其由をしるしましたと、につこらしく云はるよを、伊兵衛甚だ感心して、珍しい祕説を承はつた。それでよめた事がござります。町家を往來いたして見ますれば、小間物油などを商ふ店に、髭油と申す看板をのりましたは、宗長の書を出處にてつけました物と、初めて心が付きました。わづか小間物を商ふ者すら、かよる風流をいたすものを、我等が只今までのおこたり、恥かしう存じまする。其傳書も御傳へなされ下されませ。まづ書の標題は何と申しますると尋ぬるに、宗匠ぬからず、されば書の名目は志賀の湖と申すが、白髭の神に思ひよられしと見えますと利口せられぬ。かくて風流に苦みて寢食を忘れ、三十に餘れど、未だ女房の沙汰もなく暮らさるよを、ひとりの母御が心濟まず。兄伊左衛門と談合すれば、はてほつておかしやりませ、女房持てと勧めたとて、あの奢ものが又高尙はつて、町人百姓の娘は育が賤しい、公家衆の御寮人がな貫はうといひまじよ。とてもつまらぬ身上、子一人持たぬ昔とあきらめて、何事も御世話は無用と、塵灰つかず取りあへねば、猶更に心落附かず。弟伊兵衛を呼びつけて、其方もいつまでの獨寝ぞ、人の家には眞柱がなうてはつま

つまらぬ身
上—及ばぬ
身の上

佐藤則清—
佐藤義清な
らん

ほつとり者
—美女

とやかくや
姫—兎や角
と赫夜姫と
を通音させ

らぬもの、彼方此方から似合の縁もいうて來れど、是までとりしめて談合も仕やらぬは、
どうしたおもわくぞ。一日も早う呼びむかへて、初孫を抱かしてたも。第一母への孝行と
詞を盡していはるれど、伊兵衛中々聞入れず。母には風流を遊ばさぬゆる御合點がまる
らぬ。妻子に足を繋がれては、諸道共に成就いたしがたし。古の名ある人は、皆家を捨
てと剃髪し、歌枕修行せられました。既に佐藤則清が西行法師の類あまたあざ事なれ
ば、私も兼ては歌枕の行脚の望でござります。人は一代名は末代、虎は死して皮を止む
と、禽獸すら心なきにあらず。縁邊の事は御免下さるべしと、更に得心の色目もなけれ
ば、兎角是は手廻に美しい女を遣はさば、自然箸のかよる事もやと、京奈良中を吟味し
て、年恰好十七八のほつとり者、竹取の翁が百目つけて貰うたやうな器量よしを傍近く
つかはせ、朝夕の給仕寢道具のあけおろしに、思ひつかるよやうにせよといひ含めて置
かるれば、此女も氣に入つたら、本妻になることよ、髪かたちはもとより詞遣立居ま
で、とやかくや姫の立振舞に、色々と心をつくせど、伊兵衛は一心不亂机にかより、兼
好がつれんはよう書きたれど、おのれは伊賀の成仲が娘をてよくり、又師直が艶書の
下書してやりしなど、あるまじき不埒者。清原の俊蔭は一人娘を方々から貰に來れど、

たり
てくくり—
ちくくり、
馴れ親む
うつば物語
—平安朝の
小説作者未
詳

ばいまくれ
—追出す
過ぎ行く—
死す
稻おほせ鳥
にして—頁
はせてをか
けたり
飛鳥川—あ
すか川淵に
もあらぬわ
が宿もせに

天に任せて許さぬ潔白が氣に入つたと、うつほ物語に首打振りては、お妾が鼻のさき
で在宮の神子見るやうに舞ひくすれど、首筋が白いとも帯の結び下けが可愛らしいと
も思はず。何がな云ひよるよすがにもと、山吹の薄出端を吸んでさし出し、笑顔つくり
て、今もじは朗らかな空に、徒歩も遊ばさず、御氣つまりなお慰。御歌でも御詠じ遊ば
すかと寄添へば、伊兵衛目の玉をひくりかへして、其儘煮え茶を女の面へさんぶりと打
ちつけ、こいつなめ過ぎた、おれが歌よまうが氣がつまりうがうぬらが知つた事か。又
しても目の先を百度參する程舞ひつきをるさへあるに、手代共この女郎め、ほいまくれ
と、抱へて寝る所か、生爪はがして山の薯蕷ほりさうな勢に、とつてつかう島もなく、
お母老は明暮これを苦に病んで、程なく過ぎゆかれたれば、いよく兄弟中疎くなり、
物事ひだり衽になれば、内藏の箱傳授もいつの間に空殻となりて、手代共が引負も筆先
で旦那へ稻おほせ鳥にして、よい顔で隙とれば、いつしか鹽尻がつまらぬやうになりて、
家屋敷も賣拂ひ、帳切の席より伊勢が飛鳥川の歌を吟して、般若坂の邊に小家かりての
侘住居。三分筵の相借家には、うつほの俊蔭に似た人があらばこそ、業平の密夫がはや
りて、押へたのつともたせのといひ事止まず。近所鄰に物いふ事もうるさく、こよにも

變り行く物にぞありける古今集にありつゝもたせし色に托して金をとること世人皆濁る云々―楚屈原の漁父辭にあり首陽の蕨―伯夷叔齊の故事知識―高僧

一二月にて三條口へ宿替すれば、博奕の盆家、ねたれ者、喧嘩の相手を切つたのと騒しさを聞きたびに、人外の交するがかなしやと、其後そこにも住みかねて、世人皆濁る、我ひとり清めりと、水涕たれて小うさんにさまよふを、別家の手代が聞付けて、兄伊左衛門に段々の訴訟すれば、憎い奴ながら一人の弟、殊に母の末期まで苦にしられたる詞、かれ是を思つて、月に百目の合力を遣はすべし。其方達うち寄つてよきに支配してやるやうにと、ありがたき兄親の慈悲。伊兵衛はいよく、癩癖強く、穢はしや聞きともなや、心のむさき兄が、養、首陽の蕨は喰はじと、猿澤の池に耳を洗ひて、どつちへやら行方知れず。別家の者ども驚きて、方々と尋ねれど、難波で聞けば伏見とやら、大津で問へば堺にと、行く先もく、付合ふ人が氣に入らず。最早浮世を捨衣、ごつそり剃つて青道心。よし野の奥に取り籠りて、屎ふむやあまりに奥の山ざくらと、むかしを悔いての獨ごと。猪小屋程な觀音堂の住居にも、まだ根濟のせぬ事が氣にかより、とても沙門の身の上には、極樂世界八苦の地獄がある事かない事か、此傳授が濟ましたいと思へども、尋ぬる知識もなきなれば、御丈二尺の木佛に、夢になりとも示

鳩の杖―老人の杖

三箇の津―京都、大阪、江戸、旦―若女形末―實惡丑―敵役淨―道化形ほんじやり―踊、芝居

現あれと、斷食にて責めつけければ、本尊もほうと困らせ給ひ、ある夜の曉に鳩の杖もつかず、著のまゝにて枕に立たせ給ひ、微妙の御聲高らかに、善哉々々、牛若丸、汝に兵法の奥儀を傳へん。それ地獄遠きにあらず、極樂はるかなり。急げくと、あかぬけのせぬ御告に、いとど迷の種とぞ成りける。

第二回 評判は黒吉の役者付あひ

笙は鳳凰の聲、笛は龍のなく音ぢやとは、誰が聞いてのたとへごと。よしそれにしてから鶯、松蟲のしほらしみもなし。音楽は太平の調子、鼓三絃は殺伐の音なりと、ある學者の片意地。それもへち物好にて、誠太平の遊事は、三箇の津の芝居より外あるべからず。日月は燈、江海は油、風雷は鼓板、天地人は一大の劇場、堯舜は旦、湯武は末、操莽は丑淨、古今來許多の脚色とは、大濟康熙帝の殿上の柱に書いて置れたけな。天地の大芝居で、堯舜は坂田大和山が温潤、湯王、武王は小佐川柴崎がいきこみで、曹操王莽の悪人方は藤川武左衛門でなければと、唐の帝の芝居好。我日の本は神風や出雲のお國がほんじやり仕出し、名古屋山三が立髪風、花の都の川風に、袖打振りし昔より、今に四



踏み込んだ
く踏みし
だく
ぞつこん
非常、頗

條の櫓幕、眞葛が原に染めあけし、顔見世の春けしき。年々の上り役者、霜さきの冷めたい銀を、誰は今年二十五貫目で南側へすんだけな。北側の江戸役者は七百兩ぢやと、口にほうばる高給銀、嘘かと思へば、見ては無理ではないぞ。唐織の尻からけに、それなりの泥仕合。女形は所作事とて鮫蒲團より見事な襟数、くるりと廻つて一つ脱ぎ、飛びあがつては一つ脱ぎ、縹子も緞子も踏みたんだく。三保の浦へ下りた天人さへ、一尺二十匁切の伊勢講の曠著ぢや、戻してさへ下さるならば、尻まくつて三べん舞ふと泣いたではないか。それから見れば、尤な給銀なり。其尻から思出した東寺邊の生れの男、眞桑瓜程ふとつて居れば、ある名は呼はずに、瓜生と名付け、ぞつこんの芝居好。夕顔の宿ならぬ宮川町に、小家を借りてちよつこと座敷一間、二階も奇麗にしつらうて、所からの建仁寺垣に、海老藏が發句の紙表具、打出しての茶屋ではなく、芝居眞黒の天狗共が、二の替の趣向を三十日前からの評判、かく屋見舞の泥龜のたき所、女房おりさも加茂川の水に灰汁の抜けた粹の果。役者も爰へ入込まねば、評判をわるうしらるゝが嫌さに、打ちつけて念比分。餅つきよ、あたり振舞よと呼びあひ、女夫喧嘩の挨拶、節季の拂の工面までの談合相手、若い立役、制外の女形は清水の朝參の尻、役場仕舞と飛ん

損かけなぶ
して損を
かけ廻りて
尻くらへの
仕うち恩
を仇で返し
て頼みぬ仕
方
くろとがる
油通人が
る油蟲
鬼日大晦
日
一山越した
理窟更に
うは手の理
窟
黄金佛富
豪

で来て、おりさを伯母さまあしらひに、涼の間の色事を呑みこんでもらひ、瓜生がいふことをぢりくとして怖がり、酒代鍋焼の取替銘々二三十匁づつ損かけなぶして、江戸大坂へすつほぬけ、いかに野郎とて尻くらへな仕うちぞかし。入込む客は京中のわるざれ息子、天窓から足の爪先まで、當世につくりすまし、鳥又の驚さへ寒がつて出ぬ朝の間から川東を飛びめぐり、この玄界谷へ陥込みて、役者の名も小太の嘉七のと、番附にない名をいうてくろとがる油。それ程役者が尊うもなければ、有やうは我買ふ女郎藝子の間夫吟味、みづから犬に入つての心づかひ、思へばやるせのなき事なり。此若衆打寄つて拂の銀高を見合ひ、どこは遣らいでも瓜生が方ばかりはと、銘々高歩の死一倍。女郎の櫛の無理借、此節季は仕廻しが、又来る鬼日の談合も同じせりふをいひ出せば、中から一人たつて、よう思うて見や。瓜生も同じ茶屋ぢやぞやとは、一山越した理窟。其から無論の先生家なり。明日は北側の二の替が出る。宵から瓜生で飲明して直にいかうと、下京での黄金佛四塚屋五郎右衛門に、付添ふ幫間は我物不入とて、底なしの酒如來。どやくくと來迎あれば、おりさ立出で、是はどなたもようお出でだ。よう此間扇九からお歸によりなんだなあ。一鳳が告げに來ました。さあ其晩はえら酩酊で、駕に乗

大盡一分限
者
そらるれ
ばうかる
れば
三度笠一貞
亭頃飛脚の
かぶりし笠

つたもおほえなんだ。親仁はどこへじや。いえ、たつた今丁子屋から呼びに来ていかれま
した。鯉長どんの給銀のあやぢやさうにござります。もう歸られます。まあ、奥へいき
なされと、燈を點してはや持ち出る盃は、あひも變らぬ富士郎が江戸土産。棒鱈のこ
ごりで飲みかける所へ、瓜生戻りて、いや御出。今丁子屋の親仁めに一服盛てから、直
に樂屋へいて稽古見て来たが、何でも今度は請けたわいな。今七めがよう仕をる。しか
しあの場を前の音右衛門にして、喜代三がする所を春水あやめで、團藏が役を親柳山で
見たら面白かるとは素人の評判、くろとの幕のうちさして、かはりもないものなり。四
塚大盡芝居咄に現を抜かし、來春はこの連中で江戸の二の替、今團十郎見に下らうぢや
あるまいかとそらるれば、瓜生おほきに悦び、こりやきつと行きたい。柏庭や助高屋
にかたぐ下る約束した。また道中はさす物ぢやない。あの街道ばかりは、始めてなら
惨い目にあはしをるぞいと、馬駕のこなし自慢に、いかさま瓜生は度々下つて咄なれば、
道中案内に同道しやう。そりや有難いの薄約束が、年改りて彌生の空、四塚屋の東下。
連は不入と瓜生に定め、都をば霞とよもに明六つ立ち、瓜生が立出は一番の三度笠に大
津脚半、濱松の草鞋かけ、五十三次一とまたけの御七里仕立。酔でさすやうにいひちら

どうはれ茶
屋一山科十
禪寺村の餅
を賣る茶屋
げんこ取の
餅一五文取
の餅
ほいつけて
おしつけ
て
神おろし
神靈を請じ
て祈禱する
事

し出るやいな、山科のどうはれ茶屋で、此げんこ取の餅はなんほぞとはたき初め、桑名
の渡でごまの灰に、秋葉御夢想の藥を金一步で賣付けられ、富士見が原では駕のうちか
ら、いつも日和がよいと、こよから富士が見えると咄しかくれば、前肩昇いてる男が、
旦那は度々上下なされますかして、よう知つてござりますといへば、跡方の親仁が冷ら
笑ひ、よう知つてござる筈ぢや、駕の中で道中附讀んでござらしやると、ひどい所を見
付けられて、氣ははり弓の矢矧の橋で、向うから馬追うて來るを、右へよけて待合はす。
其方へ馬ほいつけて、やい上方の白瓜野郎め、馬のよけやうさへしらずに、此海道を大
手ふつて通りをるか。胴腰馬にふみ折らすぞよと悪口せられて、あの馬士めも酒くら
ふやら、左勝手へ追ひをると、行く先々を口先で、大井河は海道一の曠軍。こよではな
んでもやつてくりよと、一杯引つかけて頭ごなしに見れど、一目見ても遣る物か京
の下水溜でさへ水が出ると騒ぐに、およそ一里の川幅に氣を吞まれて、強いこというて
居る口のうちには、南無住吉大海神様、天神様、金毘羅様と臆病の神おろし。そこへつ
けこむ河童共、尻の穴まですひとられ、七十川を一人に十人前づつ、まだしも不入は、浪
人ゆる挨拶やらひら詫で無難に川は越えぬ。行きくつて駿河の國富士の山にいたりぬれ

ば、皆々始めての見物に肝を潰し、如何様比叡の山を二十ばかり重ねしとはよう書いたぞ。聞きしよりも見事な山の姿。瓜生なんと此山の裾を二三日も通る事かと問はるれば、いえく、此様に見ゆれど、海道の間は富士三里とて、わづか百五十丁程でござりますと、取つてもつかぬ間に合せ。箱根の關は手判がなうては京へ戻ると、道中雙六で覺えた學文、五十三次はたき散らして、おどろき蟲の俄病。是はと皆の介抱に京までの通駕。肥えふとつた二十四貫目、宮川町のあがり口まで、三枚で金七兩二歩三百文と、足元見られてもしやう事なし。瓜生の連に茄子はならぬとは、此時よりのたとへとぞ聞きし。

第三回 公界はすでに三年の喪服

晋の王義之が師匠は衛夫人といふ女寺屋。此國にては上東門院の上藤達、源氏、枕草紙、榮花物語の作者、近くは小野のお通が筆力、どれもく賢過ぎた言がら、少々の男は尻に敷きさうな鼻達。當世は傾城とても、心たらはぬ方が繁昌する事は、無理いうても腹立てても、言譯ひとつ口説の切もり、出来ぬおほこが零さす涙、一雫が四匁花、一

瓜生の連に
茄子はならぬ
瓜の蔓
に茄子はならぬ
諺をか
けたり

上東門院
藤原彰子
小野お通
淨瑠璃十二
段草子の作
者

亡八―遊廓

粒金丹より高直な物なれど、利目のよき事又とない惚藥。亡八の親方も、今にては抱の太夫に茗荷の子を喰はせけるよし。京大阪の茶屋風呂屋が布袋の土人形をまつるのも、愛敬第一にうだしうなるを願ふゆゑとなり。世は移りかはる難波江の古言、よしあしとは妓女衆の位の事となり。新町の三筋に三の浦の面影残りて、磯臭き昔とは替徳な留壽楠の薫、桃が笑へば柳があゆむ。中に茨木屋の唐土太夫とて、つき出しの美人草。親はもと長崎の生れ、司馬忠庵といふ儒醫。不仕合より大坂へ引越して、おらんだ流の外科を仕かけしに、幾程もなく過ぎゆきければ、内儀は馴染なき土地にてすべきやうなく、ひとり娘のおらんといふを、三年切つて五十兩に苦界に沈め、われは女の按摩とりに、心静に世を過しける。此おらん幼きより父親の勤學を朝夕に聞きなれ、女子には珍しい博學、手跡も明人の筆意を得て、文徵明、董其昌が骨肉を書き、名も唐土と付けて全盛はすれど、いまだ親の喪中とて、衣裳の物すきも一きはねむりめにて、上著は鼠縮緬に五岳の眞形の五所紋、黄緞子に印譜の繡帶。襲は淺黄緞子に蘭亭の盃流を肩裾の摺箔。水櫛の梳鬢は片々たる行雲に似て、桂のひき眉は織々たり。我つかふ禿の髪も鬢づらを結ばせて、名も峨眉少女と呼び、揚屋の花車をお幸夫人と稱し、初對面の客に

過ぎゆきければ
死に
ければ

文徵明董其
昌―共に明
の有名なる
書家
れむりめに
て―くすめ
る色にて

韻鏡—音韻
の書
吉野折敷—
吉野より産
する盆類

は座敷へ出でて、立ちながら手を拱いて、中華の禮をなしけるゆゑ、客はすかさず合掌するを、もうしく、それは天竺の禮でござります。あなた方は、やはり日本の禮を遊します。馴染重ねて逢ふ客に、おまへのお字は何んと申しますと問ひかけられ、字といふ事は知らぬが、替名は歌夕といひますといふに、それは文盲なお名。歌は柯也とて、枝葉に風の吹くを歌ふと訓じてよみます文字。又夕は月の字の半にて、月の初めて出る時は、暮に西に見ゆるゆゑ、夕を半月と申します。字義ではいつかうつどかぬ文字でござりますと貶されて、然らば前の替名は鬼笑というたが、それに仕らうといふを、いえく、鬼は山川の神靈なれば、何をかわらひ給はん。いつかう熟字いたしませぬ。お前は性質御丈夫なれば、叔雄と御付け遊ばせ。兄御のあるには、叔の字を御付けなさるよが字例でござります。韻鏡があらば序にかへして上げますにと、眞言寺へ行つた様なかたつまる睦言に、客は氣をつまらして能名知らぬが、醫者殿のやうなとむづかしがりて、それぎり尋ねもせず。機嫌のそこねた客の方へ、血文誓紙は愚痴のいたり、唐紙の二切一行に、妾心正斷絶、君懷那得知と、筆意を振うて書きくだし、吉野折敷ほどな印

八文字—遊
女の道中に
足を八文字
形にあゆむ
事
王昭君—漢
元帝の命に
由り胡國に
嫁せられし
美妃
不興—勘當
しやくら商
—遊び商

を押しておくれば、客は何んの事やらよめぬながらの負惜、斯いふ事なら其咎ぢやと、機嫌なほして来るもあり。たま〜小學文のある客は、あたまからなじるつもりで、太夫殿は日本の俗物はお嫌ひなさるよに、やはり揚屋入は八文字ぢやが、あれは俗にござらぬかと打込めば、あなた方は書生さん方と見請けましたが、書法に疎いおつしやりかた、わたしが道中は八文字を踏返して、十六點に歩みますと答へぬ。この勤方ゆゑ、終に可愛いといふ男もなく、王昭君が胡國の悲しみ、面白からぬ奉公と明暮思ひ暮らしける。出入の香具商人住屋吉介といふ男、もとは京の御所近き中川沖之進といふ歌學者の一人息子、若氣のならひとて、色道より親の不興をうけて、大坂へ立退き、紅粉白粉の荷賣、好の道とて遊廓へはまりこみ、化粧部屋のしやくら商に、ふと唐土が高尙になづみ、寢ても寤めても忘れず。折々はよそながら口説いて見れど、文盲がつてとりあへねば、此儘戀に朽ちなんも本意なしと、心のたけを薄雪風のちらし文に、はづかし事はかない事、筆の命毛くどくとしたよめて、詠の詩囊袋へ入れてやりけるを、唐土ひらき見て、口の文はよむに及ばずと、戀歌の上の下の句を付けてぞ戻しける。

よし助が文に

枝たかきはなの木末も折れば折る



きんくるべ
いこの云々
未詳

玉の緒もた
ゆるー死す
る

文花もなく
ー作り飾も
なく
引舟ー下等
の女郎

もろこしが返事に きんくるべいこのきうらいく

唐音にて其心はよめず。次に二句詩を賦したり。

青苔匪衣岩猶寒

白雲似帶山不纏

叶ふやうにてかなはぬ返事。よし助は思に沈み、其詩を和して又いひやりける。

昔衣きたるいはほはかたくとも衣々山の帯は解けなん

わりなくも戀佗びて、今は玉の緒もたゆるばかりと聞えしかば、夫程までわしを思うてかと、心根がかはゆうなりて、かへしは例のもろこし太夫、

與君相向轉相親

與君雙栖共一身

と唐詩の古語になつた口、夢現ともわきかねて、手の舞ひ足の踏所を忘れ、それからこの逢瀬かしの首尾、忍びくりに契りしが、唐も倭もどこへやら、後は互の實と實、いとしくの外は文花もなく、傍輩の目口かわきに見咎められ、引舟遣手が付け廻はしての強異見。おまへばかりはと氣を許したに、是はどうしたつまらぬ悪性。全盛出世を望む太夫さんが、香具屋に間夫があると、廓中へ知れたら、お客もばたく落ちまじやう。此浮氣はやめたまへと、責めかけてのわりくどき。よし助も出入をとめられ、宵々

思はます鏡
ー思のます
をかけたたり

川竹ー遊女

武陵桃源ー
支那湖南省
にある仙境

丹竈ー仙藥
を作るかま
ど

ごとの逢坂も關守に見付けられじと忍ぶ程、なほ思はます鏡。見付けた所が深い縁、ど
うで是なら添はれぬ中、いつくの浦へも立退いて、一日なり共夫婦ぞと、廓を抜けて夜の
雁、しるべの方に假寝して、京の友達に頼りゆき、つまらぬ戀の脱落を、かくまはれる
氣かくまふ氣。一月あまりは過せしが、こよへも尋ねて來るとの噂。いまは都の辰巳な
る黄檗山の門前に、藥葺の一軒家。唐土が古郷の名によりて、長崎御菓子唐饅頭の焼き
賣りして、貧しき暮も川竹の浮節にかへての樂。佛のかはらで年の積れかすと、中の
よいあまりの願ごと。仙家の丹藥に不老不死の歡樂を究むべしと、妻が覺えし樂。拵
近き桃山の流こそ、武陵の人の迷道。桃源のしたよりぞと、丹竈をひらいて服するに、
聾ぼどもきかばこそ、夫は風の心地とて、ぶらくくと病ひつけば、月宮殿へも入る所
が、さしつまりての月がこひ、月に六日の勤のなかに、可愛い男が出来たのか、男の介
病に倦いたのか、但は丹藥が利いて仙人になりもしたか、八月十五日の夜、月の明か
なるに家出して再び歸らず。

諸道聽耳世間猿 五之卷

第一回 昔は抹香烟たからぬ夜咄

斑足太子―
身に翼生じ
脚は鹿足の
如く飛行自
在なりと云
ふ王
幽王の后―
褒姒
白雲の飛助
―漢武帝の
秋風起白雲
飛との辭に
ちなみて飛
助となせる
ならん

天竺にては斑足太子の塚の神、大唐にては幽王の后、我朝にては鳥羽院の上藤と化した
りしも、はては那須野の叢にかくれて、殺生石となりけるとや。それには事かはりた
れど、人をとる事他念なき男、二條室町に店借したる川口屋磯右衛門といふ町幫間、吳
服所の懸々へ心安く立入りて、年忘の執持、茶湯の勝手を手傳ひ、酒間の落咄に、腹
をよぢらす軽口、とり付き引きつけ迂作が上手とて、川獺と異名をつけられぬ。世上は
夏過ぎて孟蘭盆もいつしか暮れのけば、人も裕の肌にしつほりと、夜は次第に長くなり
て、御靈祭の囃子の稽古、月の夜すがら冷々と、何處やららのらぬ拍子のあるも、秋風
吹いて白雲の飛助達さへ、今宵は氣も進まねばと、川東のしゆかうもじやみて、其連中
四五人、磯右衛門が方へ仕かけて取めもなき昔咄。兵法喧嘩の仕形から、狐狸の子供す
かしを、かの川獺が口拍子に油を乗せての面白さに、毎夜々々磯右衛門が方に市をなし

小半合酒
小量の酒

有徳人—富
豪

て素咄の夜半切、折ふしには吸物一つ小半合酒、麴類のあばれ喰には、いか程奢つても端錢の樂。銘々涼の仕過を入合はすつもり。氣のはらぬ遊には、内を出るにも權柄に、店仕廻ふたら提燈持たして迎におこしやと、家内へ響く程な聲して出らるゝ後影、朱雀野の朝歸に日がたけて内入るうこそくと、常著が火燧にかよつてなうても、冷いなりに著替て、勘定場に吐息ついて居るとは、勢の違ふものぞかし。かくして毎夜寄る程に、若いも年寄も打込に、軍書の空覺えなる中老、碁將碁の強き隠居まで、先から先の咄の中に、一夜もかよさぬ新町の有徳人、平野屋七左衛門とて、年ばい六十過ぎし客親父、蠟燭の費を厭ひ、暮れきらぬうちから来て、去にがけには人の提燈と連立ちて歸るゝ。煙草入涕紙も人のをあてに、集錢出の夜食があれば、大事の用を忘れたと逃けて去ぬれど、振舞ふとさへいへば蛇の鮮でものがさず。是はよい所へ参りましたと、上座にすわり、御亭主御勝手は存せぬが替ましようかと、千枚張の頬の皮、憎まぬ者はなけれど、年に免じていひてもなく、銘々雪踏はき替へられぬ用心のみなり。ある夜雨をほふりて宵より風だち、誰もかれもいひ合はせたやうに遊人なく、やうく衣の棚の袈裟屋墨五郎といふ男、七左衛門と只二人にて、何んとなう打ちしめり、利に入つた咄

耳よりな
聞きたし

なかば、墨五郎亭主磯右衛門に向ひ、先夜の趣向は又とない珍しい事、どうぞ今一度見ることはなるまいかと云へば、いそぐ、あればかりは度々はなりません。併珍事というて、又あのやうな錢のいらぬ面白い事はござりませぬと、二人が思出しては珍しがるを、七左衛門聞きとがめ、錢のいらぬ面白い事とは耳よりな。殊にまたとない珍しいとあれば、かたぐ聞遁しにならぬ咄。どうぞ、今一度の御催の御加へ下されと、めつたに羨ましがれば、磯右衛門がいふは、ま一度見らるゝやうなら、是非あなたをと存じてをりますれど、さきが武士の浪人衆ゆゑ、申しでたとて最早見らるゝ事は出来まいと存じますといへば、墨五郎がさあさうあらうと思つて居る。ふと咄かけた事なれば、申して聞けましやうなれども、他言は御無用。是の亭主の懇意に御出合ひ申す、東國下野那須野邊の浪人、三浦介兵衛殿と申すが、先祖の祕傳とて狐を釣る事が名人でござる事、ふと磯右衛門の咄で承り、段々所望して見物いたし度きよし、磯右をもつて申遣はしたれば、見物とては中々叶はぬが、幸近日さる貴人より頼まれて、一疋釣りてやらねばならぬ。其時餘所ながら見物に参れと、仰せこされたゆゑ、其夜亭主と二人、右の浪人衆同道にて、嵯峨野の方へ参つて、釣る所を見ましたが、中々貞五郎、藤九郎が釣狐の

伯藏主一狂言「こんくわい」に出でたる獵師の叔父坊主の稱、古狐がこの坊主に化くる也堅き石となりて一堅く結ばれて

安倍晴明一花山帝の御宇に有名なりし天文博士

狂言見るやうな物ではない。正眞の伯藏主、いなうやれの畜生、足が人間とは又格別のとり廻。良にかゝるまでの面白さ、どうもはや、いはれた物ではないと、身ぶり交に咄さるゝを、七左衛門現をぬかし、それはけしからぬ珍しい事、金の一步やそこらは入れても見たい物でござる。どうぞ、亭主の働で見物さして下されと、段々と頼まるよに、礒右衛門あたまをかき、はてきつい御執心、然らばどうぞ、今一度明日参つて頼んで見ましやうが、得心あればようござりますかと、其夜は約束堅き石となつて、犬追物の杖つき鳴し歸られぬ。扱二三日過ぎて、礒右衛門は七左衛門が方に來たり、この間の一儀段々頼みましてござりますれば、浪人衆申されまするは、何とも迷惑千萬な儀、是は手前が家の一大事の祕傳。今にもあれ玉藻の前が、二度の勤にて御惱ならせられた時、安倍晴明が祈り除けはめされうが、生捕る事は思もよらず。其時は拙者天晴の知行にいたすつもりで、かくの仕合ながら時節を待つてまかりある。町人衆の慰みには、ちと心外にござれど、段々の懇望と有るゆゑ、明晩今一度釣りてお目かけ申さう。重ねてはきつとなりませぬと、きつい恩にさせられましたと、したり顔にて咄せば、七左衛門大きに悦び、それは段々の御働、左様な重いことを雇賃なしに見物いたすは、全く其

小竹筒一酒器

夜の八つに午前二時

許のお影ゆゑ、然らばせめて小竹筒提重は此方から持たせましやうと、人心がついてから、又とない大氣な事いはるれど心もとなく、金銀ではかなぬ遊山なれば、提重の御肴もちと御念入れられませい。刻限は夜の八つに御誘ひ申しましたよと、別れて宿に歸り、明くる夜の丑みつ頃、平野屋の門をほとくと叩けば、内よりはいと答へて戸を明けらる。さあ七左衛門様、只今と三人連。浪人は朱鞘の大小に山岡頭巾、釣良持つてひかゆれば、一人は袈裟屋墨五郎、是は御苦勞様と挨拶して、下男に用意の食物持たせ、跡につけば、二條通を東へ、川原の假橋を渡りて、聖護院の森を目あてに露霜を分けて、お辰稻荷の宮近き所に立ちどまり、いづれも是に居給へ。御兩人は先達御案内の通、此方より呼び申すまでござる事は御無用。祕傳を行ひますうち見えさつしやると、向後の妨となりますと堅く制して、浪人は遠く隔てゝ良をかけに行きぬ。跡に三人家來ともに、冬の夜の寒さに比叡風烈しく只は居られず。先御酒一つと野風呂の熱燗、提重取りちらして、さいつおさへつ待てど暮せど、何の音もせねば、礒右衛門退屈して、私窃に見て参りましやうと、さし足して行きしが、又是も戻らず。是は如何な事と、二人も待兼ねて、そろくろと行きかけしに、遙むかうの方にて何やら喧嘩の聲、そりや相圖ち

野風呂一野遊の時携へて行く火爐



ちんこの呪
—いつぱりの呪

吼噓—狐釣
の狂言の名

弓矢八幡—
誓に用ゐる
語

やと、走りつまづきてかけ付けければ、狐は釣らで、浪人介兵衛刀の反を打つて聲荒々しく、扱は三人の者ども身が祕事にしてつよしむ所を、磯右衛門が忍びて来りしは、ちんこの呪を見届けん結構よな。年かさの七左衛門とやら、それへ出でよ、無體に望みて今宵の催を致して、此仕合は汝が所爲と相見ゆれば、遁すまじと詰めかくるに、七左衛門大きに狼狽て、なんくの誓文、町人の儀なれば、狐釣の傳授覺えて何にいたさん。とかく磯右衛門が早りしゆると、吼噓のたらふくいうて誤つた稻荷様の三人が體、浪人中々聞入れず。いやく何事によらず、利欲にふけるが町人のつね、身が祕傳も覺えたら、銀まうけにもならんかと思ひ、某をたばかりしなり。弓矢八幡堪忍せぬと、おどり上つて、鳥居もこえんすいきほひを、ひらとも訛言して、やうく静りたれど、まだ眼ざしの恐しさに、小竹筒の酒もたべあらしたれば、墨五郎殿、どぞ貴様方の懇意な料理屋があらば、あなたを御供したい。引きあはせて下されと、日比の吝さも刀に怖れて、折入つて頼めば、兩人畏つて暫し連立ちて、祇園町の一力へ成りこみ、夜の明けぬうちからの酒盛。浪人も打寛ぎて、夜寒をはらふ鶏卵酒に、鍋焼よと社人のいなり喰。どうもかやうな形で、晝中に宿元へも歸られず。七左殿、とても御馳走に、

蘆屋道滿—
内鑑、竹田
出雲の作
葛の葉—大
内鑑の中の
姫君

月令—林園
月令、書名

狗賓—天狗

芝居を仰付けられいと聲かけられて、それは御用捨といはゞ、また怒りかねぬいぶり者と、如何様にもと、しぶく〜に臺所へいひ付けて、棧敷をとらせ、始るといな、皆々見物すれば、世には似た事もある物にて、蘆屋道滿の狂言、葛の葉の道行、畜生足にこり果てよ、京より歸る與勘平のやうに小首かたけ、悪右衛門が家來の坊主にしらるゝに氣が付いて、あたまを撫で見られぬをか。田鼠化して鶉となる、川獺で狐がつれるとは、いまだ月令に見あたらす。

第二回 祈禱はなでこむ天狗の羽帚

京の鞍馬山の僧正が谷には、繞の石悉く刀の痕あり。源の牛若が狗賓に出合ひて、劍術をならひ得し所なりといふ。また唐土の馬鞍山といへる山の石は、試劍石とて満山劍をあてし痕のこゝに等し。山の名も同じ文字にて、同じ奇石のやまと唐土にはあれど、牛若といふ唐人の若衆が有る事を聞かず。しかれば鞍馬の古跡はうその皮。怪力亂神を語らずとあれど、是も其人の紀念と思ふにぞ、猶なつかしき袖の移香、故きを慕ふ心よりこそ、戀も無常も風流もある世なれば、所詮唐土の馬鞍山も樊噲張飛などが、醉狂

花やこよひの云々一行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし味噌にも鹽にも使れて何事にも使れて

ひせし名所ともいうて置くべし。花やこよひのあるじならましとよみし忠度の墳は、兵庫の西須磨の瀧邊、駒が林の村中にあり。其片邊に高村宮内といふ老醫、少々は讀もすれど、とかくヒ子が廻らぬと、近在の療治もかれぐに、いつ見ても空色加賀の長羽織に、佩しふるしたる柄絲のあかつきかけて鹽はふめども、つとめ甲斐なき親方を、小平六といふ十八九の剃下、小力もある脾腑ざかり、味噌にも鹽にもつかはれて、また珍しい忠義者。何聞きはつとて覺えたやら、二君には仕へじと、いづくまでもの尻からけ。今日は二月の初午なれば、摩耶參と心ざし、主従二騎に錢二十、是であらうかしら波の、和田の笠松打ちかぶり、花隈の城跡より生田の森を横りて、いさご山にのほれば、まだ消え残る峯々の、雪より落ちて布引ぞと、瀧にしばらく佇立みて、感にたへても酒はなく、雲内村より摩耶の裏坂をと、木の根岩稜すぢりもちりて、漸半腹にのほるとき、何處からやらひよつこりと、旅僧一人出で來りて、其方は宮内なるか。よき所にてぞ逢ひたり。此方へ來れといふかと思へば、忽ち干鯛くさき風起りて、一山の草木を吹飛ばし、宮内を引きたて虚空にあがれば、小平六大きに驚き、あれよくと叫ぶといへども、ついてゆく羽も持ち合はさず、詮方つきてすごくと宿へ歸り、近き鄰へもあり

人顔もたそがれ時一人顔も彼誰とわからぬ時手んづもんづー手に手に

呪文一まじなひの文句

し次第を咄しけるに、天狗の所爲は是非なし。又歸らるゝ事もやと、それなりに一月あまり暮れにけるに、或夕暮の人顔もたそがれ時に、表の戸を盤石をもて投付けるかとはかり、凄じき音のしけるに、小平六あわてゝ駈出て見れば、主人の宮内髪もかたちも茫然として、右の手に獨鈷鈴を持ち、左に引きむしれる烏箒を持つて、うつとりと立つて居るを見るより、やれ旦那が歸られましたと、あたり鄰へわめきちらせば、宮内様は戻らしやつたかと、そこらあたりが寄つて來て、先づ内へ入れましやれと、手んづもんづに抱きかよへて、御無事で怪我もなしにおめでたやと悦べど、宮内つやく物もいはず。倦みつかれた體なれば、先づ寢さしましたがよからうと、蒲團打ちさせ介抱するに、それなりに打ちふりかいふり、二三日は起きざりしが、四日目の朝、やうく人心地付いて、小平六に此程の物語。かの僧に誘れて、諸國の靈地到らぬ所なくかけめぐり、九州にあるかと思へば奥州に遊び、北國を行くかと思へば四國に渡り、あるひは樂みあるひは怖しき事語るにつきず。かの僧のいへるは、汝が長直なるゆゑに、一つの法を授く。今此獨鈷と鳥の羽をもつて、教ゆる所の呪文をとなふべし。人間の吉凶外傷不幸の病を治せんに、必ず其驗あるべし。急ぎ家に歸りて、人を救ふ善根をなし、其身も

冠付一俳諧
宗匠が末句
を出して初
句をつけさ
するとこ

信心他事なかれと、教へ給ふと思へば、其跡は夢のごとくにてかつて覺えず。我今日よ
り神の教に従ひ、祈加持して衆生を救はんと、俄に家内を清めて壇をまうけ、朝夕
の鈴の音喧しく聞えければ、やれ綱が林の醫者殿が、天狗につかまれて戻つてから、
見通の八卦を占ひやるけな。なんといな病でも愈しやるけなと、近在より日々に人を
うつしける。宮内はそれくの加持人を呼出して祈禱をなし、彼鳥の羽にて頭より鼻を
撫でおろす事三遍にして、其人の氣質病根をさす事神のごとし。前な親仁は、家業は檜
物屋なるべし、偽飾なき生付なれども、是までに我知らず愛宕の杉を切りくだきし
事あるがゆゑ、此度の病杉の木如く立煩をめさるゝなり。それがしが加持にて平愈は
疑なし。次なるは船乗の女房と見ゆる、其方が夫、先年難風にあひし時、金毘羅へ願立
して、杉苗百本奉納せんというて、今に奉らざる答にての病氣なり。杉苗が大儀なら、
杉の神著でも百膳奉納せらるべし。跡に居る四十ばかりの男は、冠付前句付お清書屋よ
な。汝に神の咎あり。いま世上にめくら付の前句などを、天狗俳諧と名付けもてはや
す。是筋なき事に我名を呼ぶとて、兼て怒り給ふ。向後天狗の二字を除きて、鶯俳諧
なりと申すべし。此御詫に生酒五升持参せらるべし。是を捧けて天狗酒盛を勧め、よろ

羽團一羽團

象頭山一琴
平神社

しく罪をなだめ進ずべし。いづれも加持人は燈明代として、銀五匁づつおいてかへられ
よ。是は手前の徳分ではない。天狗頼母子と申して、直にあなたへ捧げるのでござるると、
未前過去の事ども皮肉に入りしごとく占ふに、皆々恐れみ謹みて、扱もく不思議な有
難い事でござります。一つ御尋ね申したい事は、あなたの持つてござるは、灸屋にあるや
うな烏箒、天狗様に御貰いなされましたら羽團でありさうな物。烏箒もあなた方は御持
ちなされます事でござりますかと問へば、宮内うなづき、尤の不審。是は天狗の羽箒と
て、ずんどかるい末の衆の持たせらるゝ物。羽團はたしないゆゑ、是を貰うて來ました
と語られぬ。ある時宮内いつくの夜は、各信心深き人々をえりて、我家より讚岐
の象頭山へ、暫時が内に海上を越えて参詣さすべし。しかしあまたの人は神も御苦勞な
れば、打ちよられしうち一人、神前にて御鬮をとり、神の御心にあがりし人を参詣さす
べしと聞くより、是は奇妙な事ども。どうぞ御鬮にあたりたいと、頭に血の多き若者ど
も、それを見よとて老たる人々、其夜は暮れぬうちから、宮内が方へつめかけよる。さ
て宮内はいつくよりも壇に十二の御燈をてらし、數の供物壘々とかざり立て、先づ祓
文を唱へ鈴をふり立て、既に御鬮を取りけるに、あたりし人は兵庫騎馬の町越中屋善

諸道聽耳世間猿

甘口の男
智慧の廻り
のわるき男

次郎とて、ちと甘口な男なれば、もとより殻の智恵袋ふるひく出でけるを、宮内手をとりにて縁の障子の外へ出して、また壇に返りて祈りけるに、不思議や、十二の燈明一陣の風にはたくと消えて、障子雨戸ぐわたくとすさまじく鳴響けば、皆々あつと魂きれて、暗かりに手を取りあひ、活きた心地はなかりし。扱善次郎は障子の外に、恐れながら立つて居るを、灯の消えたを相圖に誰とも知れず、善次郎を背に負うて、闇路を飛ぶが如くに走り行く、是正しく天狗殿と目を閉ぢて、心中に南無金毘羅大権現と息をも繼かず申すうちに、虚空へは飛びあがらで、西代村の蓮池のあたり、深田の所へ下しけるに、是は如何にと目を明いて見れば、天狗ではなく藥箱持の小平六なり。こりやどうちやといふ所を物もいはず、力に任せて善次郎を深田の中へ突倒し、あがる所をふんごみ、引きずり揚げてはたよき込み、目鼻の別なく握拳にてはり廻しければ、やれ人殺しなるぞ。助けよと大聲に泣きわめけど、人家は遠し殊に深夜なれば、誰かけ付ける人もなし。小平六聲をひそめて、今宵魔神、こなたを象頭山へ暫時の間に參詣せさせ給ふ。其間は天狗道の熱鐵の苦を受くる事、中々なみ大抵の苦ならず、それゆゑ魔神來り給ふまで、荒こなしをしておますのぞと云へば、善次郎かた息になり、是が荒

かくやく
赫灼

光棍一騙兒

ごなしなら、其時はさぞ苦しい事であらう。最早息が切れるやうなれば、どうぞ此金毘羅參は止めに仕たい。斷をいうて下れと泣き詫ふるを、いやく、それでは講中へ主人の約束が違うて一分立たず。それともに苦しくば、是より歸つて、人々には金毘羅山を拜み來りしと、よい加減に間に合はずなら、御詫申してくれん。それも後日に親兄弟に限、其方の口より、箇様々々と語りなば、其詞の終らぬ内、魔神來りて引裂き給ふべし。如何にや如何にやと云ひつと、頭をはりまはせば、何々の誓文、人にいふ事にはあらずと、段々の口がために、よろめきながら立ちあがれば、又背中を負ひて走り歸る。内には又燈明かくやくとして、祈の聲の澄渡る座敷先を、手ごろの石をとつて、軒口へ打付ける響に、すはやと參詣立騒ぐ所に、縁の障子を明けて、善次郎髪も著物も泥まぶれにて、よろくと立歸り、只今讚岐から戻りました。扱もく有がた痛い事でござりました。どなたも參詣なされたくば、やはり舟をかり切つて、御參なされませと云ふを、小平六が臺所より握拳を見せる顔が、天狗よりも怖しく、人にはもとより寢言にもいはじとぞ心に誓ひける。誰が見て居たやら、此様子を翌日より一まいに取沙汰あれば、憎い光棍めと、近在の荒者どもいひ合せて暴れ込み、壇も注連も烏箒も引きむしつて捨

諸道聽耳世間猿

まや薬一こ
まかし薬

大年の夜一
大晦日

て、宮内主従を棒づくめに追立てければ、所の住居もならぬしだら。はふくの體にて大坂へ立退き、齒藥の居あひ抜。あの奴めが討手まると、主従息勢はつての思入、摩耶の天狗でしくちつたゆる、今まや薬と出かけるも、より所なきにしもあらず。

第三回 浮氣は一花嵯峨野の片折戸

桑名屋の徳藏といふ船頭、大年の夜に舟を走らせしに、いづくの沖にてかありけん、凄じき雲出でて、浪風あらく吹きしかば、船中大きに便を失ひしを、徳藏船櫓にあがり、心を用ひて下知しけるに、空中より怪しき聲して、いかにや徳藏、今宵はいつの夜なるぞと尋ねれば、徳藏少しも恐れず、年の夜にて候ふと答ふ。妖神また汝世に恐るゝ物ありやなしやと問ふ。徳藏重ねて、世には身過ばかり恐しき物はなく候ふと申せしかば、再び聲なくして風波静り、船も思ふ方へ走りけるとなん。行餘力ある時は文を學ぶとやら、米櫃の底さへ見ゆる山の井のとも詠みてをかしからず。とかく身過が大切と稼いで見れば、諸商賣ともに先達の巧者ありて、あまい滴の垂らぬ世の中。親の代から仕にせの家業、あはづの森のせいらいでも、知らぬ事は集禮倒。かへぬが理詰といふ事は、

集禮倒一定

まりて拂ふ
べき代金の
倒の義

筏士よ云々
一筏士よ待
てこと問ん
水上はいか
ばかり吹く
山の嵐ぞ

よう知つてゐながら、たゞ取るやうな口車、乗るかふぞるか、借錢の淵およぎつかれぬ人多し。見一無體ざつきやくでは、儲けられぬ錢銀とは、後にぞ思合すなり。昔より世を捨つる身の置所として、都に近き嵯峨野の末、嵐山は名ばかりにて、曉の夢も破らず。名社の瀧の音もせで、丸裸にて喰はずに居よなら、此上もなき隠里なれど、此處にも季日の滅鬼殺鬼があればこそ、はや瀬の鱒を追ひあるき、腰だけ濡れても口一つ、ふさぎ兼ねたる膝がしらで、掘りやしつらん硯石の、窪い所へ水も溜らぬ商店、どこへ廻つても、たゞ居てはつまらぬに究りぬ。筏士よ待てこととはんと詠みし大堰川、渡月橋のわたりは嵯峨第一の風景。こんな所に能い女房持つて暮したらと、思ふは誰しも姉が小路の銀屎息子、大黒屋富太郎。島原の菜種の匂伽羅の油が鼻の先へしみ付いて、親の異見手代の忠言、云ふほど募る居びたれ遊。弟もあるなれば、いつそまくり出して仕舞ふに、一家衆の談合極まりて、母御の歎御機嫌のなほるまでは、是にて何なりともして辛抱せよと、百兩餘の枕金袖の下から遣らるれば、勘當の富太郎此金に力を得、いつそ思案が固りて、是で太夫が苦界を引かせ、手煎仕たら兼々の望の通と、その足で島原へ駈出して、桔梗屋の花野太夫、半季に足らぬ末年を借金こみ五十兩、頼母し

諸道猿聽耳世間

平家座頭
琵琶法師

世尊寺様
藤原行成の
書風
ちびり暮
豊ならぬ生
活

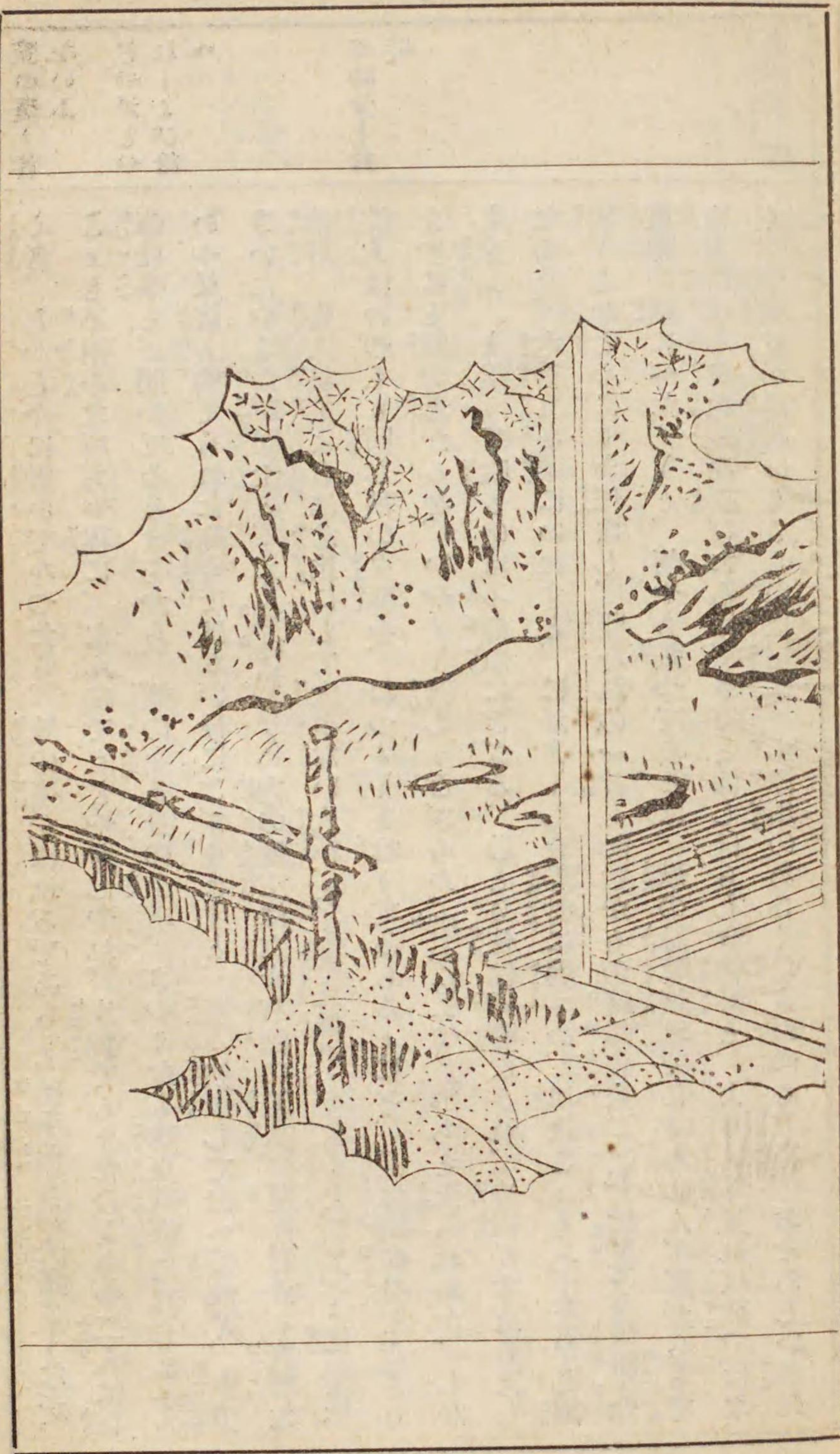
づくでもらひしが、女房は出来ても家がなく、脇ひら見ずに嵯峨の奥、妓王寺の邊を借りて、面白づくしの宿這入。残る金ではそなたもわしも紙子仕立、藤色羽二重に媚茶縹子の火打、下には何を白統の反古染。心一ぱい物好して、富太郎は名を瀧口と改め、花野が名もお笛とかへて、平家座頭に謠はれたさの風流。こよまでは仕ならべしが、残る金は甘兩あまり、是喰うて仕舞ふはちつとの間と、世渡の心つき、何にても卑しからぬ手ずさみをと、いろくくと工夫して、富太郎は嵯峨野の茶杓を削り、お笛には花の露をとる事を教へて、浮氣がさする夫婦の身過。入口の柴折戸に千家御茶杓四季花の露と、世尊寺様の看板も京からまでは買ひにこさず。花の露の香も褪めて、茶杓はいつしか朝餉の焚つけに打ちくべて、始末といふ事せねばならぬといふ事、氣がついても、ちびり暮の明暮は、名にし嵯峨野の秋の暮、壁に鳴く、蚕、窓に音づる、棹鹿、廣澤の月も酒がなうてもをかしからず。桂の鑄鮎も十を百文にはよわりて、今ぞ不自由が身にしみじみと鉦の聲は鄰の庵の御坊、まだ近付にもならねば、憂を忘るよすがにもと、烟管提けて御宿にござりますか。私は近頃となりの庵を借りて参りました京の者でござります。淋しう暮しますゆゑ、ちと御咄に参りましたと、云ひつゝ這入れば、庵主は夕暮の看

唐犬額
客唐犬權兵衛の始めし
角額

性根玉
根

しらになつて
昔をわすれて善にかへりて

經。是はく、ようござりました。まそつとちや、仕舞ひますと云ふ。人相六尺ばかりの大入道。唐犬額の跡もするどく、殊勝けのなき物ごし。扱は名ある武士の果、暗君を諫兼ねての桑門と一入たのもしく、兎やかうするうちに烟草盆提けて立出で、ようこそござりました。まあ是へと竹縁につくも筵。四方山の咄がしみても、どこか一つ侍めかぬ詞づかひの卑さ。一圓よめねば、なんと御坊様には、幼少よりの御出家とも見えませぬが、定めて以前は、一廉の御知行でも御取りなされましたと云ふやうな御方と、見受けましたと問ひかくれば、いやく愚僧は武士でござらぬ。都合で向後念比にいたすから隠し申さぬ。おらはもと東海道を働いた無間の鐘介というて、盗人の張本でござつた。手下も五十人計有つて、おそらくは大名でも、剥兼ねぬけちぶとい性根玉ゆるゑ、指さす者もなかつたに、三年跡の師走の廿四日の夜、江戸の店の勘定しまひて、上る手代と見え、百兩餘の小判を首にかけて供一人、夜道かけて急ぎの道中、府中と鞠子の山中で出つくはし、供めは大袈裟にぶち放し、直に親方めもしまひ付けうと切りかける刀を、何の苦もなう引つたくり、おらを眞二つと切付けるを、逃けるひやうしに谷へ轉落、命は助かつたかはりに、此の如く左の腕が叶はぬゆる働やめ、しらになつての道



笠の臺―首
をいふ
どやがしや
れ―よび給
へ

御時分―食
時

南圓堂―藤

心者。しかし今に働いてをつたら、笠の臺がばれるであらう。御手前も御夫婦さうなが、
こよも不用心な所ぢや程に、なん時でもどやがしやれ。片腕でもまだひとりや二人は朝
飯仕事と、聞いてゐるうちから、癩の上る身の上咄。さやうなら殊更殊勝に存じます。
いや又盗も捨てられた商賣ではないけにござりますと、恐々挨拶して内へ戻れど、肌刀
さいたやうな鄰同士と、うす氣味わるく、向の庵主は六十有餘の浪人、見かけから實體な
恰好。盗人坊主よりは念比にして大事な人柄、ちと御見舞申しますといひつゝ通れば、
浪人はいづくも同じ秋の夕飯を、ねつくと喰うてゐるよにぞ、是は御時分でござり
ますにと氣の毒がるを、いやしく苦しうござらぬ。御かけなされ。ちと上られぬか。しか
し京中と違つて喰ものは不自由にござる。ひとり住は御覽なされ。冷飯がすすりまし
たゆゑ、木香丸を菜にいたすと、にがくしき顔付に興さめ、扱はこよもつまりし困
窮。しかし心にくき住なし、腰をれの一首も詠むからの嵯峨住居。これは咄せる風雅人、
座敷の壁にべたくと、何やら張つてあるは、歌の詠草懷紙でこそあらん。所がらとて
定家卿の小倉色紙を學びたるは、さりとはしほらしき物好と、よくく見れば歌ではな
く、南圓堂の足代のくさらぬ仕用帳、木津川のおさくならぬつもり書、おそろしい事の

原冬嗣の奈
良興福寺に
建てし佛堂

山水な醫者
―さびたる
醫者

我落ちにき

有狀。是はいかにと驚くうち、浪人楊枝つかひながら、扱貴様にちと談じ申す事があ
る。承れば姉が小路の大黒屋福右衛門、惣領の富太郎殿とやら、傾城狂の不埒ゆゑ、此
所の住居めさるよよし、最早本家は舎弟の名前にて、親父は隱居の身分、詭言してから
傾城つれていなねぬ首尾。代の替つたは、幸千兩ばかり合力申してつかはされい。其使
は拙者辯舌で天晴仕おふせて進ぜう。なんと思案めされぬかと、初對面からわ性根の
腰おし。成程御深切のお詞、とくと思案仕りて又御世話にもと、うちくとした返答を、
はて氣の弱いお人。本家の身上で千兩はわづか。拙者にさへお任せなされると、後々に
は身上半分は取つておます事ぢやと、鑷ひねくつてひらじひの尖さ。是はひよんな所へ
來た。どうぞ去にたい物ぢやがと、見合せて居る所へ、先生御在宿かと、ずつと這入
るは、黒紬の小豆色繪師とも見ゆる山水な醫者。扱此間の一休の自畫賛は鹽梅ようはま
つたが、芭蕉の手紙が文がうま過ぎるといきかねる。もそつと御氣を付けられい。是は
其割符と金一兩渡して跡のもくろみ、様子を聞く程座にたまられず。つひとはづして逃
歸り、こり果てた嵯峨の奥、妓王妓女より擬筆士やら追剝やら、しばしの住居もおそろ
しく、わが落ちにきと人にかたるなと、家主に口どめして、ひそかに京へ立歸り、親々

一名にめで
て折れる許
ぞ女郎花我
落ちにきと
人に語るな
に擬せり

の詫言がすみ、お笛もろとも故郷へは錦の小路の掛屋敷を貰ひ、綿服に仕替へての商
形氣。槌で打出すやうな金まうけして、大黒屋富太郎が長暖簾。五日の風のそよ
と、十日の雨にしつほりと、夫婦中よく富み昌え、豊に住めるぞ目でたけれ。

諸道聽耳世間猿終

世間妾形氣序

八文字が草紙、其積自笑の戲作多かる中に、近世俗間の模様有りとする
まよの序に、鶴翁が絲に引きそめし傳授車の綱手にすがりて商賈のそ
ろばん形機書出れば、親爹の吝嗇質氣は、其中に求めたりと見ゆ。石臼藝
に親の財を空し、悪所がよひに家藏を失ふむす子の、我まよ形氣やむ時
ぞなき。その諫めかねし忠心の手代形氣母おやかた氣の愛憐も、よむに
さこそと感あり。又小むすめの婿婚待たで、こがれまるらせの偷ならひ、
若紫の歌舞妓子に思はくよするまで、儲もかしこしや狸老が筆談眞似
てまねえんか、誠にまねられず。荒れにし我軒は、いつしか浮浪子の中宿
となりて、長き代のかたみにはあらで、荒唐世説をいはずれば、夜食の腹

ふくるよよと、宵よりつどひて七つの鐘聞く夜は数多たび、それが中に
 えるとはなくて、當世でかけものよ厚薄の情をかしきあり、はかなき有
 り、編みて冊とし、故によりて妾容氣と號くされば二老が文理は、五卷に
 猶名残ぞをしまる。この弊言數ふれば、はたちに餘り、撰めば一つとして
 採るものなし。偶なぐさむ一ふしは、さてもさても八文字が糟粕。これを
 除き是を棄てて、そぞろにもものして、十種に充しめ、四卷に己みぬ。自笑を
 しれる人は、嘲みなん。自笑を知らざる人は、見ずも棄つべし。時に明和丙
 戌の冬。

和氏譯 太郎 述ぶ

世間妾形氣 卷之一

第一 人心汲みてしらたぬ朧夜の酒宴

戀せじと云
 云—古今集
 第十一卷に
 あり
 かり人のわ
 たらば云々
 —伊勢物語
 にあり
 殘口—増穂
 殘口、艶道
 通鑑の著者
 手づつ—手

戀せじと御たらし川にせし御祓、神はうけずも成りにけるかな。むかし伊勢加茂兩社の
 齋宮をたてられし例、彼六條の御息所が、伊勢まで誰が思ひおこさんと、もてはなれた
 るすね詞も、かち人のわたれば濡れる業平への自墮落より、今も在原の氏なる人は、お
 影參もならぬよし。戀に和ぐ國の風俗も、たはれ過しの浮世之介は、無筆むくつけの角
 内にも劣りやせんと、殘口が艶道通鑑のおもむきに洩れたるは、必ず繰言成るべし。天
 子に十二人諸侯に七人と、聖人の任米、いづれ家督相應に、三千の後宮でも有つて、つ
 まる勘定なら、それが果報といふ物よ。たとへ町人百姓でも姪欲の外に、一人でことは
 足らぬがち。先づ女房は大黒ばしら、其家のたて物とするは、夫は外へ稼に出れば、女
 房は内をまもる。それにこそさま／＼あるなれ。容色がよければ手づつなり。世帯かし

先の拙きこ

こきは口さがなく、縫針好は尻おもたし。病身ならねば法會だち、こよらをもつて見るときは、外聞、手利、人挨拶、世帯、敷金、閨の花、それ／＼の女房を凡そ十人ばかりまでは、誰しも持ちたい物ならずや。春秋に次妃と策し、武家にはお國様とうやまふ。京洛中の妾種、蒔いた一粒が萬倍の五人扶持に、數百兩の捨金のあたよかな暮仕ても、娘さへ産みやあての槌。世はならはせの鄰づからも、うらやみこそすれ恥ならず。腹かさぬ子の義理へちまなく、似我蜂のそだてがらに、延びる脊丈の肩越した借金も、濟ますてだての外にはなければ、本の親がうらみもせず。されば萬卷の佛經を地中にしき、四神擁護の王城に生ると人の心意氣、加茂川の水のすみ濁る芥屑藻屑に、染みやすきわざくれも、汚う稼いで清う暮せとなり。こよに都しら河に櫻戸の中將殿とかや申して、やんごとなき方のおはしける。御筋目もめでたく時めき給ふが、和歌、管絃、有職に長じ、唐土の文の道も博達におはすあまり、情のみちもかしこく、あまたなれ昵れさせらるる中に、花園といへる新命、年は廿に一つ二つ黠からぬ才發ものの、白く油つきたるにとんと打込んで、大内の勤ことしけき外に、間がな透がなぬれ衣の足かさなれば、お妾と定りて、しんぞ可愛からせ給ひけり。今參の雜掌眞葛半平とて、唐も倭もないませ

わざくれ
悪戯者

ぬれ衣戀
衣

定家―藤原
定家
後京極殿―
藤原良經
花實一體―
形式内容の
整然たるこ
と
于鱗元美―
明の詩人、
李于鱗王元
美
石川のこま
うど―催馬
樂の呂の曲

の辯舌もの、中將殿のお伽にちかう参りて、今日殿の御所で遊ばした、曉に寄戀の御詠は、及ばすながら感じ入りました。定家の骨法に後京極殿の幽艶、花實一體の風體、中どなた様も御批判はござりますまい。先日一位様へ進せられました禪院の梅の七律も、于鱗元美を一變せられました御發明の句調。まことに殿様は和漢に秀でさせ給ふと申す物でござりますと、さしつけたる追従に、あま口ならぬ中將殿も、聖天の油責成る辯舌に蕩されて、出づるに半平居るに花園と、寵愛出頭、只この二人にとゞまりぬ。比しも春の彌生中の八日餘、前栽の花散りがてに咲亂れて、やり水に風の小皺もなく、寺々の夕ぐれ告ぐる鐘の音に、山の月もやとおそくして、雪かとぞ白くさし出る影の、松に櫻にうつろひて、春の夜のながめ一しほ心うきたちて、花園が膝を枕にして、半平に酌とらせつと、今昔の物語とりませて、石川のこまうどに帶をとられてと、うたひ興じさせ給へば、半平も御前酒が額面にわき上りて、申し殿様、催馬樂より朗詠より、私が隱藝を差上げましたよと、扇しやにかまへて、宮古路がいたづら節、傳兵衛さんのう我夫と呼べどさげべど、河風に聲をとられて聞えぬかいのう。我夫戀しと、首打ちふりての思入。殊更の御機嫌にとり上ぐる小蓋、かたぶく月の夜半になれども、中々臥戸に入

どうぶくら
— 胸脹にて
最中の義

朧月夜—照
りもせず曇
りもはてぬ
春の夜の朧
月夜にしく
物ぞなき
秀句—駄洒
落
めつさう—
方外の義

らせ給ふ氣色もなく、いかう更けたやら、風もひややかに覺ゆる。なんぞあたゝかに煮た物で、盃酒一つ乾して寢ようとお物好に、畏つたと半平が御臺所へ立ちてゆけど、最早勝手はごろくと、あそこや爰に轉寢の、料理人水仕男が躰に寢言こきまぜて、今こそ夢のどうぶくらなれば、引起してもうつよなし。宵の御膳の残もやと、厨こそこそ尋ぬる内の待遠さ。まことに此半平は何して居るぞ。花園見てこよと、欠まじりに仰せらるれば、ほんによほどの間、御前のお待ちかねはお道理。自呼んで参じましょと、つい立ちて勝手の方へあゆみ出で、半平殿何してぞ。殿様のお待ちかね。朧月夜に煮る物もないかやと、秀句まじりの酒機嫌に、色香まさりて憎からぬけはひに、半平心ときめきて、幸あたりの人も性根なければ、胸だくみして、是は花園様、追付きそれへ参りますに御覽じませ。此通に皆ねぶりこけてたはひなしゆゑ、私が手づからの庖丁をと、只今獻立の隙入。それに付きていつぞはと、思うて居たによい首尾と、急遽にひたと抱付けば、これあの人酒が過ぎてかめつさうなと、こゑ立つる口をおさへて耳にさしよせ、

今宵しもたなさがしとや夕月のおほろけならぬ契とぞおもふ

ぬれ衣—戀
衣におなじ
おてき—お
ぬし

本錢のしが
く—本錢の
仕覺にて用
意の義

この屋敷へくるから、ほれてく、此不埒、一夜までの情をと、おしつけわざのぬれ衣、それが宿世のあくえんにて、此所やかしの小くらがり、おてきならでとしめられて、あのくちがしこい男めと、虚言のまことにたられされて、身につく程の可愛さも、つまりぬ末のどれ合中。もし知れたらばあぶな物。爰をすつかりぬけて出でて、いづくの里の住居でも、女夫と云うて暮す樂しみはどうあらうと、せき切つた男の詞、花園が思案にも、いかさまかう成るからなれば、いづくまでもと思へども、内裏上臈もどうやらと云ふふしにて、在所古町の住居でも、所在なうては過されず。それはといへば、何事も本錢のしがなくなうては、手すさみありとて又つまらず。其工面さへ出来たなら、鬼住む里へもゆく心。爰を思案して下されと、急な所へぬけめなきは、妾形氣の京女。半平これに吐息をつき、いかさま、是はもつともな氣のつけ所。其工面こそ第一なれ。きつと發明いたすなりと、其夜はそれで別れしが、又あけの夜の囁に、よき才覺を設けたり。明日の晝比には、御用達の掛屋より金子五十兩持つてくる筈、すなはち某が名をいうて来るべし。そなた其處をぬからずに、取次顔にちよろまかして置かるべし。それで二人が命綱、菜摘み水汲み暮すなら、こよを退いてのたづきもあり。まづは今宵の才覺は、

梅の御符—
京都梅宮の
神符
盗根性の小
夜烏—盗根
性を出して
去り行くの
義ならん
式臺—玄關
にある板敷

お部屋—諸
侯の妾

おれやそなたの身の廻、油、元結、紅紛、小櫛、梅の御符よ、香包と浚込みたる小風呂敷。持るよだけはと儒書、和歌集、切紙傳授、職原式、我の主の差別なく、三つ四つ二つとありあつめ、盗根性の小夜がらす、打ちかたけてぞ出でにける。あくる日の晝時に、こくめいらしき手代風の男、一腰に袴、いためつけて、頼上げますと案内乞うて、式臺にかいつくばへば、花園は今朝よりも今やとの待ごころに、はやくも聞付けて、玄關の障子ほそめにあけて、誰いづれよりも尋ねれば、かの男兩手をつき、私は三條室町の御用達、白銀屋金七手代共でござります。昨日御賄方御用とて、眞葛半平様をもつて仰付られました金子五十兩持参りました。半平様に御目にかより、お渡し申したう存じますると申せば、成程、其事は半平の沙汰して居られた。今日は殿の御名代に、上加茂北野へ参詣せられたれば、かへる程はしれまい。自事は殿のお部屋花園といふ者、御用の物みづからが取次で進ぜうとあれば、是はく恐れ多い。お部屋様とも存じませず、慮外のお目見。然らばあなたへ差上げますと、封印かたき金五十兩、式臺にさし置いて立歸りぬ。程なく半平も立ちかへりて、扱右のはとさよやけば、首尾よしと知らせの目づかひに心おち付きて、其日の暮るを待ちこがれ、裏門よりもしのび出で、手に手を取り

外しら露の
云々—しら
露に知らぬ
をかけ栗田
口にありな
かけたり
蹴上げ水に
ぬれた同士
—戀せる同
士の意
ひじきもの
—鹿尾菜の
海藻に敷物
をかけた
はつむいた
が—機に乗
したがの義
俚言集覽に
見ゆ
五器—或は
臭器に作る

て西ひがし、どこがおちつき所ぞと、外しら露の御所育。たのみも夢の栗田口、蹴上の水にぬれた同士。これが晝日の岡ならば、人ががめて御廟野ぞと、小夜の狐火つまよるよを、しらぬ女の淺はかさ。戀のうはもり山科に、兼てしるべにかり置きたる菓茸のひとつ家。軒端も店もすかんびん。風は來次第の古柱。ひじきものさへあら筵三枚。きのふの玉の臺には、ちと替損な住居なり。花園心をおとしつけて、先は二人がねがひのまよに、此所へは來た事ぞ。其五十兩の本錢にて、なににする氣ぞと、女心の先のさきになるとひ狀に、半平爰では腰をする、是まではつむいたが、何をかくさう此しだらと、ぐわらりほどけば石瓦、これはどうぞとあきれ果て、吐胸に魂も消ぬるばかり。半平が云ふやうは、さすが女のうはがしこく、金と申うてちから草、ひかれ爰まではしり來て、當惑はもつともなり。しかし能う思うても見よかし。あの尻ぬけの中將殿に、大枚の五十兩を引きあてなしに用達てよい物か。よしそれならば罪に罪、戀には許すかたもあり。貧の盜も盜なれば、金と出かけては尻むづかし。おれはそなたに首だけ游いで居るなれば、あつばれ五器も提ける氣なれど、そなたには尻くより、逆代なしにはいやといふ。色と銀との手詰にてあるまじき光棍ごとも、そなたをおびき出すまでの手くだ。

食器なり

大津繪―浮世繪

はんなりと―花やかなる

少々本錢があればとて、竹釘一本箸かたし、削る手職はもとよりも、肩に初の小商さへすべ知らねば、身過のたづきは宛もなし。二人暮さうばかりなり。しかれども爰は東海道道のさしぐちにて、往來しけき逢坂の關路なれば、本錢入らずの茶店を出し、そなたもお園と名を替させ、われらが少しの繪心に、所がらの大津繪畫いてと、世渡の手段かねてあり。心おとすな、世の中に無祿の人はないとやら、それもさうよと絶念めて、女夫茶店の竹床几、はんなりとした信樂茶。よごす繪筆や腰をれ歌も、憂もわするよ口だんばく。春過ぎて夏は來にけり瘦世帯。空の暑さは凌ぎよけれど、山科の藪蚊を防ぎ兼ねて、賣り残したる史記一部を、手細工の紙蚊帳に、繼目はなれぬ女夫中と、羨むうはさも一むかし。

第二 やあらめでたや元日の拾子が福力

百年に云々―伊勢物語に見ゆ目こぼし―

百とせに一年たらぬつくも髪、われを戀ふらしおもかけにみゆ。堪へられぬ物、災の端のかゆきと、老女房のしたよるきとは、清少納言の目こぼし。むかしむかし若狭の國に八百比丘尼とて、千年ちかきまで春秋を見過せし人の物がたり。彼國に跡をとめてあ

見落喰うた人魚の靈云々―人魚を食へば長生きすといひ傳ふ

過ぎゆく―逝く

煎豆に花咲くこと―饒倅もあると

がめ祭れる例あれども、これらは喰うた人魚の靈につかはるよ。借屋かして本家とられたるの道理。實に神仙の人といふ者にはあらじ。其國の鄰なる丹後の宮津の町に、浦島が血脉にて、凡そ此津に百の代を重ねて、住みこしめでたき家なれば、人の用もおろそかならぬあまり、代々長命にて、田畑の物生も一とせの賄にあてて、樂々とした暮、なに不足なき身なれども、浮世の月滿れば虧くる習にて、壽齋丁年七十歳までに、男子女子七人まで設けしかど、皆々襁褓より二十までの内にて、一人も取りとめず死にはて、女房もかさなる患に六十をこしての病附、おなじく過ぎゆかれけるにぞ、壽齋の力おとし。かよるめでたき血脉の絶えなんを嘆きかなしめども、妾目かけに子種とるべき年にもあらねば、養子の望にはかに方々聞合すに、あの家はとんと子が育たぬといひはやして、誰とりあへる人もなし。今はすべき様とてなく途方に暮れ、ゆく年のあしも、今四五日にせまりて、松立て注連餠る春の設の若々しきさへ、身につもる年月を何に急ぐらんと可笑しからず。殊に今年は大三十日に、節分とりませたる年じまひ。軒並よりはやく片付けて、暮れやくれずにはひはやす煎豆に、花咲くこともあるぞと、思ひなほして壽く門には、やあら、めでたいな。浦島太郎は八千歳と、此家にはさし合

の意

文珠様—京
都東寺大西
寺にある文
珠菩薩

な文句の悪口ならぬを、壽齋が耳にとまり、厄はらひのあだ口にまでいはふ家の規模
七世の孫の代まで、むかしにかはらぬ佛と、今にいたりてのかたり草。其龍宮は何た
る所で、年のよらぬ國ぞ。龍宮城の娘はこちの先祖の嫁なれば、一家というても遁れぬ
中。ことに此里の切戸の磯に立てる龍燈の松は、年ごとに大三十日の夜には、龍神燈明
をあけ給ふ事、目前に見る所なれば、いまだに便のなる所。いざ今宵あの松の下に立ち
こえて、龍神に近より、我おもはく家のためなる操をかたり、子孫長久をはからばや
と、思ひ立つより家内へは、文珠様へ年籠、知恩寺殿で年をとると、何氣なき顔に我
家を出で磯つたひ、犬堂、鶏塚を打過ぎ、片枝の松の下道闇く、星のひかりにすかし
見て、雲に聳し一木こそ、年月見なれし松ならめと、この下かけの下臥、風ふきわたす
天の橋立物すごく、浪のたちる音さへ、龍宮の神使や出でくると、待ちくらす夜の心
清みて、松が根枕寝るとなき夢心に、更けゆく風の浪を起し、此世目なれぬ人の、古き
金燈籠に燈火をてらし、跡よりあでやかなる乙女の、浪の上を静に歩み來て、松の下に
立ちより、人あるを見て、隨神大きに憤り、龍女こよに來り給ふ。何者なればと、お
そろしき眼を見出して睨付けければ、壽齋あわて地に臥して、罪をゆるし給へと泣きわぶ

いりわけ—
理由

家の接木—
子孫
さざれ石の
苔むすまで
—千秋萬歳
をいふ

る。燈の光にそれと見て、龍女の御聲やはらかに、いかなれば年高き人の、此寒き夜
にかよる荒磯の浪枕ぞと、御尋に心生出でて、しかふの物語、家のためにこそ此願。
老が身の嘆をあはれと思召し給はれと、涙にしみぐとのくり言。龍女もむかしなつ
かしく、さては浦島殿の血すぢの人か。太郎殿を此土へ送りしもあかぬ別。其いりわけ
といへば、遠き釋迦の御國、もろこし、日本、我龍の國とて、浮世の義理にかはりなし。
さればこそ年の夜毎に、爰に詣來るも、この松を其佛のしるしと頼みて、永き未來の明
を照すせめてもの手向草、むかし戀しき今宵しも、そなたに逢ひし嬉しさよ。家のため
なる望にまかせて、家の接木を得さすべし。此一品はみづからが情を磨く玉手箱、あ
やまりて開き給ふゆる、はやくも此土を去りたまふ。其後はしばらくも放さでありし形
見、今得さする子の齡をひめて、家に久しき壽をさざれ石の苔むすまでと、心をこめ
て與ふるぞ。爰は伊勢路の浦ならねば、ふたみに開くる事なかれと、箱を渡して別
を告げ、燈籠を松にかけさせ、浪の都に歸り給ふと見て夢さめぬ。壽齋不思議のあまり
にあたりを見れば、さきの玉手箱はその岩根にありて、授けるとありし子種は見えず。
かよる正夢の瑞こそあらめと、彼箱を家土産の袖のしきと戴きくつて、立歸る空は早

ものまうの
聲—他人の
家に行きて
案内を乞ふ
聲

腎虛火動—
腎臟病

や明けゆく春の光。横雲に色そひてのどやかなる。町はまだほのくのかはたれ時に、ものまうの聲ならで、ほぎやあくくと子の泣く聲。まさしく我軒端と走寄つて見れば、まだ産のまよなる子をば、おさだまりの蜜柑籠。壽齋大に悦びて抱きあげ、龍神の御めぐみ、家に久しき賜と戸を推して入るよりも、いつもならぬ元朝の壽に家内の賑女子なれば其まよお春とよびて、うどんけの花さき草の、三葉四葉の比より、おとなしく生立ち、春をむかへ秋を送りて、十八の初花までに育てし壽齋は、今年八十八の升かけをきりて、先祖の浦島が数とりの賀振舞に、引續いて聳とりの定。久美の町に古き入江屋甚太夫が二男甚藏といふをもらひ、かさねなる悦。家屋敷田畑まで残なくゆづり渡し、今は世の中に心残とともなく、其秋こちすぐれぬとて、二三日よろづにおもけなるが、老病の名もつかで、たふとき往生をなしにける。甚藏養父の醫業を受けつぎて、忌中の月代を其まよに四方髪の厚びたひ。長羽織にはみ出し鐔の、醫者柄はよけれど、我身しらすの不養生、婚禮してから十年餘、小いさかひ一つせず、殊に同年女夫の火吹く力さへなく成りて、腎虛火動といふものに病臥し、三十五才の年はやくも世を去りければ、女房お春が悲しみ。ともに本のかこち言さへ、月日につれて疎きならひ、

眞切りて—
舟語にて風
を斜にうけ
て舟を進む
る義よりよ
く事を處す
るをいふ
當住—當住
職

白はへ—六
月末の南風
萬年草云々
—卜占の法

今度の聳は由良の舟乗傳三郎とて、荒けづりなる骨組が思はしと、若死にこりた物好の戀男。入聳といふ日和をよく勘へて、女房に眞切りてあしらふ楯取の名人には、海ならば海山ならば山と、人のうらやむ女夫中のむつまじさ。成相寺の本堂久しき大破にて、當住ことは再興の大願を發し、鉢を飛せて身をこらし給へども、片田舎の勸化柱一本の施主さへまれ成るによりて、出開帳の思立。目當は京大阪とこころざして、所々の舟開帳大きにはづみ、すつしりとした納。回向袋米都合して百三十俵ばかり、下の關へ水揚げ、傳三郎身を投打ての世話人。本尊什物は先へ出船させ、我は下の關に残りて奉加米賣拂ひて跡よりと、宮津の女房へこまなくとのことづてして十日計の逗留。幸に由良までの便船ありて、五月初めつかた、中國の地を放れしに、白はへ日和して乗出せしそのにはかに陰けて、出雲沖にて高波山をかくし帆柱を折られて、東南の風に吹立てられ、生死の海そこはかとなく流れゆきぬ。難船の便月をこえて、由良宮津へも聞えて、お春が驚き、もしや生きて戻らるゝ事もやと、神佛に祈り加持。萬年草をしたしものにする程漬けてみれば、命は今にあるとの報告も、たしかな便にあらねば心ゆりせず。案じ暮して其年もくれ、明くる年もまた暮れて、あしかけ三年といふ物、そよとのおとづれも

なければ、今は海に沈みしにきはめて、又入聲のせんさく。あちこちと聞く内に、出入の按摩とり六右衛門といふ者、もとは此宮津の足輕奉公人にてありしが、久しき眼病よりお暇をもらひて、すべて手職もそこひ目の薄き眼力につとまらず、按摩をとりならひて、杖を頼の元手入らず。お春が瘡をさすり覚えて、手入足入毎夜の咄伽。足手の達者な男は、外稼より難義もおこると、目の不自由な六右衛門に、注文きはまりて表向の祝言、かほうな仕合せと宮津中の取沙汰。前の夫、傳三郎があたり三年に、初めての佛事、七日々々も百箇日もひとつにして、三回忌の弔。船譽入水信士なまいだくと、同行寄つて百萬遍の最中へ、不思議の命たすかりて、夫傳三郎三年ぶりにて立歸り、内へ入るよりそれと知りて、扱は死んだと思つての法事か。女房どもさぞ泣いたである。同行衆いかい御苦勞千萬、出雲沖から大きな陰に出合ひて、帆柱楫も折れ、船中みな覺悟きはめて風次第の命、三十日餘西北の方へ吹付られ、其間糧米は喰ひつくし、積合はせた油粕をかぢりて、漸と命をつなぎ、山を見付けて漕ぎよせましたれば、そこは福州といふ國で、唐人どもが見つけ、所の王様へつれて出で、通辭をもつて委細を聞届け、百日の餘とめられて、そこから北京といふ都へ送られ、爰に又百五十日餘の逗留。そこか

なまいだー
南無阿彌陀
佛

福州一支那
福建省にあ
り

ら朝鮮へおくられ、こよにて又二百日あまりの船待して對馬へわたり、何やかやとの隙入、あたる三年の今日、やつと戻つた。珍しい國の咄はゆるくと致しませう。先づ長長の留主、いかい御世話と、たくりかけて咄す内より、同行中のびつくり、お春が當惑。死なしやつたと思つて、後夫を持ちましたと打ちつけて言ひにくよ、六右衛門はそこ氣味わるう挨拶なし。皆々顔を見合せて吐息をつき、誰何といふ者もなければ、講頭の幾野屋藤左衛門といふ分別者、見かねて罷出で、先は御堅固で久々の歸國、この上もなきめでたい事。それにつき氣の毒なはお春殿、其許の事を泣きこがれて、三年の此春まで、きつと待ちてござつたれど、ついぞに風の便もなければ、死にめされたに究めて、春の末つかた、爰に居らるよ六右衛門殿もやめの事、殊に按摩は先々の壽齋殿のめされた醫者のはし、似よりな事にて談合極り、しつかへ人に入られました。其許の事わすれぬ證據は今日の法事、そこへ戻つて見えたゆゑ、差しあたつて當惑の體。だまつて居てもつまらず。年役に咄しますると聞く内より、傳三郎大きに腹立てよ、不心中者密夫と、前後も聞きわけぬ憤に、聲あらくなりて刃物ざんまい。六右衛門は目かい不自由の身皆様よろしく御挨拶をと、おろ／＼と涙ぐむ。お春は汗になつて返答なし。同行中寄つ

しつかへ人
後夫

おろ／＼と
泣く貌

心外—心な
らぬ事

てかよつて、傳三郎を抱へすくめて働せず。藤左衛門暫思案して、これは傳三殿の短氣といふ物。手前が了簡を聞かつしやれ。其許の胸のすむやう、六右衛門殿も落付手段、お春殿も二人の夫へ云譯のしやう。お氣には參るまいなれど、愚案の通り申して見ませう。先づ難船にて生死の知れぬ其許を、三年待つて居られたれば、お春殿の不心底とも云はれますまい。又六右衛門殿も先の人が戻られたとて、私はお暇申しませう。是で緩となされませと、出ていぬる家もなし。三人の尤を一にして、丸う治める時は、もとの傳三郎殿は此家の名前をつぎ、お春殿と夫婦に成り、相續を致さるべし。又六右衛門殿の事は、此鄰の借屋を明けさせて、萬事此内よりの賄、お春殿の妾分になりて事を濟さるべし。心外にも思し召されうが、かうした間違と、其許の目の不自由なに免じて、堪忍へさつしやれと、事をわけたる挨拶に、何が扱、傳三郎殿さへ得心ならば私はと、おとなしき詞にむかふ刃なく、其まよに治りて、傳三郎はもとの夫婦。六右衛門は男妾。女房一人に二人のますらを、友しら髪まで意恨なく打語らひ、七十三と六十八で二人の夫はすぎゆきしかど、お春はやつぱり二十四五の女房ざかり。玉手箱の千歳をこめし浦島が血脉と、聞く人感じ羨みぬ。媒婆が駈けあるきて、身代の能い器量の能い、

いつまでも年のよらぬ受合の女房と、いひ廻つて聲えらみ、是ばかりは媒口ならず。

第三 織姫のほつとり者は取りて置の玉手箱

めんような
—面妖にて
あやしき意
傷寒論—醫
書漢の張機
の著

夏の夜は浦島が子の箱なれや、はかなく明けてくやしからまし。唐の則天皇后といふは、天性の姪亂にて、文宗高宗の二皇を追ひたふし、白馬寺の懷義和尚の精進料理に喰ひつき、張氏兄弟が男ぶりになづまれて、其身七旬にかたぶきても、浅つけ程の皺もよらず、若き昔にかはらで、油ぎりたる佛は、お春が身の上によそならず。三人の夫を喰ひ殺しても、眉目容貌はもとより心の若々しさ、一つとして古びのこぬは、我ながらもめんような玉手箱の奇特と、神酒を供へ燈明をてらして、彌勒の代までもかたち替らで、よい男百人も持しかへさせ給へと、朝夕いのるかひ有りて、成相寺の住持の甥多門、幼少より京學にのほせしが、今年廿五歳にて本國なつかしく下りしを、すよめこみて伯父坊の媒、儒は宇野三平が書生、醫門は古法を信じて、傷寒論に臆説の見識自慢。爰らまれなる博識に、上京風のいたり仕出な男ぶり、お春深くなづみて、此人こそは何時までも年よらであれかしと、玉手箱がま一つほしい心入。されば醫者と干蕪は若い内には

葛だまりー
葛粉を煮固
めたるもの
をいふ

きりはたり
てふー機を
おる音

木折ーすぐ

賞翫せず。汗吐下梅毒の古方は人恐れて、後藤流とやら云ふものは、荒療治でこはい物ぢやけなと、田舎形氣にかつつけねば、錢と間とを友として、久世戸の文珠に日詣。門前の茶店にきせる一本のたのしみ、知惠の餅、思案酒に祇園南禪寺の葛だまりなつかしく、橋立に遊びて、一盞の酔のうち、詩作に自負をあらはし、夕日の浦に舟をよせては、細川幽齋が移しうゑし吉野山に、むかしを感じつゝ、心のゆくまゝ成るたのしみにも、まかせぬは繩手石垣の色酒。寝衣の油くさきも、宿の大夜著に勝りてをかしき物をと、大切がる女房に、聞かさぬやうの獨言は、ねられぬ夜ざえの樂なるべし。されば此宮津の地は、いにしへいかなる織姫の跡とめて、かよるすさびを傳へけん。都の西陣におとりなき織殿、五百機たてよ、きりはたりてふ丹後ちりめん丹後縞。色なる絹のかぎりを織出せる、夏びきの手引の絲くり女とて、此里の女原。小姫の比より蠶のわざになれぬれば、自然に育も鄙びず、なよやかなる立ふるまひは、田舎に京の女房ぶり多かる中にも、ちかき岩瀧村の小染とて、器量はもとより心だて出過ぎず、しめり豆ならぬ仕出、今小式部といひはやして、近郷の名うて者。いつの比よりか、多門に見そめられて、都の水に角とれて、木折ならぬ手くだに仕かけられ、一二夜のたはぶれも、

なる木を折
たるやうに
て、そつけ
なきこと
しつほりー
睦言
小糠三合ー
諺に、小糠
三合持たら
入婿すな
山の神ー妻

度かさなりて可愛さもまし、小染が兄は金太郎といふ漁人、おもてむきに對面し、ゆくゆくまでも見放すまじ。足下のおゆるし有るならばと、浮氣ならぬ相談さらりとすみて、上宮津のかたかけに藪がくれなる妾宅。笈の音のとくくと枕に響く小夜のかね言。此しつほりは都にもあらぬいたり、心ゆりして契りしに、天の口が鄰のみそこし婆が鼻の下へ宿替し、壁の耳に生ひさがりが出来きて、女房お春が煙となり、付けつ廻しつづの恪氣も、心ばかりは老女房のしなせに小腹はたてど、小糠三合の聖語、耳の底にありて胸をさすり、十日一月通路をたちて納得させんと、敷居一寸出ずに居れば、女房の機嫌はよけれども、小染が方に心をいり、此まよにして捨て給はば、いつそ死ぬると、藝氣のなき田舎娘の一筋をあしらひかね、そなたを捨てよい物か。去るにても山の神が恪氣のつらにくさ、若しやつれても奔らうかと、此比は引取りて錢一文の自由もさせねば、駈落せんにもてだてなし。戀の道の發明は女こそさかしきに、何とした物であると、さすがの學者も、此道にはゆきつまつたる溜息に、小染も涙をとどめて、始より主あるお前の事なれば、まさかは死ぬると極めてをりますれども、さきの世で女夫にならるゝも嘘かして、お花半七佛といふも、終にをがんだ事もなし。お春様の事は咄にも聞きま

とつゝおひ
つゝかにか
くと思案に
くれて
左右―おと
づれ

地黄煎―藥
名、地黄の
根を飴に和
へて製した

した。いつまで生きてござつても、お年のよらぬ不思議なおうまれ、よそ並の人ならば、もはや七十ばかりの上様であらうのに、それなればお前と私は、世間はれて思ふまゝに女夫に成り、此悲しみはござるまいとのくやみ言。いか様替つた女房を持つて、つらい格氣にせたけられ、こちばかり年のよる事よ。因果人とは此二人ぢやと、手に手を取りて、かこち涙に目もあはで、あれる鼠の物さわがしく何をかぢるぞ。夜もすがら耳にかより、とつゝおひつの知恵袋、ほどけし趣向に心うきたちて、まだ夜深に別を告げ、必ずよい左右聞かすべしと、歸る足に町口の果物や、地黄煎玉二つ三つ袖にして宿に歸り、何けなきもてなしにて、お春にむかひ、かりそめの浮氣に、しばらくも其方の心をくるしめし事、今更恥しき次第、誤入りて、小染が事は今日こそまことに兄が方へ送り戻し、外へ縁につくる筈、この事さらに偽ならずと誓言だてに、お春が心はれ渡り、いつくよりも機嫌よく、寢酒の床に心ゆりて、よく寢入りしを伺ひて、そつとぬけ出で、彼地黄煎玉を取り出し、神棚の玉手箱にぬすくり付けて、さらぬ體に歸りて臥しぬ。其夜もこして二夜三夜、むつまじき相床も明の烏に起されて、是は晝ちやと起きたつ傍に、かはり果たるお春が佛に大きに驚き、是はどうぞ、お春ノとのり起されて欠

るもの

老のなみ―
老の皺

地獄落―鼠
を捕かる具

まじり、何としてけはしい老なりやうと、起きあがる拍子に腰がつくり。あゝどうやら致しましたと、いふ聲さへをかしく、一夜の間にそなたの妻かはりしは何いふことぞ。先づ鏡をと取出してあてがへば、私が姿が何とせしと、ふたを取つてさしむかへば、あら悲しや。きのふまで油ぎりたる女房の、たちまちに頭は夜半の霜を戴き、ひたひに老のなみ打ちよせて、腰に梓の弓さへはるに力なく、百とせちかき姫の姿に、お春は夢かとはかり、何ゆゑに此有様、いつまで草のとし波、誰なすわざに此佛。あがめ祭れる玉手箱を開きしはお主ならでと、恨みつ叩きつ泣きくどけば、多門さらく覺なし。先づ其箱改めんと神棚より取りおろせば、いつのまにかは鼠穴、一文餅程喰ひあけたり。是はいかい鼠のしわざ。にくしくと多門が詞に、手に取りみればこは淺間しや。かぢる物こそ多きに、此箱の喰ひざまはと、或はいかり或は泣き、箱を打付け打たよきて、涙に老を噛みませたるくり言。思へば敵は鼠ぞと、恨ばかりにとどまりて、地獄落升落。後は夜ごとにもどろみもせで、鴨居膳棚走りさき、手づかみの鼠狩に、近所鄰の悪口、猫いらす鼠取婆といひはやしぬ。多門お春にいふやう、かよる事も皆前世の因縁誰をか恨みん。今よりは女房の名を取りおいて、我爲には養母と、勝手だらけの孝行ぶ

九十九髪
老女の白髪

り。何といらへん九十九髪、いはでもこもる恨の涙。今はた残す言にも、我死しても有
ならば、一念のとどまる所。世の中の鼠のかぎり、殺しつくさである物かと、いかりさ
けびて死なれしより、此婆の靈を祭り、お猫様と尊敬して、鼠よけの守神。塚の石をと
りて家に祭れば、まさに鼠のあれぬよし、蠶飼する家ごとくに、悪鼠の難をたすかりける
と、幾野あたりの人には聞きし。

世間妾形氣 卷之二

第一 雛の酒所は山路のきも入鼻が附親

こよにしも何に匂ふらん女郎花、人のものいひさがにくき世に。なりのほれども、もと
よりさるべき筋ならぬは心かだましく、譏口勝ちて、己が利口をふるまふとて、つれ
そふ夫のぬかりを數ふるなど、多くは菩薩まさりの、足もめ肩うてから、するくの奥
様なり。在所の甥に跡やつて下されと、脚布のしめくよりより、いつしか一家の中も、
むつまじからぬ品に成るは膳の箸。妾と飯蛸はあれで果る物にして、女房は表向の呼む
かへをこそ、願はまほしきわざなれ。難波の梅のみばえより、色づきはつる妾種、十三
四よりめきくとおいぐろしく、前うしろ見る心つくより、宮芝居見あるきて、丁稚役
者に思はくの小さいづら、親の身にも、今時からき世にじんき巻しても、百を三文のむ
すび昆布結ばしても、一日に廿か三十のつまみ錢。まめしけのない手仕事さすのみか、
爹なし子の政道にあらぬ氣もせをやかうより、ぢやんぎり鍋へ入る事なれば、ひわ茶の

じんき―食
物、しのま
き
まめしげの
なき―面白

くなき

肝入一男女
の周旋者

ついまつ
歌かるた

木綿布子、青梅縞の類、繻子の裏打帯まとはして、氏なうて玉の輿の足代。かごや町の按摩取は去る御屋敷から扶持の來る咄。釣鐘町の糊屋の娘の産んだ子が、本町の何屋殿の代取なるよし。うまいづくしの口車に乗らぬ者もなく、それふくの生れだちに品定りて、年季、半季、月切、うち切と、思ひくゝの色稼。一割の兩口錢、五節句の付届。鹽鯛牛房添へて鏡するを上の品として、かさね草履一足、あらひ金のたばこ入、蜜柑饅頭の土産まで、出る息なしの世渡多かる中に、上町のすみどりや、天満に茶碗屋の狐婆、島の内の備安、順慶町の人形屋など、此道に名だたる肝入の兀頂。同じ流を西堀に汲みてしる、山路のお菊とて隠れなきしたもの、けふしも長月菊の節句とて、六そぢ過ぎぬる身も女の敷とて、雛祭おほめかしくものして、客あるふきさうぢ。伯母様のけふはよう呼びて下さんと、お梅、小吟、お石、おすが誘合て、足袋屋のお露さんは、お腹が痛いとして、ようお禮云うてというてでござんした。それは残多し事。さあ〜皆上つて、お雛様をいはうてと、人よりのよき住居さへお口かけて、十六疊六枚屏風引廻したる雛館によりたかりて、ついまつむべ山の遊。寺子けのぬけぬ聲に上の句のそら覺も、いづれなまめかしきけはひには、大象もよくつながらる髪の出來を褒めあふよ

評判あこぎ
一評判のか
すかずに

黄檗一黄檗
山禪宗の開
山
しんぞ一眞
に同じ
山上様一太
和金峰山を
いへるなる
べし

り、雛介金作の評判あこぎに、後は身の上の咄すみて、お常さんに云うて、笑ふ事がある。後の月お前と一所に目見えした、平野町の涼風堂といふ扇屋の旦那め、きつい贅こぎ。こゝ生とは見えぬ。いつ引こして此難波の住居ぞ。京はどこらと、あてするな事ぬかすゆゑ、どうしてそれが見えますえ。わたしは伏見の生、わけありて親父さんに生きわかれ。歸らしやるを待つ間に、三右衛門町の伯母さんを頼に、かよさんと一所に下つてさんじたと、出ほうだいに云うてのけたれば、伏見が古郷で親父に生きわかれとあれば、大かた宇治の黄檗へすわる後住のむかへに、唐か天竺へ供にやとはれたと、いふやうな事でがな有らず、長の留主さし詰りての此奉公でこそ、色氣のけても頼もしづくなら、そなたおふくろ二人までの賄何程の事ぞ。仕つけもせぬ身で、しらぬ人の機嫌とるは、さぞかし。しんぞ口から出した詞は、ひかぬ男とぬかすゆゑ、その詞につけてんで哀れらしう、いえ〜、とよさんは去年の四月に、山上様の戸明とやらいふ事に参り、天狗につかまれさんして、それから今に便がしれませぬ。御鬮にも八卦にも命が有りて、一度は戻らしやんと申しますゆゑ、悲しい中にも假初いたのしみ。かよさんは持病に頭痛が有りて、月のうちに五日七日は枕のあがらぬお人ゆゑ、わたしが女の身

御靈様一六月十四日の祇園まつり

其家の白鼠一家の役に立つ老功の番頭

でやる方もなく、恥かしい奉公を致しますと、涙まじりに眞實らしうやつたれば、それは不便な身の上。聞いた上は見捨ぬぞ。きつと世話してやる事ぢや。頼もしうおもへと、ぬかすのが半分の半分に聞きて、一月と二月はかよりをらうと思つたのに、其翌の朝、銀一兩で詫言して來をつたけな。憎さも憎しと、此間とよさんとつれ立ちて、御靈様へ参つたとき、平野町を心がけて通つたら、一間半口のきたない扇屋、店のはなで、錢なら五文の事を芋賣と喧嘩して居をつたを、きつと睨んでこましたら、あつちにもわしを見てから、これ芋屋、天狗につかまれたと思つて、五文弱みを喰ふぞと、ぬかしくさつたと咄せば、それは憎てらしい事で有つたなあ。お梅さんのいひぢや通りに、茶屋のおやまが來る粹よりも、こぬ野暮がしにくいといふけな。流をたてる者のいふことは、それに違つたことではない。鞞の干鯛屋の番頭といふもの、新町島の内がよひに、親方の手前二三度も不埒な品も有つたとの咄。今はきつとしまりて其家の白鼠、すいもあましも知りぬいて居る相手ゆゑ、こちから何もかも打ちあけて、實づくしの寢物語。月に六日の定の外にも参らねばならぬしかけ。明晩われら手すきなれど、是へ参つても、てつきり上町の伯母様へ灸するに、おことわりの有りさうな事。いかさま其方だちの

國府一國府煙草

色柄にぎりて色事に關係して

背中には、生灸のたやされぬ義理合ゆゑ、おのづと達者で、一月に五六人もお勤なされても、跡のいたまぬと申す物と、憎てらしいわろ口なれど、さすがに太夫遊もした程有りて、此たばこ入をもてというて、國府一たま添へてくれたが、拾ふより下にはつかぬくれ物と、出してひけらかすれば、花やおすが手枕ながら、お前がたにいうておく事がある。長堀の石屋とて六十ばかりのかた藏、兀天窓に黒紬の衿まき、いつも白茶の木綿羽織に、紋はたしか丸の内に抱袴。すみどりの紙入に、文字替の錢を鞋につけて居る親仁。それはく、六日の勤を三日にことわりいうても、身の痛に成るつよさ。もし其親仁なら、始めから言譯いうて戻りなされと、口々のそしりはしりが、はしりもとへ聞えて、あるじのお菊料理ごしらへも大かたに座敷へ出で、さきからの咄は、打とけての憂鬱はらしとは云ひながら、あまりなるかけ口。人も聞くぞかし。さる事なくしてさへ、色柄にぎりて揚屋のかしかりの諸わけに陥りたる衆は、妾者はかへりて實なき仕出と、一概に定めらるゝ事も無理ならず。妾はもと地女にて、宿の妻にひとしく、はやり詞しらす。口舌不得手にて、生娘の心もち、ことに初目見はいつも嫁入の夜の恥しく、なじみかさねては實すくなからず。一際しめやかならでは、心のとまる物ならず。

はずはな
浮氣なる

ありべか
りありふ
れたる

いきばり
意氣張

茶屋者は多くの客にあふを全盛として、妾者は一人の男にまもらるゝを、おのがさかえとする物ぞ。只かよさんの爲に、恥しい奉公を致します。お心替らずお見捨なうよりは、せりふ有るまじき物を、さまざまのはでな詞づかひ、はずはな物すきより、かへつて茶屋者の第二におちて、地女のまこと仕出はどこへかゆき、終に人のさけすみにあふ事ぞ。此道のかく成りゆくは、よせてはかへる浮枕、月切とのみ思うてよりの事。ええうにする奉公ならば、三人五人にもかよらねば、髪かしら足袋までのつばめあはぬ事是非もなし。灸するゑにゆくの、芝居見にゆくと、ありべかよりの虚言も、今更とがむる愚痴な世界にもあらねば、新しき手くだにも及ばず。只おほこに誠ふかく見ゆるには、月もかさなりてかはゆく成り、長に極めて浮世小路砂原の住居より、後は宿の妻とも成りのほらるゝは、茶屋者のいきはりより出づるとは格別の事ぞ。かならずく、一月切のかけ流しなる心いきは、よろしからぬ事と、長談義の最中へ、お菊様お宿にござりますかと男の聲。どなたぞと立出で、是はしたり。おれん様の所の久七殿。ようこそ、さあ掛けさんせと、あいぐろしき挨拶に手をつかへ、お上に申して居られます。今日は菊のお節句、めでたう存じます。この菊の花は高津の植木屋吉介方より、お雛様にとこし

おすそわけ
一分配
加賀笠一加
賀國より出
すすげ笠
虎屋伊織
山城國伏見
町なる饅頭
屋

ました見事な花ゆゑ、筒のまよにおくります。又此重の内もお雛様へ供へまして荒しましたれど、少しおすそわけ申しますると差出す。加賀笠ほどな大菊にそへて、時代、蒔繪の重箱に、虎屋伊織が金糖もち五十。是はく、まあお珍しい。けつこうなお菓子、見事な花、さつそく賞玩致しませう。この間は何やかやにまぎれて、お見廻も申さぬが、お上にも御機嫌はよござりますか。幸こちも雛様のお神酒、内がたのやうな結構な酒ではなけれど、一つまるつて下さんと、有りあふどさん、盃にもてなせば、久七是は有がたい。左様ならお辭義なしに一つたべます。いつそこの茶碗に致しませうと、一つのんでの機嫌上戸。内にも酒は、朝ぬつと起きるから寝ますまで、出入の道具屋衆や醫者衆が相がはりに見えて、盃の出つづけ、毎日三斗といふ酒のいらぬ日は、ござりませぬけれど、私共は吸物の下たいたり、風呂たいたりして、一向ゆるりと一つ下されます隙がござらぬ。いかさま、人の果報と云ふものは結構な物。手前のおれん様のやうな、うまい身ぶんと申しては、廣い大阪にも澤山はござりますまい。不斷ちりめん羽二重を、五六つ引きかさねて、ちよつとどれへござるにも、手竹輿にめして黒土ふます。芝居はいつも初日、棧敷を西の三四間めに極め、勸進能、月見、花見と、氣に入つ

末社一幫間
伊豆藏一貞
享年中江戸
本町一丁目
にありし吳
服店

でつち打出
した云々一
雙六にて調
一を打出せ
る如き幸運
なる義

た末社衆を引きつれてのお出。内にござれば琴、三味せん、香、茶の湯と取りかへ引きかへてのお鬱散。裸人形につぶれます裂ばかりが、三井、伊豆藏へ一節季五十兩づつのお拂。御自身のお召しなさるよお小袖はもとよりの事。帯は折りてたよめば、折目がつくとて、帯箱といふ物をお誂へなされましたに、此繁花の地でも、ない物はないに極りました。長さ一丈一尺、幅一尺八寸の島桐の一枚板。せんじ詰つて佐渡とやらいふ遠い國へ挽に参りましたけな。中々本家の方の奥様でも、あのやうな樂はなされまい。あんまりお隙なゆゑ、此間も旦那様と何やらいさかひが出来まして、茶の湯の茶碗をおれん様に取りて、ほつて破らしやりましたが、あとで聞けば紅葉五器とやらいふ名の茶碗で、七八十兩程する物と、道具屋衆の咄。わたしらが身體を葬禮ごみに賣つても、其茶碗のかけでもない事と、心があぢきなう成りましたと咄すにぞ、扱もく聞い

おづ／＼
怖ぢつ

濕病一徹毒
いづましい
一厭はしき

まの浦の鹽なれ衣しみたれし、古裕の上に帯さへせず、前垂の紐引きしめて、かご島下駄の音せぬやうに内へ入りて、伯母様、この間はいかい御厄介に成りましたのよ。それからお禮に出ませうと存じたばかり、其あけの日は、どうか腹がにがりました出ませなんだが、それから三四日も、こちのお人の腫物がわづらひまして、手がはなれませぬゆゑのよ。忘れちや居りませぬけにと、おづ／＼腰をかくれば、お菊も茶を汲みてさし出し、それからわしも便したかつたれど、節季前なり、何やかやで不沙汰ばかり、そして内がたのはすぐれもせずか、ほんにお前はいかい苦勞をしてぢやのうと云ふに、彼鼻うち涙ぐみて、いかさま、此やうにつらい世を渡りますも、皆お主のばちでがな。悲しいあまりのお咄を致しますのよ。こちとら女夫は藝州廣島にて、何の何某といふ三百石どりの家をつて、だんなのお手がかより、お妾に成りましたけに、こちのお人はお草履とりの奉公人。ふと申しかはしてお國を立ちのき、大阪へまるつたけに、なじみのないに、こちのお人が今の濕病のよ。いづましい病ぢやけに、人ばたらきもならず、けふ此比のめいわく。恥しい事も忘れて、伯母様のやつかいに成りますのよ。又こよひはお客様にやくそく致した夜なれば、小宿まで出でまする。たび／＼ながら伯母様の著物かし

畫比なる一
中ぶるなる

口入一周旋
業者

蜘蛛の園一蛛
の絲

て下されといふより、是をとて出して著する畫比なる糸縞の薄綿、黒繻子の中幅帯にし
かへさして、此間もいうて置いた通り、さきへは去る浪人衆の死にわかれというてある
程に、其口のちがはぬやうにと、お菊がさしづ。心得ました、皆様これにゆるりと咄さし
やりませよと、出て行くうしろ影に、皆々哀をもよほしぬ。此女房男の長わづらひより
忍のつとめ、一月定めて錢壹貫文の内を、口入に四百の口錢。扱も世はさまんゝのある
物やと可笑しくもかなし。

第二 敷金の二百兩はあいた口へ焼餅屋

蜘蛛の園にあれたる駒は繫ぐとも、ふたみちかける人はたのまじ。外姪の誘、男女ともに
慎むべき第一ながら、薫る蚊遣の夕涼み床、小夜の巨燵の手そよぶり、ありやうが眞事
の浮氣勝なる世の中。今は貴布ねの山風に、鐵輪のともしあふたねは、嫁入の輿も宇治
橋を大手ふつてぞ通りぬ。日本武の尊の吾妻としたはれしより、東とよびて、水くさか
らぬ人心。すんと惚れたと出かけては、みさを尖きを江戸の意氣張。葭原品川の諸譯は
もとより、地女でもまさかその、烈女がいのちの塵芥、捨られた物ではあるまじ。傳馬

紙花一纏頭
猪牙一猪牙
船、遊里に
通ふ舟
薄雪仕出し
一福やかに
愛敬ある風
して
なれ過ぎた
一古び汚れ
たる

町の呉服所、本家は伊勢の出店にて、白子屋の三郎七、大名方の御立入多く、軒ならび
の一番手といふ大商人。掘ぬき井戸の底しれぬ身代に、旦那三郎七三十に足らぬ若鳥な
れど、十露盤にぬけめなき掛引、しかも頑愚氣質にもあらず。折々は大門のむかひ提燈
の舟宿の紙花など角のとれた取捌。いやでなけれど昵近もせず。産ながらの粹方なれば、
押しきる猪牙の一夜流なる色よりはと、いつの間に取りよせしぞ。千住の貸座敷に、廿
三四の姫うるり、薄雪仕出しでぬるからぬ立ふるまひ。おすみとつけしも所から、名に
し河邊の都鳥にも恥ぢぬ器量の自慢とぞ聞えし。どこも此身は御退屈、隙ふさぎなる縫
くより、帯に房つけ笠の紐、紅絹の小猿に豆巾著の手なぐさみ。十種香、茶の湯、琴、三
味線、どれ友となきつれゝに、堺町木挽町の芝居へも、狂言のかはるごに、一度も
かよさぬ。幫間には駿河町の富士屋八左衛門とて、京大阪はおるか、府中三國の色酒ま
で、しみこんだ野等道具や、なれ過ぎた黒羽織の、脱けばまよのしこなし風。晝夜
を分かずはまりこみて、三郎七がお髭の塵とり、半太夫のつれ弾。伊勢音頭は旦那の事
ぢや。其ふしがいきませぬと、あぢな所を堪能さして、心やすくなる程、おすみには遠
慮がちなる挨拶も、幫間功ある男なりけり。此座敷のかい鄰なる焼餅屋傳介、壁あはせ

入津―輸入

ぼつかりー
ほかりに同
じ明の義

の事とて、毎日の見舞も生物に氣づかひけなる親仁なれば、勝手廻のそこを如才だ
 らけの忠義者。二人の下女が陰口も、八左衛門様はよい氣だて、あの傳介の慾面と、憎
 みたてるも道理なり。ある時三郎七傳介一人つれ立ちて、淺草の觀音參の道すがら、
 扱親仁そちにきまつて談合せねばならぬ事がある。外でもない。おすみが事、倦いたと
 云うでは根からないが、今度我らも長崎へ繻子ちりめん織物の類が、たと入津したに
 付いて、一下くだつて來るが、終半季ばかりと思へど、上方も見物がてら、凡そ一年際ど
 る所存ゆゑ、おすみが事もとても女房にするではなし。爰は一段よい仕舞所と思つて居
 る。たんとの事はせまいなれど、二百兩そこらはつけて片付うといふ胸。親もない彼れ
 がこと、いつそそなた親分に成りて、縁につけて呉れまいかと、ほつかりと云はるよに、
 傳介興をさまし、旦那、それは誠でござりますか。私はとんと途方を失ひました。一年
 二年お留主で御座りませうと、はどかりながら私がお預り申しますれば、お案じなさる
 る事はござりませぬ。左様な事をおすみ様のお聞きなされたらば、御當惑なされませう。
 御座興ならば旦那お胸慾でござりますといふを、いや〜座興でないぞ。眞實ぢや。留
 主心もとないとの事にもあらず。女房子のある我ら事、末かけてともならぬ品。おす

手段といつ
ば―手段と
言はば

一分―面目
に同じ

行器―食器

みが爲もよいなれば、是非にたのむ引きしはせぬ。扱てそこに又我らが手段といつば、
 あの富士八もいつまで寡で居やうより、似合の縁なり氣中もした中なれば、あの男に
 遣したい。此思案はどうあろう。女房でも持たしたら、向後家業も精出すである。すれ
 ば互の爲といふ物。此詞反古にしては、我ら一分たぬなり。きつと世話してたもろか
 と、僞けのなき談合に、旦那の思召極りましたら、私は世話致しうち、とくとお定め遊
 ばせ。いや〜我らはちがはせぬ。おすみにとくと呑みこますうち、そちは始終をしら
 ぬふりと、あらまし内證かためつと、別れて宿へかへりけるが、其事終に傳介が媒介に
 て、親分やら仲人やらで、丸うをさまる道行にも、八左衛門が數遍の辭退。粹に似合は
 ぬかた藏と、三郎七がしひぶんに、夢なら醒めなとかしこまる。おすみも幾たびか、主
 様に放れて外へとてゆく心はなし。高麗唐土のお留主でも、幾とせなりと待つ心。それ
 もお赦なきならば、よしや、此身は墨染の尼となりても、女の道はそむくまじと泣口説
 くを、さうではないぞ。さりとては世になき例ぢや有るまいし、心底きつと嬉しいと、
 これもすかしつ割口説に、涙の中の得心なり。扱日を定めて、おすみが手道具、簞笥五
 棹、夜具三荷、櫛笥、琴箱、松明、行器、あらましざつと十八荷に、二百兩の敷金も、

分一致一徳川時代の奴詞にて分は接頭語なり

盃のさざんざに一盃の忙しき獻酬に

わけだち一條理を糺明すること

跡の跡まで頼しい諸譯ぢやと、傳介が足かぎりに分一致す爪だくみ。旦那が昨日おつしやるは、表向の嫁入格式だての譯ならねば、おすみを先へ入りこまし、跡は我らが呑込みて、諸式も送遣はせよとお心付、これもつてよい手つがひ。先婚禮の日は何日か。上段なるとは嫁取よし。おすみは駕にて綿帽子、傳介がせんだく袴、糊けのある仲人顔に引きそうて、駿河町の富士屋方へなりこめば、八左衛門も出でむかひ、待女郎も花聲も、かね合したる寡住。盃のさざんざに三國一の果報者と、傳介がもつれくだ、南無三かんじんのことを失念したりと、懷中より一封を出し、これはあらたまつた様なれど、跡からまるる荷物を目録。今夜盃の上で披露せよとて渡されしと取出せば、これは丁寧ななされかた。いで拜見と封め切りて開きみれば、目録にはあらず、一書の文なりけり。

一おすみ。とし月不便をかけ遣し候所、我ら目を掠め八左衛門と竊にこんたん致し候うて、すなはち鄰傳介諸事呑込み申候事、たしかに聞届け候。早速わけだち致し申候はんと存候へども、我等名も立ち候事なれば、此度大やうに取りはからひ致し候事、過分に存られべく候。

こんたん一たくみにてつくらひ一修繕の義

一此諸譯のはじめは、當六月兩國の花火見物、舟にて我等まかり出候所、本家より御屋敷方急用申参り、手代ども差越候ゆる、すぐに駕にて同道致し候時、八左衛門に舟の留主預け申候。其の夜灰くらがりが不埒の發旦に候。申さずともそなた二人共心に有之候事。
一其後座敷にては我等参り候程もはかられず。又は召使の女共が手前をほどかり、八左衛門こんたんにて、鄰の傳介方を神かけて頼み、中宿に致し候。傳介儀貪慾の義理しらすゆる、わづかの袖の下にほだされ、あるまじき不埒を受込み候。當八月傳介方内普請、店まはりのつくらひ、竈などつきかへ候も、おすみまかなひにて出来候よし。其節聞とどけ候。
一當八月。召使の下女たけ事。其譯どり候ゆる、繻子の帯一筋遣しこまづけ候へども、猶口がるき者ゆる心元なく、九月の出がはりに今日ばかりの所、不勤のよしにて、いとまつかはし候事。
右のあらまし一々聞届け申候へども、右申すごとく微細にしらべ候ては、我らかへつて一分のすたる品に候へば、よくくこらへ、此方より縁に取組申候。其段きつ

と恩がましく候間、三人共おろそかに存申さるまじく候。しかし著替手道具はせめてもの胸ばらしに候ゆるゑ、一も遣はし申さず候。二百兩の枕金尤僞に候。もはや今夕手代共に家内取拂ひ申付候。是にて濟せ候段かへすく仕合成る方々に候。むくい程わきまへらるべく候以上。

九月二十八日

三郎七

八左衛門殿

おすみ殿

傳介殿

よみをはりて、三人とも途方にくれて物もいはれず。土器酒のほろ酔も、蝶花形の夢とさめて、糠悦の花聲に、丸のはだかの嫁御寮。手ふり棒の仲人と、これを合せて三々九度。面目なさが又とたまらず。身上すつきり駿河町の住居も疵持足。其後はどうなつやたら噂もきかず。三郎七が發明、さりとは手段もあればある物。

第三 若後家の寺參はてつきり仕立物屋の宿替

蝶花形―婚
禮用の銚子
提子につけ
ある紙折の
蝶の形
糠悦―實質
なき悦

阿迦―閑伽
に同じ、水
のこと

髪のかくり
―髪の様子
咽かわく―
羨む

舌なめすり

極らくの玉の臺のはちす葉に、我をいざなへゆらぐ玉の緒。彼志賀寺の老法師が、修驗の月の明らかなるも、情の道にはぐれては、闇の闇なるたよすまひ。初音のけふの玉はばき、手に取るからに妄執の雲消えて、又正覺に立歸りしは、仇惚ならぬ誠より、眞の道も得やすしとかや。女房さかりの二鬢が手折る櫛はかざしの櫻、阿迦のそよぎも思ひさしの酒事と、見ゆる凡僧の心ならば、眞如の月は見えぬ筈のもの。一念の往生も不の字なるべきか。然れども牛馬はくはぬ物と心得たるは、まだしもの取得ぞかし。京の東邊建仁寺町に、仕立物屋吟七とて、一間半口に折障子さしこめたる、家内は姉のお糸といふ若後家と二人寡の過ぎやすき世帯方。近比西京よりの引こしなれば、近所鄰もなじみ薄く、うひくしき所がらにも、姉のお糸が器量のうはさ。年は三十でもあろうか。脊恰好爪はづれ中肉なれど尋常にて、寢起からも笑顔のすき通る髪のかより、あれが後家かと思ふるたびに、咽かわかさぬはなかりけり。しかも心だておとなしきやら、朝夕の佛壇に、過ぎゆかれし人の菩提を念比に吊ひて、間暇さへあればそろくと、知恩院、誓願寺にあゆみ運び、水晶の念珠につたふ涙の神妙さ。思はくよする人もあまた有る中に、寺方の和尚談義僧、後家とさへいや、舌なめすりまして、お糸が色よきに現ぬかして、

して一垂涎
三尺の思を
よせて

黒袖一言う
て呉れの意
をかけた

常陸帯一正
月十四日相
思せし男女

俗めらに打つて取られぬさきにと、千束の文ことばの媒、仕立物に事よせて、白無垢づきん、袷袢、衣ゆがんでなりとも苦しからず。姉御の手際がゆかりごと、爰かしこから持ちせく中に、東山の六本杉とて、名うての悪僧、滅法寺、墮落院、无佛庵、梵妻寺、姪亂寺、殺生坊各々ぢぢくの釜焦連中、お糸にふかく思ひ川。心をよする始より、まさりおとりもあらずして、雨につけ風につけ、無事をとはせの送物。櫛、香包、南草入、不祥帽子の返事でも、せめてはいうて黒袖。つむがるよともよしや其、君が名による糸縞の、物ならなくに氣づよやと、負けずさらずに口説きけり。お糸も初の程にては、こは浅ましの戀衣と、なさけらしき答もせざりしが、あまり切なるこの人々の志、一度は捨し身なれども、戀てふ人も墨染を、色にかへてのかちごと、身をまかすとも未來の種と、心の紐は解けながら、どれへどうとも云はれぬしだら。此身はいづれ様へなりと、まかせ參す心なり。そなた様方の御中へ、身一つなけ出し候へば、よきにとばかりの返事なれば、六人の和尚打ちよりて、我こそ先の思はくなれ。愚僧がなづみ深かりし。さうはさせぬと角芽だちて、常陸帯のえにし引つぱり合に事はてねば、とかくは君が思ひざしのお蓋、それが輪廻の切所。恨はせじとかちけるを、弟の吟七もてあまし、いづ

名を記して
鹿島神社に
供へ婚を定
めし布の帯

しこり一凝
り固まれる

宮川町一京
都の陰間あ
る町

宵ぞめき一
宵の素見

れも様のお志、浅い深いもあらざれば、姉貴もとんと當惑。爰は私が存じ付、たとへば一年十二月を、二月づつ六人様にふりわけの御契。かたみ恨のないやうは、南無阿彌陀佛の六字のもみ鬮で、前番後番の月を定めましたらば、どうござりましやうぞと、したり顔にいひ出せば、六人の和尚横手を打つて、さりとては智恵がな粹方がな。それで我が一分はたつといふ物ぢやが、お糸殿さへとくしんなら、我々は一蓮托生、それに否應いふ者なしと、しこりかよつた談合に、お糸もつんと恥かしながら、とかくどうとも片付られぬ義理なれば、あなた方の思召、何しにもれます心ならずと、さつぱりこんたん極りて、其月々々の客坊もち。爰が出家ぞ。悟氣すな。はて禪一筋で寺開く法もあれと、天窓も中も丸う成りて、打ちこんじたる夜咄の、あたり月が亭主方。泥繩どちやう、貝焼のあばれ喰。衣は人目あればと、銘々箆筒一棹づつ、吟七が方に預け置き、皆一體の黒小袖に長羽織、頭巾すつほり打ちかぶりて、宮川町の宵ぞめき。非番の月は外稼ぎ、罪もむくいも忘れ果たる遊なりけり。ある夜吟七六人にむかひ、扱いづれも様のお心やすう御出下されますにつき、私、が内證の械もふり廻し易う成りましたも、全くお陰と兄弟ども悦んでをりまするに、近所のそねみつよく、又しても私どもを寄

わる達―そ
なた達

知識―僧

合て咄しまするに付ては、あなた方の事を何角と申しますけにござります。それではお寺のお名が立ちまする段、氣の毒に存じますゆゑ、爰をとんと宿替して、人目すくなき所をかり、ひそかにお出なさるを、目だちませぬこんたんが致したう存じますると、おとなしきいひかた。はて扱氣の細いわろ達。我々は少しも厭はねど、兄弟の心に住みにくく思つてなら、どれへ成りとも變宅めされ。いか様にこちとらも少しは世間を厭へて、さつそくに取りきまり、吟七が聞き出したる、二條新地の町はづれ、人さびしき表家をかり受けて、とやかくと取りしつらひたる内普請も、六箇寺の立合物好、いつ比が家移と取急いでぞ催しける。時しも秋の孟蘭盆會、棚經の世間役も仕廻るれば、町踊のにぎはしさに、なんといつれも家移の夜の一趣向。揃浴衣の雀をどり、奴仕立の客ぶりはどうあらう。こりや新しいと浮調子。奴鬘に編笠の紅絹紐は、頭首にかへて燃えたつ色の緋衣ならぬちりめんの腰纏絆、丸ぐけ帯の引結に、ぞれえく、やあとさの高聲は、たれか知識と、白河橋より三條通を河づたひ、二條新地の妾宅へをどりこんで、お糸吟七どうぢやく、かたづいたか。我ら今宵の一趣向、家移の壽をふみかためる。これを來て見よかしのえ。さあ滅法寺始めんかと立ちさわぐを、お糸は一向をしら

みすく、な
る云々―知
つてゐなが
らとぼけた
いひ方

わこれ達―
和御寮達に
て御身とい
ふこと
いなす―去

ぬ顔に物いはず。これは兄弟喧嘩かの。二人ともすまぬ顔色。腹立ち給ふな。これ君よと、しなだれかよるを、吟七取りて突倒し、大あくらに眉をしかめて、こなた衆はどこから來て、家移の取搜した所へ、仕組をどり所望にない。そして人の女房を取らへて不埒千萬。鼻あのわろだちは近付かと、取つてもつかぬ搦揆に、お糸も尖聲にて、ほんにをかしい衆ぢや。ぬしのある身を捉へて、なめ過ぎたものいひ、氣違か門たがひかと、みすくなるいひかたに、六人ながら肝をつぶし、こりや吟七。そりやどうした訟ふんぞ。一たいそち達は兄弟の筈ではないか。其上今まで此連中の世話に成りて、此家移の普請も誰が陰で出來きたとおもふ。まんざらのやり仕事にかけうとしたとて、それ喰う様なこちとらではない。屋財家財をあけ渡し、丸裸で出る氣なら、いがみなりとかたりなりと、勝手次第と口々に罵るを、吟七大きにいかり、何といふぞ。こちの内に有る道具が、どうしてわこれ達の物ぢやぞ。たしかな證據うけ給はらうと、大ごゑになりわけば、お糸が脊戸へ走り出で、やれ御近所の來てたまはれ。あばれ者が來ましたと、泣聲によびたけるにぞ、相借屋の者ばらくと、寄りて來る人からのすさまじさ。雲つくやうなあら男、先づ門しめよ。一人もいなすなと、理非もわけずきたよき立れば、をど

らす
相賊—仲間
の騙りもの

り笠、奴かづら、すつほくと脱けた跡は、殊勝けのなき坊主あたま。扱こそ、いよいよ質僧ども、町所を聞きて断れと、くちくにいひ立れば、先々いづれも待ちてたべ。我々は一寺の住職、かたり言いふやうな者にあらず、是には譯のある事なれど、かうみすくの争を、今更しらべる程となれば、我々が表向もすまぬしだら。是吟七、お糸女夫とは今が聞きはじめ、むごいめに合したの。出家六人たまにかけて、未來の程も思へよと、無念涙にくもり聲。まだ口きくか、光棍ども。其なりで一寺の住持とは腹いたし。はて殊勝な住持達、物をいはすな。引剥けと、相賊ども一時に寄りてかよつて、むき鬼燈。禪一でほひちらせば、ほうく廻けてぞかへりける。かよる工もあらおそろし。當世の髪切後家、釣るとおもふが釣らるゝで、遠慮ふかいは持ちかける。町よりお寺の小くらがり、無常のあらし戀風に、たふとい所が迷はする。扱此吟七が致しかた、憎くさも憎しと思へども、聲立られぬ内兜を、見すかした工面には力及ばず。明くれ心にくよくくと、忘れぬあまりに問ひ合せば、たばかられたも尤なれ。北野西陣にかくれなき、千本搦のお糸とて、寺々の柱くさらし。それなれば理と、皆得心はしたりしが、やつぱりそこに居る事かと、餘所ながら通つて見れば、二條新地にありし住居、六

棹の簞笥が元手にて、釣りならべたる古手店。小袖類、をどり浴衣、御出家方御ぞめき
鑿ありとは、さりとはむごいぞ、氣づよいぞ。

世間妾形氣 卷之三

第一 武士の矢たけ心もつまる所は金

いで人は言のみぞよき月草の、うつし心は色ことにして。人によりて法はふをとくといふ詞、
 佛ほとけも聖人せいじんも同じ思召しめしなるに、いかなれば菟う菟う色の親仁おやぢ、越中えちゅうふんどしは懸かけども、義理は
 かとず。死しねがな目くじろに取溜とりためたる金屎かなくそから生れた息子むすこ。西川さいがわが枕繪まくらゑに聲こゑがはりし
 て、手習たてなひより眉まゆなしの本詰ほんづめをこなす發明はつめいは、打ちたよきの強異見こほいけんにてはゆくまじ。色小
 白しろううらやかなる生付うまれつきは、女おんなの方かたより十路盤じろばんはちかせて置おかねば、一日いちにちもはやく器量きりやうよ
 き嫁よめをよびてあてがふべし。女房にようぼうに惚ほれたる男おとこの身代持みしろもちち崩くずすはまれなる物ぞ。孔子こうしに
 盗跖たうてきは生膽いきだんをぬかれんとし、褚遂良ちすいりやうは武后ぶこうの爲ために刑けいせらる。木折きせきの異見いけんより、親おやは慈愛じあい
 の道をうしなひ、子こは不孝ふかうのゆびざしに逢あふぞかし。方便ほうべんの空言うそは釋迦しやくかのおゆるし。お
 やまのにせ癩じやく、野郎やらうの素股すまたとらするもの、あながちに知るべからず。今の世に妾者めかけの
 色品しきひん多おほき中に、部屋へやめぐりといふ名目なめくの女おんなは、在江戶ざいごの武士方ぶしのかたの部屋へや々々々々へ呼びよせら

世間妾形氣

一六五

西川一浮世
 繪師西川祐
 信ならん
 本詰一とし
 ま藝者
 おやま一妓
 女

扇の一手一踊

れて、酒あひに琴、三味線、扇の一手する程の藝、さしてしほらしみもなく、たつしや一べんの仕こみ、大かた器量も十人並よりはうちばにて、郡内紬の類に縫紋の一向つきりとせねども、まづ第一には、武家方の挨拶をよく間に合せて、國々の訛詞ぐせを聞きわけ、萬事行儀がましければ、吉原へ手の届かぬ方の寵愛に預かる事なり。此筋の名うてもものに、かへり討の繁野といふ者あり。其名のいはれを知りたる人に尋ねしに、去る北國大名の御家中に、熊谷次郎太夫とて、千石頂戴の家柄、いまだ四十に足らぬ人物なれども、物堅き事石部金吉にて、忠義專の武士、殊に萬事發明なれば、江戸勤久しく年をかさねて、御大切の役目を承る。此次郎太夫天性儉約を肝要として、金銀を貯ふる事、いにしへの岡左内にもひとしき癖あれども、さすがに武士たる道をまもりて、頼しき志は深かりけり。かく久しき在番のうちにも、いまだ日本堤の舟やどに、流れよりし事なく、品川へとばす三枚肩は、どこの御屋敷の早打ぞと、尋ねるむくつけにも、折にふれては壯年の夜床さびしく、ひそかに出入の菓子屋をまねきて聲をひそめ、其方、つねく懇意に物語を致すにつき、誰々よりも頼しく存じまかりある。それに付きて我心腹の煩を咄し申す。かならず他言めさるれば、拙者武士道の恥辱になり申す事。拙者二十

石部金吉一
手堅き人

日本堤一淺
草より吉原
に行く間の
堤
早打一急使
者

江戸在
江戸の勤番
にあること

四歳の秋より江戸在番仰付られ、今年にて十三年。御本國に居る妻は、某二十三の時婚姻調ひ、わづか一年夫婦同じく臥し、同じく喰ひたるのみなり。恥しながら長夜などには、古郷の事を思出して、鬱々としてたのしみます。然れども武士たる者の、廓遊所などへ忍びある事、もし相知れる人にもあはぶ、一生の瑕瑾悔ゆるとも效なく、品によりて切腹を致さねば、ならぬ事もあるべし。高祿をいたゞき、重き主命をまもる身の、恥づべき第一ならずや。又妾などを召抱るものならば、本國の妻方へ聞えても、放埒と思ふ所もめいわく。爰をもつて其方に密々に相頼みたきは、何とぞ、不行作になき女の、刀さす道理も知りたる者あらば、一二回の鬱散を遂けたし。大切の金銀なれども、此密事において多少の費はいとふまじと、赤面汗を流して語らるれば、菓子屋上總をかきさをこらへ、何事を仰付られますと、存じをりましたに、左様の儀ならば、何よりいとやすき御用。今晚明夕の間にも、御注文相調へます事と申上れば、次郎太夫にがり切つて、これく、其方は何と心得られしぞ。賣女やうの望ならば、即刻にも間に合せ申すべき事。お江戸ひろしとて、左様の女早速に尋ねあたるべきか。一月二月遅く成りてもくるしからず。某が名の出ぬやうこそ大事なれ。不用意に事をはからひ、汚名を先祖に致す

賣女一遊女

石に根繼ぎ
一極めて堅
固なること
の諭

陶ゆゑ一考
ゆゑ

口入一肝煎
相對にて！
相談づくに
ての義

ことなれと、石に根繼ぎなるいひかた。上總かしこまり、旦那はかやうの儀、御案内にござりませぬゆゑ、左様に思召すは御尤。只今江戸にかぎらず、京、大阪、駿府にも御在番の方々の御酒の相手、お寝間のあけおろしまで、致します部屋めぐりと申す女、一年一月ないし一夜二夜にても、謝儀を定めて参ります者がござります。是をお伽に差上げまする胸ゆゑ、早速にお受申したのでござりますと云へば、次郎太夫横手を打つて、はて珍しい説を聞きしかな。左様の辨なる女のある事、只今が聞きはじめ、實にく、太平ならでは、其類の身過する者有るべからず。誠に治世のありがたき事ならずや。然らば其中にて随分はすはならぬ女を、先一夜會合いたしたし。其上にて又々再會の夜をはかるべし。此謝禮には干菓子一斤思ひ切りて調ふべしと、一廉心をはられし所が、金百疋には付けられず。是にても賣らぬよりはと、御用仰せ付られ有がたいと、百遍程いうて歸り、早速に口入を頼み、かの繁野を一夜百疋の相對にて、ひそかに次郎太夫方へ通達すれば、過分のよし仰せられて、手筈を定め、淺草の觀音前に小宿の世話まで、菓子屋受けこみ逢はせしに、繁野いづ方にて聞きしぞ、次郎太夫がよい物たんを持つて居る事をよく知り、初會にはしんじつに憶悦らするもてなし。次郎太夫ことの外に感心し、又か

得心一承知

さねてと別れしより、忘られぬ所ありしが、四五度にも及びし日に、繁野涙をはらくと流し、誠にかやうな恥しき宮仕を致しまするも、深きわけありての事。この程より厚きお情に預りまするに付きまして、あなたのやうな、誠あるお侍様をつひに見ませぬ。お頼しい所を見こみまして、私が身の一大事をあかしたう存じます。何事によらず、お得心下されませうやと云へば、實ある武士と見て頼みたきとある儀、刀の手前聞捨てにも成りがたし。命は主君に奉りし物、金銀は萬寶の第一、澤山にはせぬ物。其外の事ならば何事にもうけ給はり、届けてくれんとある詞に、手を合せてよろこび、先はさつそくのお受有がたう存じます。然らば一大事を明しまする。一通お聞きなされて下されませ。もと私は三州の生。先祖は岐阜中納言殿の御内にて、百々越前守とて忠功の武士。岐阜落城の節、搦手の大軍河田川に攻めよするを、三千の小勢にて三度までかけなやまし、終に討死せし大剛の家。父なる百々彌三兵衛まで六代の浪人、然るに淺井藤八と申す侍、何の意趣ありてか、父を闇打にして立退く。聞くとはひとしく母諸ともかけつけ申し候へども、もはや行方しれず。死骸のそばに落ちありし小柄を證據に、顔も容も知らぬ敵を女の身として、七年が間付けねらへども、尋ねあふべきやうもなし。江戸は諸國の

刀冥理一刀
冥利の意に
て武士の體
面を重んじ
て誓ふ語

豫讓一晉の
智伯の爲に
趙襄子を殺

武士の入りこみ所と、母諸とも此地へ移りしかど、浪人の家ことさら女の身、朝夕の煙もたえくくなれば、一は敵を尋ぬるため、又一つには誠あるお侍を見かけ、助太刀をも頼みません爲にこそ、此淺ましい身と成りくだりしなり。これまで多くの武士にも逢ひませしかど、あなた様のやうなる誠のお侍様を見受けませぬ。哀れ不便とも思しめさば、われく親子が力ともなりて、一太刀恨みさして給れと、一部始終を物がたれば、次郎太夫最前より諸手を組んで聞入りしが、手を打つて大きに感じ、さすが武士の胤とて、女には希なるたくましき根性、我を武士と見ての頼もだしがたし。刀冥理、ともく探し出して討たすべし。外に少の手がかりもなきかと尋ねれば、何も心あたりは無けれど、父の最期に抜合はされしと見えて、刀の切先に血がしたうてござりました。すれば相手も手を負ひしと申すもの。刀疵のある者こそと、帯紐といて、肌をさぐりますれども、いまだ尋ねあたりませぬといへば、尤々神妙なる計略。此後とても敵を尋ぬる手がかりなれば、多くの武士に枕をかはずべし。先祖も正しき其方。かくまでいやしき業をするとは思ふべからず。晉の豫讓は炭を呑みて其身を變じ、伍子胥は道に飢ゑて食を乞ふ。はげしきかな。孝成るかな。此一包は其方が母へ某が寸志ぞと、鼻紙にひん

し仇を報い
んとせし臣
伍子胥一父
兄の仇を報
ぜんとて吳
に奔り楚平
王を討ちし
人
家中一屋敷
藩邸
小指一情婦

ねぢて金子壹兩。いつまでも見捨てぬぞ、心おとすないぞをれと、いさみ進んで歸らるよ。されば此敵討うさんなる事、あの屋敷にも、この家中にも、助太刀を頼まれし者幾人といふ數をしらす。熊谷次郎太夫が傍輩岡部六之介といふ侍、前の丁子屋丁山に、所望せぬ小指ももらいし男。色友達の夜咄に、繁野が敵うちのはさ。次郎太夫が心を盡して、不便を加へるまで聞出し、てつきり此女くせものと、脇より傳手こしらへて向ひよれば、四五回すむと、はやくだんの助太刀を頼み出し、私が父は京の堀川にて、静四郎兵衛と申せし薙刀の名人、弟子のうちには澁谷藤作といひし侍、武藝の奥義を傳へぬを恨とて、父四郎兵衛殿の寢ごみへしかけ、蚊帳の四すみを切りおとして、だまし打に討ちて立ちのきました。私は其時は三つ四つの比ゆゑ、前後もわからず、其敵の顔も見しらず、か様の懐にだかれて、敵討の手がかりに、この江戸へ下りました。貧しきあまりにかやうな勤致しますも、一は敵にめぐりあはうかと、それをたのしみ、あはれ助太刀と成りて、敵のありかを尋ねて下さんせと、取付きて泣出せば、六之介さてこそと可笑しく、扱はそちは静四郎兵衛の息女か。其時は誠に乳呑子にてありしゆゑ見忘れたが、いかさま稚顔残りてあり。其方が志の切なるを感じて、我本名を申し聞すなり。我こそ其方が

きつさうー
顔色

付けねらふ澁谷藤作なるぞ。すなはち證據はそちが父四郎兵衛を討ちし時、寢ながら一
刀はらひし切先、わが内股にも付けられて、其疵久しくなやみしかば、今に跡の付きたり
しをこれ見よと、横根のなほりし癒口をまくりかけて見せ。さあ立ちあがつて勝負せよ
と、きつさうを替へてかよれば、繁野は口から出次第の敵討、うつ心もとよりあらう筈
もなし。さしあたつて返答も出さず。扱はおまへがとよさんを討たんした藤作様か。顔み
ぬさきは憎い〜と、思つて居たれど、此間から馴染かさねまして、情らしい殿御
ぶりに、恥かしながら惚れました。もはや敵うつ氣はござんせぬ。かへり討にして下さ
んせと、帯解いて抱付きしもをかし。よく〜聞けば、この女湯島の天神にて、軍書講
釋する朝倉一東といふ者の娘なるよし。此うはさ廣くなりて、かへり討の繁野とて、部
屋めぐりの名うて者、誰しらぬ人もなかりし。

第二 米市は日本一の大湊に買積の思入

鯢とるかしこき海の底までも、君だにすまば波路しのがん。心は法界にして無量なる物
ながら、一念のよる所多くは戀にとどまりて、銘々身分不相應の仕過しせぬ人もなけれ

今宮の心中
一淨瑠璃の
曲名近松門
左衛門の作

ど、それが中にもそろばんあり、果報有りて、身のをさまりよく狂ひやむ事ぞかし。船車
にもつまれぬ思の、うたてくも違ひて、親の讓塵灰のこらす人の物になして、はては
町々御評判の今宮の心中と、草雙紙の口ずさみにかゝるなど、其身にては底までゆかね
ば、生きてもの義理あるとは見えたり。其もとは皆金づくならでほかなるはすくなし。
さらば金さへあれば、世の中に何かは儘ならぬ事なきとて、銀子まうけの心付きそめて、
立出でて峰の雲、花の都の四條五條に所せきまで、建てならびたる商人、皆腹の中から
十露盤蝟のある人心。あれかこれかとも見れども、是ぞよき銀の蔓といふべき手業も見え
ず。只燃ゆる火の中にも、涼しい風が吹く物といふ禪宗のさとりやうに思つて居ね
ば、今時の商人心のゆりる物にもあらず。江戸は身上の定めかやと、歌にうたふ本町駿
河町さへ、昔とはことさびて、千兩の掘ぬき井戸も近年ほらする家も見えず。ましてや
小店商人の劔の刃を渡る世の中の姿、そろばん詰のちる才覺にも、大まうけあるべきと
も思はれず。まだしも大阪の堂島の米市こそ、千里一とはねの大商。六十餘州の大小名の
身代を受けこみて、日本國が一所へよるとは、よい事する時のやうな詞、偽ならず。千
三百六十軒の米仲買、米力兩替五十軒、ひとつにして千四百十軒の仲間。随分ちいさう

すつしりと
した一重味
のある

とちめん棒
をふりて一
急ぎ立ちて

積りて一軒に五人口、一人五匁雑用に當てよも、年分に壹萬二千七百貫目の歩口錢をさ
まらでは過されぬ所。それにつく仲衆、働人といふ者、草鞋しめはきて、矢立手拭はな
さぬ人柄に、島の内、曾根崎、新地の悪所狂につかひ捨てる銀、一節季に壹貫目づつは何
程の事にもあらず。道頓堀の芝居どもが、顔見世の初日の三ばん太鼓を、夜半過ぎても
打ちやまず。櫓下といふ名目の銀子を、今と成りて雲の裏まで借りあるきても出来ぬ
所。此人柄の中より北といふ字を先へ立て、十貫目箱二つ、すつしりとした意氣込。三
番叟に、よいよくの聲かけさするなど、又となきためし。それをつかふ上たる人の心
意氣はからるべし。ある人の岡目に、六十日に二萬貫目、年分に十二萬貫目の銀、此島
へ落ちてこねば、此所の諸商人まで門松立て、ものまうの聲きく事ならず。爰こそ人
の出世の種植うる土地と見立て、出かけて見れば、いかにも萬事大まかにて、有る無き
をくるします。さあつまらぬといふ時は、拾匁にとちめん棒をふりて、大三十日の夜半
ごろに、道具屋の戸をたよきて、佛壇戸棚を置質の談合。敷きて居る疊も、一疊を三分
のうり賃。銀受取りて賣渡したるしるしに、簞笥の小引出一つ抽いていぬれば、はや元朝
の壽。年禮にくる人の見るも恥しと、ぬいて去にし引出の跡に、女房の前だけかけて、

似つともあ
られ一似つ
つもあらね
ばの意か
堂島一大阪
にて米商の
ある所

飛鳥川一太
和國にあり
あすの縁詞
にて用ふ

人目繕ふ中にも、丹後の一番鱈は、是非大釜の上にぶらつかす事ぞかし。扱わつと寄る
初相場より、その十日には、さらりと小拂まで残りなくしめきり、春に春をかさねて八千
代の壽。又百貫目とらまへる事珍しからず。是扶桑の第一の都會、唐土の長安洛陽と
ても、此所に似つともあらね、鋤鎌の柄のゆに成るまでつかうたとて、いつかはと無分
別おこして、池田に鄰る櫻塚に、才太郎とて所ふかき大百姓。舟渡二つこへて五里に近き
道を、田畑家藏のこりなく持運び、堂島の人の雪踏のうらにつけてしまひし事、今更に
夢さめしとて、物がたき在所の一家は、人外と覺えてよせつけず。堂島通の内になじみ
かさねて、身代しまふ足代にもなりし蜷川の女郎、岸屋の藤野といふを身請して、曾根
崎の裏町に、夕顔咲ける垣根の内、池田山の愛宕火居ながら見ゆる座敷をかりて、櫻塚
より米商の足やすめにと、しつらひ置きし住居に身をよせて、飛鳥川にあすを如何にと
もあだてなく、なじみ深きお藤にさへ、身の上を打明けかねて、心を沖の日和見に、渡邊
橋に立明しつよ、何をあてなる浮雲の、空だのめなる身のあじきなく、よくくいはじ
と忍びしさへ、けふと成りてはつまらぬ盡し、聞いてお藤が胸打ちさわぎて、涙より外に
詞もなし。才太郎いふやう、そなたのしんてい常々あだならぬ志、一つとして忘れはせ

心のやる方
慰方

ぬ。かう仕果せしは、長からぬ縁の限にや有るらめ。京の親達へ一まづ歸りて、身のかたづきの談合もあれかし。今とてあかね中なれども、さらに心は残すまじ。逢見ぬとも心替らず、互に身のゆくすゑを神にいのりて、よき音信をきくまでのたのしみぞと、心おちたる男の詞に、なほも涙せきあへず。扱もく世の中に勤せし身は、女の淺ましきかぎりや、年月お世話に成りまらせて、あはれ我心の底をうらなくも見せしらせ申せしとこそ思ひしに、只今のお詞にて、今に流の身は誠すくなき遊をおほし止めて、かよる事をもいうて下さんすなれば、聞えませぬといふ恨さへ、我身に恥ぢて申されず。つとめて居りました節より、いつお心に違へし事もなく、まことを盡しましたればこそ、つらき苦界をのがる様になされては下れしぞかし。おち目には隙取らうと、よその女中はいうてか知らず。私ばかりは其やうなさもしい心露ばかりも持たねば、勿體ないながら、恨みませんより外に心のやる方なし。京の親達とて眞實のでもなし。たとへ血をわけて下さつたのにもせよ。かなしい奉公に賣りて下さる心入、ことさら丸八年も隔りては、親とは名ばかり頼しうも思はれず。又ぞや勤せよとあるとて、夫にはなれし女の身、親の爲なら是非もなきならひなれば、京へとては歸る心夢さ

お身のくる
まる！お身
の立つ
たもる程
賜はる程

らなし。お心たしかに思しかへて、又御出世の時を待ちて下さんせ。お前さへ御得心ならば、私が身をばもとの流に沈め、今までの親方さんに、何もかも打明けて、借らるよだけは借りましてなりとも、お身のくるまる御恩報が致しましたいと、實のまことに涙をそへていひ出れば、才太郎も嬉涙身にしみ通りて、さりとは志の程かたじけない。さういうてたもる程、又奉公をさす事が男の身では口惜い。忘れはせぬぞと、手を合せての悦、お藤は我身をそれに極めて、もとの親方へ二度のつとめ。岸屋榮五郎といふ男、粹といふ字には、命でもと思ひこんだる生付。さつそく呑みこみて、五十兩かして心のまよの奉公。才太郎は此金を肌につけて、命二つと思ひこみ、おのれ人並なるべきか。しばしの憂目は凌ぐとも、親の恩より義理の恩、金さへあらば報する物と、生付きたる大擱。心の矢猛はるくと、江戸のよしみを頼みにて、伊勢や尾張の海面に、過行く方の戀しさは、胸にあまれど腹さびしくて、忍涙にかれいひの、ほどへにけりな旅衣、きつと馴れにしつまからけ、錦よみなす蔦楓も、金の蔓なら眺もあかじ。あかね眺の山は富士の根いつとてか、歸る日をなんたのむの鷹の、君が方にぞよるとなく。あゆみつづけて十日旅。仙臺川岸に紅紐の八兵衛といふ大名奉公人の口入あり。此男は櫻塚の生

かれいひ
乾飯
たのむの鷹
田面に頼
をかけた

一口―山城
國紀伊郡に
あり
なら茶―奈
良茶飯
れまつた―
寝そべる

所で小口も利いたる者。伊丹の牛市に、男づくのいきさきにて、二三人に手疵を負はせ、江戸へ立ちのきて、五六年このかた爰に居くろめて、頼しづくの世渡。やうく尋ねあたりて、内に入れば、是はどうしたお下、薄々様子もうけたまはり、いかごと案じてをりました。扱お下の思召はと、頼しけなる詞に力を得、あらましの物語。先はおしたく風呂にめせと、心一ぱいの深切。旅草臥しばらく休息と、枕かりて横になるあたまの上へ、落ちかゝるやうな聲して、唐犬びたひの男、親方、おらは大膳太夫殿へなら有付くべい。今一口の長尾殿へはよしなさい。とても十兩や十五兩の給分では、なら茶、ぶつかけの錢にも足りない。爰にねまつた野郎も奉公人殿か。見た所が大が寸にはかゝるべいが、上方野郎はなましらけて、おかちにも道具にも親方の骨折だと、跡さきなしにきほふ所へ、廿四五の庸醫、檳榔子染の木綿衣装、羽織著物一對に、小脇指の柄絲きれて油じみたるもいぶせき人柄。御亭主昨日は始めて、段々のお世話。今朝より手前相應の口も申して參らぬかと尋ねれば、さればさき程相馬様から、外科本道かねて、十兩に二人扶持と申すがいうて来てござれど、おのぞみには足りませぬと云へば、それはなんほう末々の療治でござると申して、藥種屋の埃飲しても置かれませぬ。手前が身分を

大びらな銀
子―大金

入口商賣―
周旋屋

買出しする
仁―買出し
する人

賄ひまして、藥種膏藥の出所もござらぬ。又よろしい口もござらばと出でゆきぬ。才太郎亭主にむかひ、しらるゝ通の我等、高五百石にあまる田島、五とせの夢と失ひて、身すがらと成りくだりしは云ふてかへらず。とかく大びらな銀子まうけて、今一度古郷の松が見たし。當地の案内かつて知らねば、とかく力は貴様ぞと、ぶらさがりたる詞。日いかにも呑込ましたれど、私も此地へ下りまして、きざみたばこ上塵紙のかたけ賣。日に八九里づつの道を、足を棒にかけ廻りまして、小商のはかもゆかず。ことに諸色の高きにおはれ、水道の泥水さへ呑まるゝ事にあらず。うろくゝと致すうち、此家の死跡の入家致して此口入商賣。只今の江戸なか／＼大づかみなる事、小本錢にては見えわたらず。通町の大商人は多く京伊勢近江よりの出店にて、地のおひたちは希なり。千兩設けやすく、千兩出でやすし。淀河の水の味おわすれなく、江戸の濁水の御しんばうは、もとよりいつ御出世ともはかりがたし。とかく爰は思召をかへられて、お上りなさるゝが上分別と、實ある諫いかさまと思ふ程力落ちて、途方にくれたる體。八兵衛思案をめぐらして、折角のお下まんなざら手ふり棒にてお歸りなさるゝも残念。此郷に私内外の懇意、八丈絹の買出しする仁あれば、是へ御談合なされて、八丈物の思入はいかどといふ

氷の如き物
一刀劔

に、才太郎悦び、當世上方が八丈縞の時花る折から、せめてそれをともみ立の相談、鄰家の男頼しく、幸八丈へ出船の比なれば、才太郎も同船にて、伊豆の國なる八丈に漕渡り、好める縞模様思ふまゝにえらみて、五十兩の金有りだけの思入。上り日和の手つがひよく、名もしらぬ磯邊に泊舟せしに、其夜の九つばかりに、あやしき小舟一艘こぎ付けて、恐しけなる男五六人、氷のごとき物を拔持ちて、こなたの舟にとび乗、是は此わたり、海賊なるぞ。命をしくば荷物を渡せと、聲々に罵りければ、船中あわて騒ぎて逃げまどふを、はやく解に乗りてさるべし。命や取るべきかにとらむ眼に、心消えくとして、才太郎と水主一人、解に飛乗りて、磯にこぎよせて、人をしらす道もわかす逃げまどひて、足にまかせけるに、やうく夜明けて、爰はいつくにやと尋ぬるに、伊豆の内にて御崎といへる所なるよし。扱も淺ましや。かくまで悲しき事の續く物かは。

第三 二度の勤は定めなき世の蜺川の淵瀬

さりとも待し月日も過ぬれば、こや絶えはつる始ならん。去にても命の二つある物にしあらば、一つは捨てて愁をたちてん。一つは世に残りて、戀しき人に宮仕せばやと、か

大文字の送
火一七月十
六日京都如
意嶽にて大
の字形に火
を點するこ
と

こちたるは、とてもなるくり言。生は難し、死はやすし。生きてなれぬ事の、いかにあの世まよなるべきや。金は世の寶にて、かへりて人を損ふと、あながちに云ふべからず。人一生に福あり、禍あり。死なでつまらぬ大三十日ぞと思はば、伊勢へ年籠と出かくべし。三月の二日には天王寺に經供養の舞あり。五月の際には賀茂の足揃より上りて避くべし。七月は大文字の送火、九月八日桂の宮の相撲會、泉涌寺の舍利會、皆これ神佛の御めぐみ、命は捨てずとも、此厄難のがるよ方はあるぞかし。一夜こしては春の日のゆたかなる人心より、三が日に借金の日やすのつきしこと、神代よりあるべからず。蜺川の岸屋の藤野は、其後才太郎が音づれを待ちくらしして、つとめも可笑しからねども、親方榮五郎が残る所なき深切のうれしさに、奉公に陰ひなたなく、友傍輩とも情を盡して馴染みければ、其誠あるもてなしを感じぬ者もなかりけり。ある日朝迎より藤野をはじめ皆々歸りて、いつものごとく一所に打ちよりて、憎い可愛の人ごと、笑をつくりて咄して居る所へ、小女郎のおつる走來て、藤野さん、且那さんのお呼びなさつてといふより、何の御用ぞと立ちてゆけば、榮五郎、そなたにひそかに咄す事あり。こちへとつれて二階の小座敷へともなひ、聲をひくよして、とつくと心を落しつけて聞くべし。